



近藤勇卜土佐勤王黨

始

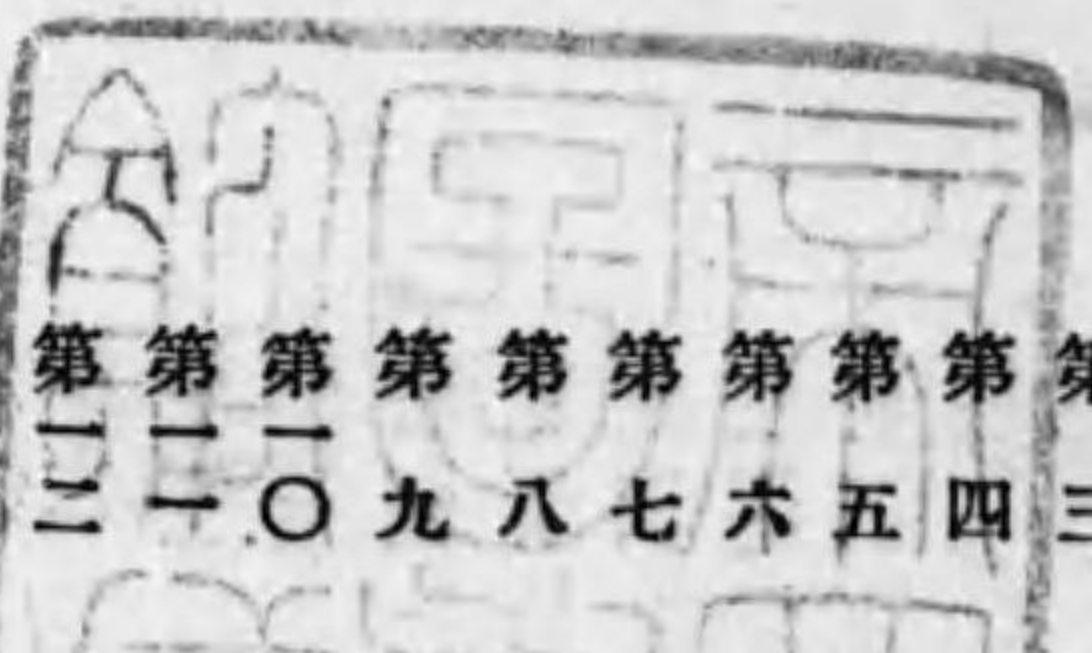


正誤及ヒ補記

頁	行	誤	正
一六	三	護衛を命ぜられた人斗りでない	
二〇	一六	住吉は陣營故嚴格に云へば藩邸でない	
四八		には出陣しない人も六三頁には出陣した人のみを掲げた。兩島村森新が殊に働いた	
五一	一四	拇指か他の指か不明	
六五	一三	「丸龜」より「近付みて見ると」迄を削除。丸龜に着き食事を終ると突然	
九一	二	一人の商人が近寄て來た。驚みて之を見ると」を挿入	
一二二	一四	吉井等は銃を買て歸る途中中井等と同行	
一二四	六	優子が確に姉の首を切つたか不明	
一三三	一六	六十五は六十三四かも知れぬ	
一三七	一七	萬里	萬重
一七〇	一一	大尉	大尉位の地位
一九四	九	下より八字目に「薩軍側の云ふ所によれば右の通である」を挿入	
		「買收されたとか」を削除	

目次 (本書の記事は悉く事實)

第一	坂本龍馬のほら	一頁
第二	武市瑞山の飛躍	七
第三	石部の天誅	一六
第四	大和の義擧(吉田東洋の暗殺)	一九
第五	新撰組の組織(略)	二五
第六	池田屋騒動	二六
第七	九門の戦	二七
第八	金剛山擧兵の陰謀	三〇
第九	武市瑞山の切腹	三二
第一〇	板垣退助の驟起(西郷と初対面)	三八
第一一	三條橋畔月下の格闘	四九
第一二	坂本龍馬中岡慎太郎の横死	五〇
第一三	天満屋の切込	五八
第一四	近藤勇墨染の遭難(伊東甲子太郎の横死)	五九
第一五	伏見鳥羽の戦(略)	六一
第一六	板垣退助の出陣(谷千城雪中深夜の山越)	六三



第一七 甲府の争奪(板垣軍對近藤勇).....六七

第一八 勝沼の戦(谷干城片岡健吉と近藤勇).....八〇

第一九 近藤勇の最期.....八四

第二〇 吉井行二の敵討.....八九

第二一 山内容堂の赫怒.....九五

第二二 安塚の戦(大鳥奎介日光山六方越の退却).....一〇二

第二三 板垣退助の北進(片岡健吉山地元治河野廣中等の奮戦).....一〇六

第二四 會津の落城(白虎隊の奮戦、會津烈女の自刃).....一一三

第二五 土方歳三の戦死(宮古灣の海戦).....一二六

第二六 門閥打破の失敗(井口の喧嘩と滄浪隈山の切腹).....一二七

第二七 武官の不遇(明治初年薩長士肥入亂れの暗闘).....一四〇

第二八 岩倉大臣の遭難.....一五二

第二九 神風連の蹶起(安岡縣令邸外四ヶ所討入).....一五九

第三〇 西郷舉兵の原因(刺客事件の真相).....一六七

第三一 自由國民の黨争.....一八二

第三二 熊本籠城の状況.....一八八

第三三 土佐勤王黨創立者の末路.....一九三

跋.....二〇〇

法學士楠瀬保馬著近藤勇と土佐勤王黨

第一 坂本龍馬のホラ

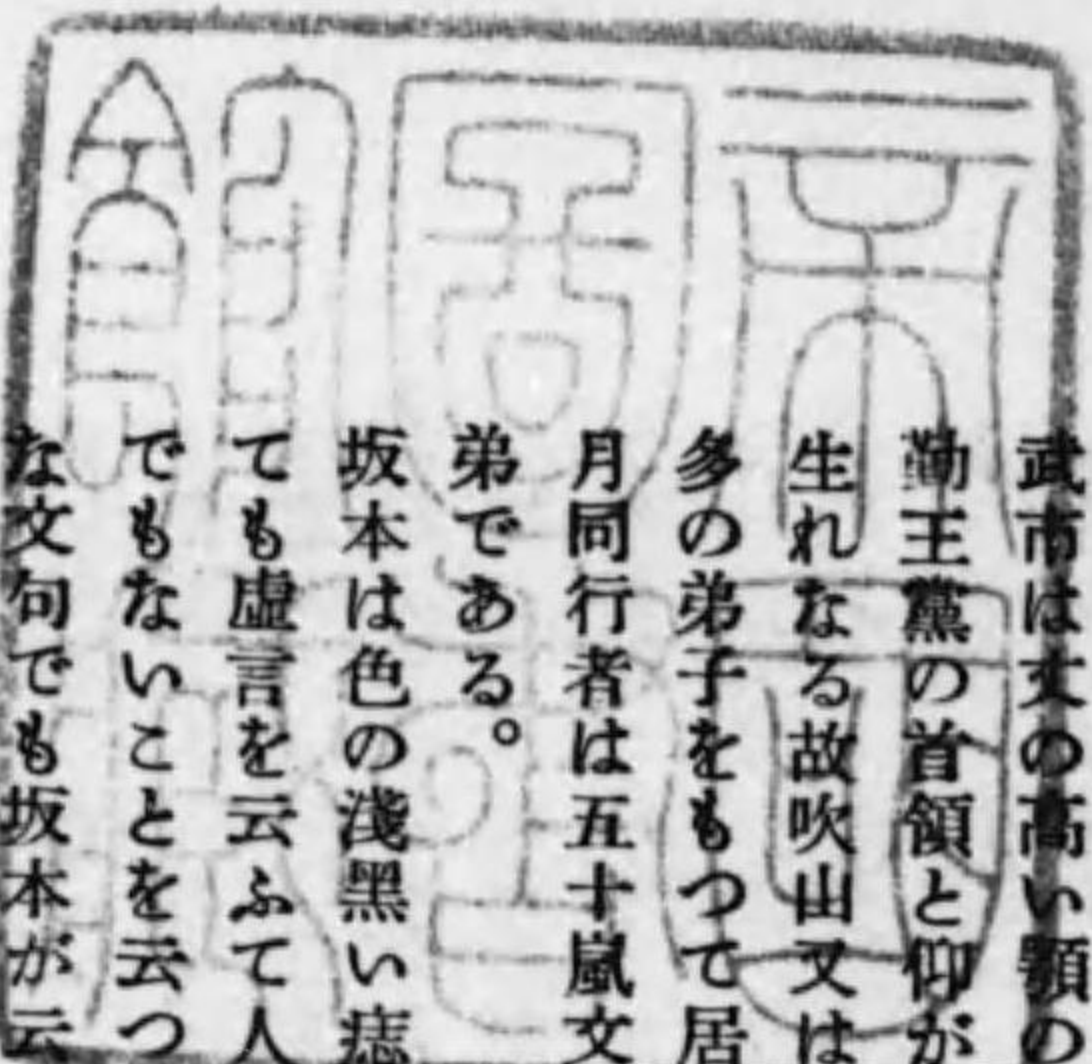
今を去ること七十餘年前江戸の或家に武市半平太大石彌太郎坂本龍馬と稱する三人の土佐武士が同宿して居つた。

武市は丈の高い顔の長い色の青白い至つて眞面目な人であつた。學問は左程無かつたが流石は土佐勤王黨の首領と仰がる、丈けあつて其當時より人に尊敬されて居つた。土佐の國は岡郡吹井村の生れなる故吹山又は瑞山と號し若冠にして既に劍術の師範となり高知市新町に出で道場を開らき數多の弟子をもつて居た更に劍術の奥儀を極むる爲め道場を或人に頼み置き江戸に出たは安政三年八月同行者は五十嵐文吉阿部多司馬多田三五郎其弟多田哲馬の四人其内五十嵐は先輩哲馬は瑞山の門弟である。

坂本は色の淺黒い瘰のあるホラを吹くが何處となく無邪氣な人に好かる、男であつた。ホラと云ふても虚言を云ふて人を欺ますのではない。奇抜な様な無遠慮な様な人を「アツ」と驚かす様な飛んでもないことを云つたり大言壯語を吐いたりすることである。外の人が云つたら直ぐ喧嘩になる様な文句でも坂本が云ふと不思議なる哉人が怒らなかつた。

武市と坂本は劍を學べるも師匠は違つて居つた。大石は砲術を習て居た其頃(少し前)間崎哲馬も江戸に来て居りこれは漢學を修めて居つた。

「學校を卒業してモロが無かつたら」とは今日の學生や父兄の憂ふる所である。今や大學の卒業生が多過ぎ折角多年螢雪の苦を嘗めても骨折損の草臥儲けに了はる虞れがある。七十餘年前の昔は今



と違つて江戸に出るが臆空であり親兄弟と水杯をして泣きの涙で出發した。従て留學生の過剰は起  
らなかつた其代はり世鬨第一の世の中如何に學問が出來ても如何に劍術が出來ても大名や家老は愚  
か五百石取り三百石取りの武士になるさへ容易でなかつた。

宿の人達も多分「立派な御侍だ。あの御方なら劍術の師範役にでも御成りかも知れんぞ」とか「面  
白い氣輕な御方よ。あの御方なら江戸の御留守居役も充分勤まる」位に噂して居たであろう。何  
ぞ計らん此三士こそは一は土佐勤王黨の首領と仰がれ一は薩長の連合ヲ斡旋して誰れ知らぬ者もな  
き維新史上の大立物となり一は武市の殘黨を卒る上士の板垣退助谷干城を戴き甲州の野に近藤勇を  
打破り旗鼓堂々江戸城に乗り込み來らんとは。

其後武市は祖母の病氣の爲め蒼皇土佐に歸つた。數ヶ月後れて坂本も土佐に歸つて來た。「坂本の  
アザが歸つたゾーナ。相變らずホラを吹ゐて居るであろう」と武市が笑つた。正に其通り至る所で  
ホラを吹ゐて居つた。

或時別役成義等數人高知上街（小高坂かも知れぬ）の漢學の先生の許にて折悪しく外出せる先生の  
歸りを待つて居た。其時退屈そうな顔をして突然やつて來たは江戸歸りの坂本龍馬であつた。望月  
龜彌太（池田屋にて新撰組に殺さる）に向つて

「をぬしの持つて居る本は何だ」と問ひた。

「通鑑だ」  
「そうか。其中の面白そうな所を教へてくれ」

「よし教えてやろう」

望月が面白そうな所を読んで聞かすと

「判つた」  
「判つたら読んで見ろ」  
「讀めない」  
「讀めないか」  
「讀めないが意味はちやんと判つたぞ」  
「云つて見ろ」

言はして見ると成る程意味は判つて居る。悟りは中々よい。悟りはよいが江戸歸りともあろうもの  
が人の集まつて居るのを何とも思はず平然として年下の望月に通鑑を習つたのには別役も聊か驚  
いた。翌日も坂本がやつて來た。其日は先生が在宅で或人に論語か何かを教へて居た。其講義が終り  
向ひ合つて居る先生と生徒が互に恐惶謹言然として御辭儀をし合ふと坂本が傍から。

「をぬし等其本を習ふはよいが其本に書いてあることを全部誠と思ふて此通りやつたらよいと  
思ふて居ると大間違で損をするぞ。其本に書いてあることも先生の言つて居ることも半分誠  
で半分はうそだと思つて居れ」

と、とんでもない彌次をとばした。昨日の弟子がけふは先輩づらをして居る。  
「龍馬何をぬかすか」  
と先生が苦笑した。田舎者の別役は龍馬の言の奇抜なるに再び驚いた。

龍馬の言は往々奇抜であつたが奇妙なる哉誰も感情を害しなかつた。或日土佐江の口の多田哲馬の宅にて飯を食はすと食ひ畢つた坂本龍馬

「もちつとうまい菜を食はすと御馳走様と云つて頭を下けるが此菜ぢや哲馬御馳だけしか云へないぞ」

と相も變らぬへらすぐちを叩ゐた。食はれた奴こそ好い面の皮だ。これも哲馬が

「何をぬかすか」

で一同どつと笑つたのみであつた。

水戸の住谷寅之助等が小南五郎右衛門に遇ふ爲め土佐にやつて来て土豫國境の關門を通過することが出来ず其斡旋方を龍馬に依頼した。坂本が國境に出張して住谷に遇ふと住谷は坂本を相手にして幕府の老中の失政を盛んに罵つた。坂本は初は然る可く相槌を叩ゐて居たが話の半ばに

「して其老中の名は何と云ひますか」

と臆面もなく尋ねて住谷等をあつと云はせた。住谷等は

「遙々此山奥迄やつて来て老中の名も知らぬ田舎者を相手に幕府の失政を論じたは馬鹿々々し

と、こぼし乍ら歸つて行つた。

勝海舟に遇つたときも

「先生の御説を聞くと成程其海軍とやらを盛にせねばならぬ。就めては小生も今日から先生の弟子にして其海軍とやらを教えて頂き度い」

と即座にやつて其手輕さに勝を驚したと傳へられて居る。第一回の脱藩を赦さるゝ際望月清平等が斡旋して謹慎の意を表する爲め一週間位旅宿に閉ち籠らして置くこと。

「をぬし等入らぬ世話をして此龍馬を窮屈な目に遇したぞ」と飛んでもない御挨拶があつた。

手紙も往々其通りであつた。

「私も其地に往て國の爲に盡し度い」

と姉さんから云つて來ると

「御まへさんやら横町の○さんやらが勤王だとか攘夷だとか云ふて屁の出る程りきゆんでも何の役にも立たない。汚ない恰好をして龍馬の姉だと云つて出て來られては」云々

と答へて居る。姉に宛た手紙には右の外にも

「扱も扱も人生の一生は合點の行かぬば元よりのこと運の悪いものは風呂より出でんとして畢丸をつめわりて死ぬるものあり」云々

と書いたものやら

「此文は極大事のこと斗りにて決してべちやべちやしやくりには、ほほを、ほほを、いややの決して見せられんぞへ」云々

と書いたものやら

「六月二十日餘りいくかかけふの日は忘れたり一筆さし上申候」云々と書いたものやら

「何の浮世は三文もらよ、ぶんとへのなる程やつて見よ死んだら野べの骨は白石ちりやちり  
ちり」云々

と書いたものやらある。

武市瑞山の新町の宅を訪ふや歸り際によく門内にて小便をした。臭さくて堪らぬ故富子夫人が

「小便をせぬ様龍馬さんに頼んで下さい」

と瑞山に訴へたが瑞山笑つて之を取り上げなかつた。

海援隊を組織して社規を作つたとき

「藝妓買や女郎買は勝手次第人の妻妾を盗むものは切腹」

と云ふ箇條があつた。隊員が四五人集つたとき或る理屈屋が之を評して

「藝妓買女買買勝手次第とあるも人の妻を盗むものは切腹とあるも當然の話だが人の妻を盗む  
ものを盗むだものと同様切腹とはきつ過ぎはしないかな」

と云ふと何れも

「左様だな」

と共鳴したが其中の一人が

「いや判つた。人の妾で吾々と一番近付き易いのは坂本先生の妾於良さんだ。詰り俺の妾於良  
と關係したら切腹と云ふ先生自衛の規定だ」

と云つたので一同どつと笑つた。

元來服裝などには少しも頓着せぬ人であつた。脱藩後文久二年京都旅館にて大石彌太郎に遇つたと

き大石は坂本が刀の柄に布片を捲けるを見怪みて其理由を問ふと坂本は笑ひ乍ら「旅費に困つて刀  
の柄を賣つた」と答へた。土佐に居る頃も頗る蠻的で盲目縞の紺袴を裾短かに着なし桑津一兵衛の  
宅などで吉田數馬等に向つて質素の必要を力説して居つた。所が晩年河原町に居る頃は黄八丈の絹  
物を裾長に着て絹坐布廻の上に坐し町醫者の指す様な短刀を持つて居つた。土佐から訪ねて來た  
吉田數馬が此豹變に驚いて居るとあべこべに

「貴様の其服裝は何だ。今時其様な恰好をして居る奴があるか。時勢の進歩と云ふことを知ら  
ぬか。こりや今の世には此様なものがあるぞ」

と言ひ様「ピストル」を四五發續け様に庭に放つて吉田の度膽を抜いて仕舞つた

漢學を修めざりし爲め漢學者通有の融通の付かぬ偏屈な風がなく、商家と隣り合ひなりしと早く江  
戸に出た爲め世故に通じて居り、勝海舟に學び世界の大事に明るく、加ふるに他人の眞似の出來ぬ  
天稟の長所氣輕に大事をやつて退ける天賦の資質を持つて居つた。これが中岡の熱誠的資質と相俟  
つて遂に薩長連合の大業を成就し大名を千歳に輝かす基となつた。又此氣輕さが刺客に斃るゝ原因  
となつた。

## 第二 武市瑞山の飛躍

「黒船が來た」「黒船が來た」

「米艦浦賀に來たるの」飛報は徳川三百年泰平の墮眠を破り尊王攘夷の論は日増しに盛となり我れ  
方外に居る神官僧侶の徒迄も廟堂諸公の因循遲疑に切齒するに至つた、

安政の獄は一層幕府に對する志士の反感を高め武斷の宰相井伊掃部頭は天下怨嗟の的となつた。

萬延元年三月の節句は落花紛々雪紛々時節外れの大雪であつた。水戸の浪士十七人雪を蹴花を踏んで突如蹶起し彦根三十五萬石井伊大老の首はあわれ浪士の手に斬り取られ櫻田門外血櫻の如き光景を呈するに至つた。

これより天下益々多事遂に拾收す可らざる状態となつた。

大石彌太郎は洋學研究の藩命を受けて永久元年三月再び江戸に上つた。東上の際路を中山道に取り松代に至て佐久間象山を訪ふたが折悪しく不在であつた。着江後勝安房の門に入り洋學を修めて居たが一日藤森弘庵を下糺行徳に訪ひ其際長州の佐々木男也と同席し歸路同舟利根川を下り互に時事を論じ之より男也始め長州の志士と相往來するに至つた。大石は天下の形勢愈切迫し志士の往來益繁きを見書面を武市の許に送りて其東上を促したる結果文久元年六月武市は親戚小笠原忠五郎を伴ふて再び東上することゝなつた。

大石は武市瑞山と久坂玄瑞を會見させ度いと思ひ武市等を伴ふて長州藩邸に至り佐々木の紹介にて久坂に面會したるがこれより武市と久坂は無二の親友となり次で長州の桂小五郎、高杉晋作や水戸薩摩の志士も武市等と志士の神交を結ぶに至つた。

武市大石は先づ藩士の同盟を計らんとて一日築地の土佐藩邸に會し勤王攘夷の血判盟約書を作り武市は大石より一ヶ月の年長でもあり第一番に署名し第二番に大石彌太郎續ひて島村衛吉、間崎哲馬門田爲之助、池内藏太、柳井健次、河野敏鎌、小笠原忠五郎の九名之に署名した。

盟約書作成後兩人が竊に相談した。先づ武市が口を開いて

「これから如何するか」

「吾々兩人共に江戸に居るよりも一人は土佐に歸り同志を募り同盟を擴張し藩の方針を一定し大運動を起したがよろ」

「然らば貴君に歸國してもらふか」

「僕は洋學専修の藩命を帯びて居て勝手に歸國することは出来ぬ。貴君は擊劍に長じ至る所に門弟が居る。貴君國に歸り各郡の諸士を鼓舞激勵せられては如何」

「然らば左様致さん」

と茲に至て武市が歸ることに相談が整つた。

恰度此際和宮降嫁の議起り水戸長州の志士中には和宮の御輿を途中に奪ひ奉り朝幕の接近を妨げんと主張するものがあり久坂玄瑞も之に賛成であつたが武市は各藩有志秘密會合の席上にて之に反対し夫れよりも各自藩に歸り同志を糾合し藩論を一定し明春を期し各自藩主を奉じ入京す可きを主張し會合に出席せる薩長の有志も之に賛成した。武市は在江同志の統制を大石に頼み置き島村衛吉、河野敏鎌、柳井健次を伴ふて歸國し高知新町の自宅に着くや即夜妻島村氏の一族三人及び多田哲馬上田楠次を招き歸國の目的を語り直に同志を糾合し茲に土佐勤王黨の成立を見るに至つた。此血判狀に署名せるもの約二百名土佐にて署名せるものは坂本龍馬を筆頭として

上田 楠次	多田 哲馬	島本 仲道	中岡慎太郎	吉井 顯藏	土方 久元
南部 甕男	秋澤 清吉	尾崎 忠治	北添 信麻	田中 光顯	片岡 利和
小畑 美稻	松山 深藏	平井收次郎	島村壽太郎	森新 太郎	安岡覺之助
池知 退藏	吉村寅太郎	安岡 嘉助			

等である。

武市歸國の際大石は武市に向つて

「東郡に於ては安岡覺之助森新太郎西郡に於ては樋口眞吉を説服するがよい。さすれば七郡の志士説かずして自ら門下に集らん」

と指示した。安岡森は血判狀に署名した。樋口は署名しなかつた。署名はしないが同志の士には相違なかつた。樋口の外にも同志の士にして血判狀に署名しない人が随分ある。

其最も有名なるものは清岡道之助、清岡公張、桑原介馬、石田英吉、五十嵐文吉、安岡亮太郎、片岡五郎等である。署名者の大部分は郷士白札庄屋足輕等即ち輕格（以下下士と稱するも同意味）にて士格（以下上士と稱するも同意味）は宮川助五郎等數人に過ぎなかつた。輕格中にも武市大石坂本は郷土中岡慎太郎、吉村寅太郎、北添信麻は庄屋秋澤清吉、尾崎忠治、森田金三郎は白札であつた。

其頃土佐十六代の當主山内豊範は土佐に居り十五代豊信は容堂と號して江戸に隠居し十二代豊資は景翁と號して土佐に隠居して居つた。豊資は豊範の實父豊信は豊範幼年の爲め中繼ぎ養子として山内氏の支族より一時襲封し豊範の成長を待つ内徳川將軍家繼嗣問題に關して井伊掃部頭と衝突し隠居を命ぜられたものである。

又上士の内には吉田派と守舊派と勤王の志を抱ける人々があつた。吉田派の首領吉田元吉は後藤象次郎の叔父に當り博學多識土佐有數の人物にて藩の實權を掌握して居つたが如何なる故か之に反對するもの多く守舊派の小八木五兵衛等も勤王上士の平井善之丞小南五郎右衛門等も吉田に對して居た。反感を抱けるのみならず容堂の實弟山内民部家老の山内大學山内下總迄も之を敵視して居つた。武市は同志を糾合すると同時に參政吉田元吉を訪ふて薩長の志士と盟約の顛末を語り土佐も兩藩に後れず勤王の大義に殉ず可しと勸めたが佐幕開國主義の吉田は之を一笑に付し全然問題にしなかつた。

其内上國の風雲は愈々迫を告げ逸り雄の面々は斯る猫額の天地に躊躇して時勢の落後者たるよりも寧ろ脱藩して藩外に大飛躍を試みんと欲し到底制するに由無き故武市は己むなく吉村寅太郎や坂本龍馬の脱藩を默認することゝなつた。

吉田は武市の意見に耳を傾けなかつたが山内民部平井善之丞小南五郎右衛門は武市の意見に賛成し結局反吉田派上士と瑞山派が互に了解の上吉田を斃して藩政を一新することゝなり吉田元吉は文久二年四月八日下城の歸路帶屋町下一丁目の四辻にて遂に悲惨の最後を遂ぐるに至つた。吉田は隠居容堂の信任頗る篤く之を要路に据えたものも矢張り容堂其人であつた、當時藩主豊範は未だ十七の弱齡景翁は既に老衰の好々爺に過ぎざる故事實上の主權者は云ふ迄もなく容堂其人であつた。容堂が土佐に居たならば吉田を斃すことも出來ず又吉田を殺すとも民部下總等の考にて其殘黨を退くることも出來なかつた。容堂は江戸吉田は土佐東西相離れて居たのが實に吉田の運の盡きであつた。吉田の殺さるゝや山内民部山内大學山内下總等は藩廳の大改革を行ひ吉田派の後藤象次郎、野中太内、朝比奈泰平、市原八郎左衛門、由比猪内、福岡孝、神山群廉等を退け吉田に反對せる連枝家老を戴き其下に守舊派の小八木五兵衛等上士勤王の平井善之丞小南五郎右衛門等を網羅せる守舊派上士勤王派聯立内閣を組織した。



島本仲道が京都より急行歸國して内勅の既に薩長に下れることを武市に傳ふるや武市は小南平井と打合の上河野敏謙、弘瀬健太、小畑孫三郎等在京の同志に命じて土佐にも薩長同様内勅の下る様幹旋せしめ其運動効を奏し山内家の姻戚たる三條家より内勅の下れる旨を藩廳に傳へ來たるや武市は此機會を失はざる様小南平井に勸むる旁藩老山内下總深尾丹波等に向ても朝廷の御依頼に應ずることを勸告した。

藩老下總丹波等も武市の意見に反對に非ざるも藩主豊範未だ十七歳江戸に隠居せる容堂に無相談にて京都入朝の大事を決行し兼ね結局藩主を奉じて京都經由一先づ江戸に赴き若干の人数を京都に止め朝命に應じて禁閣警衛に當らしむることに決し文久二年七月二十八日藩主豊範高知城下を發し土豫國境の笹ヶ峯を越えて京都に向ひ武市半兵衛五十嵐文吉等亦之に隨行せるも輕格の悲しさ白札小頭等至て卑賤の役目を命ぜられしに過なかつた。

武市は姫路にて洋學修業の期充ち江戸より京都を経て歸國中の大石彌太郎に遇ひ江戸京都の形勢を聞き

「幕府の威光地に墜ちたれば最早江戸參勤の必要も無いと存じます。斷然東下りを止めて京都に入朝しては如何」

と小南に痛論した所小南も

「余も左様思ふ。機會を見て執政に申出ることにする」

とて山内下總に其趣を申出たるも守舊派の小八木五兵衛之に反對し藩論容易に決定しなかつた。兎角する内藩主豊範麻疹に罹り療養の爲め暫らく大坂藩邸に滞在することとなりたれば小南は其間

に急行江戸に赴き容堂に京都入朝の承認を求めたる所容堂は京都の形勢を聞き畢り「然らば朝命に従へ」と之に同意せる故小南は勇み喜んで即時歸坂した。

藩主の大坂を發し二十六日伏見に着するや三條家の使者先づ來り迎へ近衛關白は藩老山内下總を其邸に召し

「松平土佐守に於ては暫らく滯京有之願慮を安せられ度御内沙汰云々」の内勅を賜はつた。

これより先き大石彌太郎は小南を旅館に訪ひて

「京都河原町の藩邸は四條新地の遊廓に近く本陣に不適當と存じます。洛西妙心寺の境内は塀も高く取締も容易なれば藩主御入京の節は妙心寺を本陣と定めらるゝが宜しと存じます」

と勸め小南も之を首肯したるが藩主入京に及んで大石の意見通り妙心寺を本陣とすることとなつた大石は京都の旅館にて坂本龍馬に遇ひ藩主上京の話聞き坂本に頼んで妙心寺の境内を調べてもらひ之を小南に勸めたものであつた。小南が容堂と打合せの爲め江戸に急行したのも矢張り大石が其時小南に勸めた結果であつた。

朝廷は更に家老桐間將監を學習院に召し

「薩長兩藩主種々斡旋の所豊範こ於ても國家の爲めに周旋御依頼云々」

の御沙汰あり土佐は茲に至て三藩の一と稱せらるゝに至つた。

文久二年閏八月十四日新に他藩應接役を設け武市半兵衛平井收二郎等之に任せられ長州の久坂玄瑞肥後の宮部鼎藏等他藩勤王の志士と往來し其名聲蹟々として高く加るに瑞山の「五畿内一圓を朝廷

の御領とす可し」と云ふ意見書は朝廷や公卿の感賞を惹き青蓮院宮に拜謁を許され三條姉小路兩卿の門にも出入し兩卿の正副勅使となつて東下するや瑞山も之に隨行し且つ小南と謀りて島村衛吉、森新太郎、多田哲馬、阿部多司馬、三原鬼彌太、田邊豪次郎、矢野川龍右衛門、清岡治之助、弘瀬健太等を衛士として兩郷に扈從せしめた。平井收次郎吉村寅太郎、河野敏鎌、森田金三郎、田邊豪次郎、堀内賢之進等は薩長の志士と共に屢々佐幕論者や土佐偵吏や幕府偵吏の天誅を敢行した。幕府の偵吏が危険の身邊に逼れるを察し竊に關東にかへらんとするや久坂玄瑞、寺島忠三郎、平井收二郎、吉村寅太郎等三藩志士二十餘人江州石部宿に追撃して之を斬り殺した。又武市は間崎哲馬に依頼して勤王黨の私設江戸探題として江戸に赴き他藩の志士と交り形勢を視察せしめた。

乍然武市の得意時代は至て短かつた。武市久坂等は討幕攘夷論を唱へ薩の島津久光大久保利通は公武合體開國論を唱へ兩者の議論相一致するに至らなかつた。土佐に於ては吉田派失脚し反吉田派政權を握れるも江戸に隠居せる先代山内容堂は吉田の死を惜しみ公武合體開國論に共鳴し一橋慶喜松平春嶽と親しみ武市一派の討幕攘夷論に耳を傾ける模様がなかつた。江戸に居る上土の内にも輕格の跋扈に反感を抱くものを生じ板垣退助、小笠原唯八、山地元治の如き上土中の武斷的人物も之に加つて居つた。公武合體論者は討幕攘夷論を目して「長士の暴論」と稱し容堂の江戸より入京するや薩の大久保利通等雨を冒して容堂を迎へ此「暴論」を挫かんことを勧め土佐の上土も亦土佐に於ける吉田の暗殺を始め京都に於ける幾多の暗殺事件に武市等の關與せるを疑ひ内外相共に武市等を呪咀するに至つた。

其内に藩主山内豊範も執政山内下總等も歸國し平井收二郎間崎哲馬弘瀬健太は青蓮宮令旨事件の爲

め切腹を命ぜられ武市の身邊漸く危険を感じるに至り久坂等は脱藩して長州に赴くことを勧めし武市は之を肯かず勤王黨の諸士に向つて

「諸君は脱藩して水戸に因るなり長州に因るなり各自意の儘の行動を執りて國事に盡せ。此半平太一人丈けは如何なる危険に遭遇するとも飽迄も土佐に止まり藩論を動かし山内家を載きて皇國の爲に盡すことにする」

と言切り容堂の歸國後容堂より命ぜられたる或事件の決裁を仰ぐ爲め文久三年四月四日土佐に歸つた。

容堂の歸國するや藩廳の重役を召し

「吉田元吉暗殺の下手人は分つたか」

と尋ね平井善之丞が

「未だ分りませぬ」

と答ふるや言未だ畢らざるに

「左様の事にて一國の政道が立つと思ふか。何故充分に詮議せぬか」

と叱り飛し平井が更に

「恐れ乍ら此儀深く詮議仕らば御連枝に迄吟味及び候に付き容易に手を下し兼ねまする」

と云ふや容堂不興の體にて奥に入り翌日平井は自ら勇退辭職し次て小南五郎右衛門、深尾丹波も罷められ江戸より歸れる後藤象次郎大監察となり勤王系上土は退けられ吉田派の市原八郎左衛門由比猪内福岡孝悌等再び要路に立つこととなつた。

京都に於ても文久三年五月二十日姉小路公知朔平門外にて暗殺され同八月十七日一大政變起り大和行幸中止となり三條實美等二十餘公卿の朝参を停め長州の宮門警衛を免じ薩藩をして之に代らしむることとなり實美等七卿は土佐より護衛に付せる瑞山黨の土方久元、清岡公張、南部甕男、島村左傳次、黒岩直方等に守られて長州に下ることとなつた。

同年九月二十一日土佐藩廳は京都の沙汰と稱して武市半平太、島村衛吉、小畑美稻、小畑孫三郎、河野敏鎌、島本仲道其後更に島村壽之助、安岡覺之助を獄に下し小南五郎右衛門に謹慎を命じた。山内民部は此處置に不服であつたが如何することも出来なかつた。安岡覺之助は文久元年以來瑞山の謀議に參與し殊に弟安岡嘉助は吉田元吉刺客の一人たる故下獄の厄を免れざりしも大石彌太郎は

一、洋學に通じ新智識と認められて居たこと

一、此捕縛は勤王黨の撲滅よりも藩吏暗殺者の檢擧が目的であり吉田横死當時大石は江戸に居り京都天誅當時は土佐に居たること

の爲め縲紲の難を脱するを得た。

武市等の入獄と前後して中岡慎太郎、松山深藏、池内藏太、北添信磨、田中光顯、大橋慎三、片岡利和、上田宗兒、中島信行等土佐を脱藩した。

### 第三 石部の天誅

昨年山下白雲君が幕末斬奸録を著され其中に石部の天誅のことも書いてある。左に其一部を抄出する。

都の秋も深けた九月二十二日の夕方二條橋畔の旗亭に三人の侍が鼎坐してあぐらを組み差しつ

差されつ盃を重ねて居た。

「愈々近日中に勅使が關東へ下向するそうぢやないか」

「うむ今度は我土州藩に勅使警護の人命が降ることになるかも知れん」

「ぢや我々も江戸へ伴が出来る譯だ」

「夫れにしても早く奸吏を片付けねばならぬ」

「もう多田が狀報を齎らしてやつて來そをうななものぢや」

(中略)三人は虹の様な氣焔を吐き乍ら且つあほり且つ談ずるのだつた。三人は土佐勤王黨の豪の者として雷名を誦はれて居た岡田以藏、村田忠三郎、岡本八之助だつた。姑らくすると同志の多田哲馬が息せき切つて飛び込んで來た。

「多田君首尾はどうだ」

三人の目は期せず多田に集まつた。

「やつと詳細が判つた」

多田は傍らの茶碗に酒を移してがぶがぶあおり乍ら氣を静め注意深くあたりを見廻はし乍ら低聲で云ふた。

「細工は粒々だ。奸吏共は暗に乗じて明早朝役所を立つてなんでも夕方石部の宿に着くことに駕籠の用意を命じたそうだ」

「ぢや我々が狙て居ることを薄々知つてるのだな」

「薄々處か百も承知なんだ。で彼等は我々の計畫の裏を搔くつもりらしい」

「そうか油断して居られぬな」

「諸君直ぐ仕度をして先廻りをして居よをぢやないか」

(中略) 一人が含圖をすると奥の離れを目差してどかどかと躍進して行つた。

「奸賊渡邊金三郎に天誅を加へる」

どかどかと闖入した怪漢は忽ちの間に金三郎を取巻いてその一人が斯う叫んだ。

「無禮者」

「覺悟をしろ。命を貰つた」

血氣に逸つた決死の刺客は云ふより早く斬り付けた。渡邊は一刀を抜いてすつくと起つて渡り合つた。幕府より選ばれて京都に派遣された程だから渡邊も相當に腕が勝れて居たのだ。四五人を相手に上方造りの低む天井の部屋でちやりんちやりんと撃結んだが大上段に構へれば切つ先が天井に問へる。敵はギリギリと拔身の一線を劃して迫つて來るのだから斯うなると腕より衆寡の争ひであり衆寡より膽力の勝負となる。處が渡邊が敵に廻はした數人は人斬暗殺の名人揃ひ渡邊が必死の勇を奮つても到底敵しよを筈がない。

「えいつ」

岡田以藏が横に拂つた一刀は鮮やかに脾腹にぐざと喰ひ入つて碧血が壁にばつと迸つた。急を聞ひて隣室から駈け付けた供の常三郎は渡邊が右手に握つた刀を投げ捨て、両手で虚空を掴み乍らどうと倒れるを發見して「やう」と驚いて押つ取刀の儘踵を返して逃よをとする處を背後から一太刀斬り付けられたが傷が浅かつたと見えて命からがら逃げ終せた。

ばさり。音がすると渡邊の首は疊の上へころりと横に轉がつて落ちた。それを素早く風呂敷に包むと一同はどかどかと立ち去つて終まつた。颯風一陣旅館の座敷には首のない渡邊の屍骸が横はつて居る斗りだ。(下略)

多田が京都の天誅に加つて居なかつたか筆者も相當調らべて見たがどうも判らなかつた。石部の天誅に關係したと云ふ記事は初耳である。確かにそうであるかどうか目下取調中である。

#### 第四 大和の義舉

文久三年八月十七日の京都大政變の爲め大打撃を被つたものは土佐の武市一派のみでなく大和行幸を豫期し其先鋒を志して既に大和に赴き義旗を翻せる天忠組一派も亦之が爲め死地に陥るることとなつた。

天忠組の總帥は中山忠光之に従ふ主なる者は藤本鐵石、松本奎堂、吉村寅太郎等であつた。

中山忠光は痛快極まる御公卿様であつた。或時懇意な公卿を招きて酒宴を催ふした所其御公卿様達が兎角遠慮勝な爲めいくら呑んでも感興を催さない。活達な忠光は之を不満に思ひ「今夜は無禮講だ。大騒ぎをやる。窮屈にかまへて居つては面白くないから皆眞つ裸になれ」と云ひ出した。言ひ出したが最期跡へは引かぬ忠光の氣象を知れる來客は何れも止むを得ず衣服をぬいてふんどし一つになつたが忠光の機嫌は中々直らない。

「ふんどしをして居つて眞つ裸と云へるか」

との御立腹だ。皆々仕方なしにふんどしを外して今度こそ眞正掛直なしの眞つ裸となつた。天見屋根命の御すえ大織冠鎌足の後胤藤原朝臣何某とか村上天皇何十何代の後胤源朝臣何某が奉天の包圍

戦が何かの様に車付の三十八インチ砲を圓形に並べてかしまつて居る有様は何れの繪巻物にも見當らざる珍畫であつた。忠光の意見は徹底的に行はれて神武天皇東征以來の珍光景が茲に出現した。が餘りの事に座は愈白らげ興味は益減少した。忠光は機嫌を損じ「おれが劍舞をやると」て薙刀を持ち來り鞘を拂て水車の如くりゆうりゆうと振り廻した。丸裸の公卿達は唸りを發して頭上を飛ぶ薙刀に顔の色も青くなり若し當つては一大事と龜の子の様に首を縮めて小さくなつて居たが酒宴が了はるとやれ安心と這々の體で逃げ歸つた。

吉村寅太郎亦頗る快男兒であつた。武市の許可を得て土佐を第一番に脱藩したは此吉村である。武市の目的は擧藩一致山内家を戴きて國事に勤むるにあり脱藩は其好む所にあらざるも吉村巧名に熱し焦せりに焦せつて制することが出來ぬ故止むを得ず之を許可することとなつた。又其脱藩振りが頗る痛快であつた。

山内家より近國探穿の御用を申付かつたと詐り親戚近隣を集めて送別の宴を張り白晝堂々馬に跨り數多の人々に送られ兼ねて同志の一人より賞ひ受けたる通關切符を關吏に示して公然關門を通過した。幕末の頃國禁を冒して關所を破つたものは數の知れぬ程多ゐるが其内奇抜なのは第一が白晝堂々白刃を閃かして碓氷の關門を突破したる國定の忠治第二は馬上裕々土豫の國境を通過したる此吉村寅太郎である。

吉村には今一つ面白い話がある。脱藩後本間精一郎を伴ふて住吉の土佐藩邸にやつて來て重役に面會を求めて

「島津久光内勅を奉じて不日入京し所司代酒井若狹守を二條城より追落し勤王の大義を天下に

唱ふる筈にて四方の志士之を洩れ聞き既に集まる者五六百人に及んで居る。寅太郎脱藩の身なれ共郷里に對する情誼を思ふて御知らせする」

と述べ本間も續いて

「若し京都に於て義兵の起るときは貴營の方々は如何せらるゝや」

と尋ね松下某が之に答へて

「我々は攝海防禦の爲め藩命を受けて此所に詰めて居る。御尋ねの儀に對しては唯今御答出來兼ねる」

と云ふと本間は打笑ひて

「未だ若年の御身に拘らず感じ入つたる御挨拶」

など、松下を揶揄し乍ら立ち去つた。

本間は當時名うての雄辯家であつたが松下も亦之に劣らぬ雄辯家であつた。蘇秦の遊説に張儀の應酬堂々として議論を闘はしたはよかつたが滑稽なことには双方共に物忘れをして居つた。吉村等は「脱藩の犯人が藩邸に來れば捕縛さるゝこと」を忘れて居り松下等は「脱藩の犯人が藩邸に來れば捕縛せねばならぬこと」を忘れて居つた。吉村等が歸つた跡で下役の一人が此手落を言ひ出すと皆々成程と始めて氣が付き翌日捕吏を吉村の宿所に差向けることにした。其時此藩邸に居た安岡覺之助が弟道太郎を走らして此趣を吉村に告げ宿所を變へさせた爲め翌日捕吏が出張して見ると吉村は最早其宿所に居なかつた。

天忠組は大坂より船にて堺に赴いた。安治川の川口を通る際船番所の番人が「誰だ」と叫ぶと吉村

が聲に應じて「上杉謙信」續いて池内藏太が「武田信玄」と叫けんだ。船番所の役人の如き、てんで吉村の眼中になかつた。川口を通り過ぎて漫々たる茅海に漕ぎ出した。其夜は丁度八月十五夜のこととて月が冴え渡つて居つた。一同もどりを切り海に投じて決死の誓を立てた。堺に上陸した天忠組は河内に赴き狭山に達し北條相模守に人數差出しを命じ五條の代官録木源内を斬り軍威大に張れる際突如京都大政變の報に接し進退谷まることとなつた。近畿諸藩の兵幕府の命を奉じて陸續來り攻むるや天忠組は隙を見て圍を脱し西國に走りて再舉を圖らんと諸所に轉戰或は紀州方面に或は大坂方面に脱出せんとしたが圍は意外に堅くして意の如くならず其内に藤本鐵石、松本奎堂、吉村寅太郎等は相次で戦死し安積五郎、伴林六郎等は捕縛せられ中山忠光は石田英吉、上田宗兒等四五人に守られ岩を攀ち蔓に縋り晝は潜み夜は歩し漸く大坂に出で、長州藩邸に入り海路長州に赴いた。此天忠組の擧兵には吉村寅太郎、池内藏太、那須信吾、石田英吉、上田宗兒等瑞山黨志士が十七人加つて居り其内に安岡覺之助の弟安岡嘉助が居た。

安岡嘉助は吉田元吉暗殺者の一人である。武市派が吉田暗殺と決するや其任に當る可き數組の刺客隊を作つた。第一組は岡本猪之助、岡本佐之助。第二組は島村衛吉、上田楠次、谷作七の顔振れであつたが時機宜しからず實現の運びにならなかつた。其後田中光顯の叔父那須信吾が瑞山の許にやつて來て自から刺客たらんことを希望し續いて大石團藏、安岡嘉助も亦高知に來たり同様の希望を申出た。茲に於て那須信吾、安岡嘉助、大石團藏の三人で第三組の刺客隊を組織することとなつた。刺客隊は表面三人であつたが實際暗殺の現場に居たのは右三人の外に多田哲馬等數人合計七八人であつた。此人々は江の口村小津の多田哲馬方に集まり帶屋町に向けて出掛けて行つた。

文久二年四月八日參政吉田元吉は高知二の丸城に登城し藩主山内豊範の面前に於て日本外史織田信長本能寺遭難の一節を講義した。此夜の講義は殊に明快流暢で陪席の者も耳を澄ましたさうであるが神ならぬ身の寸前に禍の降り來るとは夢にだも想はず講義終つて後左手を握つて膝の上に置き右手で袴の右の方を幾邊となく擦り深く信長の人となりを稱し其中折を痛しみ屢々嘆聲を洩らしたさうである。

偕其夜も十時に近き頃吉田は藩主に暇乞して追手門を出で一人の若黨提燈を持つて其前に立ち吉田之に次ぎ一人の草履取り其後に扨して帶屋町下一丁目の四ツ辻に來掛ると刀の目釘をしめして待つて居た數人の壯士先づ第一に大石團藏が躍り出て、若黨の提燈をはつしと切る。提燈を切られた若黨は跡をも見ずに逃げ出すと草履取りも亦石橋の下にもぐり込んだ。其時那須信吾吉田の右側より其後に廻り後より吉田の首を目掛け左の肩より斬り込んだが刀が蛇の目の傘に障つたのか但しは手がすべつたのか浅手を負はせたに過ぎなかつた。吉田も流石は豪傑無禮者奴と振り歸り刀を抜ひて六七合丁々發止と斬り合つたが安岡等が前後左右より斬つて掛り吉田は數ヶ所の手傷を負ふて遂にうつ伏にたをれた。那須が吉田の首を斬り放さんとしたが臆にかゝつて中々切れなかつた。其間安岡等は一足先きに旭の觀音堂に引上げた。那須は數回拜み打ちにして漸く首を切離し側の小滿にて刀と首を洗ひ下帯にて之を包み犬に吠えられ將に首に喰ひ下らんとし困り入り乍らやつとのこと逃げをよせて觀音堂に赴いた。

此時兼ねて同志の約束にて河野敏鎌等數人觀音堂に三人を待ち受け居り首を受取ると引替に脱走用の手槍手荷物を渡し暗中互に訣別三人は西に向つて馳せ去り河野等は討文を添へて吉田の首を雁切

川原に梟首した。

多田哲馬は深更の頃一人で歸つて來た。其後妙な男が哲馬の門前を屢々徘徊し家族に向つて「哲馬はふりだろ」と薄氣味の悪い笑顔をし乍らつぶやく様に云つて居た。

借安岡等三人は其夜の眞夜中に高知城下を脱し伊野町を過ぎ仁淀川の渡し場にて渡守を叩き起し長濱雪溪寺の祭りに酒を飲み過ぎ夜を深かしたと詐り難無く川を渡り間道を経て土豫國境の山脈を超え下關より大坂を経て京都に赴き久坂義助前原一誠等に會ひ一旦長州藩邸に入れるも土佐佐幕派の詮議厳しき爲め更に京都薩邸に移つて居た。

那須安岡は吉村より天忠組旗上げの話聞いて直ちに之に加はれるも大石は何故か之に加はらなかつた。安岡は

再びと來可き世ならぬ我身をも捨つるは君の御爲めなりけり

と云ふ一首の歌を郷里の同志に書き送り又大石彌太郎に

斯く斗り下り行く世を梓弓引返さずば如何で止む可き

と云ふ一首の歌を残し置き同志と共に大和に赴き木砲製造の係りとなり大工職工を呼ぶ集め一貫目木砲七挺二貫目木砲五挺を造り上げた。九月九日安岡は農兵三十餘人を率いて川口に戦ひ突進し敵の二將を斬り敵兵を追撃したが其際敵の銃丸に右手の甲を打ち貫かれた天忠組は其頃より愈敗戦となり負傷と露臥と降雨に惱まれたる安岡は氣息奄々同志の肩に扶けられて僅に山路をたどるのみであつた。天忠組は紀伊方面に脱出せんとして南大和の諸村を彷徨せるが九月二十四日に至り此上足手纏ひの傷病者を保護せんとするときは強壯にして脱出の見込ある者迄も共に此地に戦没する

の餘儀なきに至るを察し無傷壯健のものは圍を破つて突出し傷病者は各自意の儘に自由行動を執ることに軍議一決したる爲め安岡も同志と別れ唯獨り山中に潜入したが飢餓に堪へ兼ねたる爲め翌二十五日の早朝宇陀町に出て、食物を購はんとし芝村藩兵に發見され遂に縛に就いた。夫れより京都に送られ六角獄中に繋がれて居たが翌元治元年二月二十六日

其方共大和國に於て徒黨を企て世間を騒したる段不埒の至り云々とて打首を申渡された。安岡等は

私共皇國の爲め深く存込候處今日に至り反て御不爲めと被仰渡仕形も無御座候青天白日御請可仕候

と特に青天白日の文字を請けに入れて俯仰天地に愧ざる心事を明かにした。安岡は最後に臨み

今更に何か命の惜しからむもと大君に捧ぐ身なれば

の辭世を詠しつゝ従容として刑に就いだ。時に年二十九であつた。

#### 第五 新撰組の組織

近藤勇は武藏國多摩郡石原村宮川久次の第三子に生まれ十六歳の時其劍術の師にして天然理心流の道場を開ける近藤周助の養子となつた。

文久二年幕府が清川八郎の意見を納れて浪士組を組織するや近藤は養父の門人たる土方歳三等と共に之に加つた。浪士組は文久三年二月京都到着後間も無く江戸に歸ることとなつたが其際近藤等は願出の上清川等と別れて京都に留まり守護職松平容保に屬し新撰組を組織した。

新撰組の首領は近藤勇と芹澤鴨であつたが古より兩雄並び立たず幾干もなくして不和となつた。文

久三年九月芹澤は近藤派の爲に寢込を襲はれて殺害され近藤は隊長土方は副隊長となり爾來新撰組の全權を兩人の手に掌握することとなつた。

新撰組の職掌は市中の巡視浮浪の取締であつた。近藤土方の京都に來るや最初は必らずしも勤王の志士を捕縛斬殺する目的でなかつたが一朝京都守護職付きとなるや自から勤王浪士の敵となつて仕舞つた。

#### 第六 池田屋騒動

元治元年六月五日京都三條小橋池田屋に於て肥後の宮部鼎藏長州の吉田稔磨土佐の北添信磨等が新撰組に殺された。

宮部北添吉田等は某所を燒討し其擾動に乗じて局面の展開を計らんとする大陰謀を企て居つた。此陰謀組の秘密集合所は三條小橋の池田屋と其近傍の四國屋であつて新撰組も所司代も早くより此兩家に目を付け密偵を商人に扮して兩家に泊らせたり乞食に扮して近傍を徘徊させたりして居た。其結果何等かの手掛りを得たと見え陰謀組の一人古高俊太郎を捕へて拷問すると古高は苦痛に堪へ兼ねて陰謀の顛末を逐一自狀した。

其話を聞いて見ると陰謀の實行は既に一兩日後に迫つて居る。一刻も捨て置き難しと即夜襲撃の手配を定め會津侯や所司代に加勢の人数繰出を頼み置き新撰組を二手に分ち夜十時頃近藤は一手の勢を率いて池田屋に土方は残りの勢を率いて四國屋に向つた。

陰謀組の方でも古高の捕縛を採知し宮部北添等數十人池田屋の階上に集まつて色々と評議をこらして居つた。其所へ近藤が部下の壯士を率いて乗込んだ。

池田屋の階上は忽ちにして修羅の巷となつた。土方は四國屋に向つたが四國屋には浪士の影もなき故直ぐに池田屋に駆け付けた。格闘約二時間新撰組にても沖田總司吐血し藤堂平助永倉新八亦負傷したが結局陰謀組の負けとなつて肥後の宮部鼎藏長州の吉田稔磨土佐の北添信磨望月龜彌太石川潤次郎等何れも恨を呑んで泉下の露と消えた。

屋内の格闘として池田屋の格闘程激しかつたのは古今未曾有と云はれて居る。永倉新八の刀は折れ沖田總司の刀のボ子も折れ藤堂平助の刀はこぼれてさゝらの如く近藤周平は槍を切折られた。双方共死物狂ひの亂戦誰が誰を斬つたか更に判らない。判つて居るのは吉田望月が路上に飛降り血刀を振ひ乍ら重圍の中を切抜けて長州藩邸に向ひ傷重くして斃れたこと丈けである。

活劇後の池田屋の残狀は實に物凄くものであつた。襖も障子も一枚として満足のものはなく鮮血淋漓として疊を染め天井板や戸も鎗刀の跡で滅茶々であつた。

此夜街上に於ても亦格闘があつた。土佐の藤崎八郎と野老山吾吉郎が新撰組らしきものゝ襲撃する所となり藤崎は重傷を蒙り藩邸に歸て死し野老山は長藩邸に入れるも創重くして死んだ。

#### 第七 九門の戦

八月十七日の大政變に敗れて禁裏守護職を罷められ爾來百方勢力挽回の策を講ぜるも豪も其効なきに激昂せる長州は池田屋の格闘吉田宮部等の横死に一層激昂し元治元年七月遂に大舉東上することとなつた。其引率者は國老の益田右衛門介國司信濃福原越後にて久坂玄瑞入江九一寺島忠三郎、來島又兵衛、前原一誠、品川彌二郎等の志士之に屬し眞木和泉守を始めとして長州に同情せる浪士も亦之に加つて居つた。



軍隊の海路續々山崎伏見嵯峨に着すると同時に嘆願書を出して其冤罪を訴へ藩主父子の入京許可を嘆願したが當時京都に居れる將軍後見職の徳川慶喜は

「武器を準備し聽かなければ腕力に訴ふる考で嘆願書を出すは嘆願で無く強訴である。不穩當極まる振舞である。斯る不穩當極まる態度を宥恕し其願出を承認するときは以後諸侯に對して朝幕の威信を失墜することになる」

とて日限を定めて退去の朝命を下し若し従はざる場合は斷然之を追討せんと決心し會津桑名は勿論薩摩越前加賀大垣其他在京各藩何れも之に賛成した。

此情報の長州屯營に達するや益田右衛門介の陣營にて幹部級の會議を開けるが其際「在京の各藩と戦ふは長州として策を得たるものでない」とて退却論を主張するものもあつたが進撃を固執するものもあり結局三道より同時闕下に迫まることとなつた。

追討總督徳川慶喜は夫々部署を定め伏見山崎嵯峨各方面に各藩の兵を配置せるが長藩も手を束ねて敵兵の來るを俟たず敢然機先を制して九門に進撃した。

七月十八日の夜福原越後の軍伏見の長州藩邸を發して九門に向へるが途中小原鐵心の卒ゆる大垣の兵と衝突し小原は兵を伏せ長軍を間近に釣り寄せ大砲を放ち一齋に攻め立てたる爲め長軍は數十人の死者を出して退却した。

國司信濃の軍は翌十九日嵯峨天龍寺を發して蛤中立賣下立賣の三門に向ひ會桑の兵を破りて將さに御花昌に進まんとしたが薩兵の爲めに破られて敗走し來島又兵衛は阿修羅王の荒られたるが如く陣頭に立つて士卒を叱咤して居たが飛丸に中つて戦死した。山崎に屯せる益田右衛門介の軍も松原通

堺町門に至り轉じて鷹司邸の後門より進入し越前會津彦根の兵と戦つたが諸門守衛の敵軍悉く來りて鷹司邸を圍み飛丸雨の如く久坂は重傷を負ふて鷹司邸内に自殺し品川等は圍を衝いて突出逸走し眞木は山崎の天王山に退き山上に屠腹した。

近藤土方は新撰組を率いて所々に奮戦したが眞木等の天王山に退くや會津の兵と共に之を追撃した故鹿島淑男氏の著せる「近藤勇」と稱する書籍によれば其時の模様は左の通りであつた。

折柄七月半のこととて炎暑焼くが如く近藤等は甲冑を途中に脱ぎ棄て身輕になつて山上に駈け上つて見ると突然山腹の樹から樹に張り廻らしてある帳幕を引き上げ烏帽子垂衣を着た人物が現はれ出で詩を吟ずる模様故近藤等も呆氣に取られて居たが其人が幕の中に入つたと思ふと一齊に小銃を放つ故近藤は隊士を伏せて弾丸を避けたが間もなく火炎が超つた故駈け上つて見ると眞木等は何れも切腹して居り後になつて烏帽子垂衣の人が眞木であることが判つた。

此九門の戦ひには土佐を脱藩して當時長州に居た勤王黨の松山深藏等十五六人が加はつて居た。松山等は益田右衛門介の手に屬して堺町門鷹司邸天王山に轉戦した。其内柳井健次中平龍之助那須俊平尾崎幸之進上岡膽治は鷹司邸附近に戦死し伊藤甲之助は重傷を負ふて途中に屠腹し松山深藏、千屋菊次郎、能瀬達太郎、安東眞之助は天王山に屠腹し石田英吉は重傷を負ひ戦友奮に入つて之をかついで居たが敵の追撃急なる故石田は自ら求めて其戦友と別れ民家に匿れて危を免れ黒岩直方、南部甕男、清岡公張、池内藏太、上田宗兒皆一先づ長州に引上げた。中岡慎太郎も途中より從軍負傷した。

鷹司邸戦死者の一人たる尾崎幸之進は土佐勤王黨中の奇男子であつた。小判の眞贋を鑑定する金見

役の家に生まれたるも武藝を好み殊に槍に達し毎曉方々街道を槍をすこいて歩いた。高知縣幡多郡の龍串は奇岩林立天下の絶勝と言はるゝが尾崎の龍串に遊ぶや何思ひけん大喝一聲人頭の形をした岩を打碎いて藩廳より罰せられた。其同志と共に京都に在るや兩鬢を剃り廣げ紺木綿の着流しに手拭を下げる志士とは丸で恰好が違て居た。山内容堂之を見て近く呼寄せ酒を勧めると

「私は酒を呑むと女の頸に抱き付く癖があつて困るから御免蒙ります」と辭退した。容堂笑つて

「度を過ぎねばよいでないか」

と酒を呑ました所幸之進飲み且つ食ひ大皿に盛れる魚を全部食ひ盡し更に伊勢蝦三尾を甲片も残さず食て仕舞つた。天王山に陣せし時熱暑の爲め皆丸裸で寝て居つた。其時或槍術家が槍をすくくと槍好きの幸之進禪も付けず裸の儘飛起き地上に跪座し兩手畢丸を握り「ポカン」として眺めて居る其恰好の可笑しさに一同哄笑した。鷹司邸にては「尾崎幸之進一番槍」と叫び乍ら眞先に進み敵陣に突入して戦死した。

#### 第八 大利鼎吉の横死

大利鼎吉の横死は慶應元年一月八日の出来事である。

長州征伐が始まると土佐藩主山内豊範は幕府より大坂木津川の守衛を命ぜられ兵を卒いて上坂した豊範の卒ゆる兵の中に馬廻林某を隊長とせる槍隊があつて瑞山黨の

五十嵐幾之助 多田哲馬 上田楠次 島地正存

が其槍隊に加つて居つた。或日此人々の許へ長州に向つて脱藩せる大利鼎吉より突然手紙が來た披

いて見ると

大川町旅人宿の軒下に白紙を目印にして出してある。天下の一大事を相談し度いから至急來てくれろ」と書いてある。何事ならんと行つて見ると

千屋金策 井原應輔 大橋慎三 大利鼎吉

の四人が居た。何れも瑞山血判狀の署名者である。千屋金策は五十嵐等に向つて

「今や幕府の大軍は長州に迫まり長州は孤立して死地に陥つて居る。故に之を援ふ爲め大坂にやつて來た。丁度土佐藩主も大坂に出馬されたこと故供奉の人々の中には勤王黨の志士も多いことと思ふ。貴君等と相談して兵を河内の金剛山に擧げること致し度い。さすれば浪人の之に應ずるものも多いと思ふ。兵を擧げて第一番に大坂所司代を屠らば長州に向つた幕府の兵は必らずや一部を割つて大坂に送くるに相違無い。其際長州の兵が之を追撃し大坂を狭撃すれば勝利を得るに相違ない。諸君も之に同意して貰ひ度い」と

と勧めた。五十嵐等は其話を聞いて大に驚いたが上田楠次穩かに之に反對して

「夫れは實に意外の話である。貴君等は武市先生の入獄と同時に長州に脱走したが今や長州は幕府に攻められて死地に陥いつて居る。然るに諸君は長州に戦死せずして此大坂にやつて來て居るが長州では諸君を腰拔武士と云ふて居ると思ふ。君等の云ふ事はよいかも知れないが今や土佐にては武市先生が獄内に在り我々は藩の方針の改まるのを俟つて居る。諸君の意見に同意することは出来ない」と

と斷然拒絶して歸つて來た。其後大利は田中光顯片岡利和大橋慎三と共に大坂松屋町本多某方に潜

伏して居たが新撰組の谷萬太郎之を探知し不意に本多方を襲撃し大格闘となり大利は遂に亂刃の下に殺された。田中、片岡、大橋は丁度外出中にて災難を免れた。

三二

### 第九 武市瑞山の切腹

武市等獄に下るも土佐勤王黨は少數の脱藩者を出せるのみにて左して動搖の様を見無かつたが其後内に在りては吉田暗殺事件の取調頗る峻厳を極め外に在りては長藩大舉東上の報頻々と來たり内外の形勢切迫して最早黙視す可きに非らずと唱ふるもの多く元治元年六月遂に七郡同志の秘密會議を開くこととなつた。なる可く人目に立たぬ様各郡二三の代表者を出すこととし清岡道之助、清岡治之助、大石彌太郎、森新太郎、池知退藏、樋口眞吉、曾和傳右衛門、田邊豪次郎、等此會議に列したが安藝郡の清岡道之助第一に進み出て

「現下焦眉の急務は佐幕因循の藩論を挽回し在獄の武市先生等を救ひ出すことである。されども此事たるや個々單獨に藩廳に建議する様な生温いことでは到底効を奏しない。七郡の同志一團となり死を決して藩廳に迫り遠隔の安藝幡多兩郡は一層強硬の手段に出で野外に屯集示威運動を行ひ藩廳に於て尙ほ同志の要求を容れざるときは斷然驟起獄舎を破壊し在獄の諸士を救ひ出し共に長州に走て後圖を計るがよい」

と強硬論を主張した。されども他の同志は之に賛成せず

「今日藩論の佐幕に偏せるは隱居容堂の思召に出たるものにて其根底頗る固く容易に之を動じ得る見込が無い。若し示威運動を行はゞ一層藩廳の激怒を招き在獄の諸士に禍を及ぼすことと

なる。况や獄舎を破壊する如き暴舉と云ふの外ない。又假りに之を決行するとしても武市先生は斷じて我々と共に脱藩すまいと想像される。これ并平生の主張に徴して明らかである。然らば無益の騒動を藩内に惹起すに過ぎず勤王黨全體にも不測の奇禍を招くこととなる。寧ろ今迄通り自重して徐々に時機の來るを待つがよい」

と温和論を主張し互に論争の上結局香美長岡土佐吾川高岡の五郡は同志大舉藩廳に出頭し大監察に面會して時勢の切迫と在獄者の放免を痛論し安藝幡多兩郡は多少示威運動を試みることに衆議漸く一決解散した。

斯くて同月十三日大石彌太郎、川原塚茂太郎、門田爲之助、上田楠次、西山志澄、島地正存、阿部多司馬、三原兎彌太、池知退藏等約三十人（維新土佐勤王黨史に掲ぐる佐々木高行調の人名にて筆者少時土佐の新聞に掲げた人名と違て居るも一先づ此調による。此時藩廳に登用されて居る人々や入獄者の親戚は之に加へなかつた）藤並神社に打揃ひ一同神前にて誓約を結び夫れより南會所に出頭し大監察小八木卓助に面會し大石彌太郎一同を代表して時事を痛論し武市等の放免を乞ひ其儀叶はざれば吾々も同罪に行はれ度しと述べたるも小八木は

「篤と考慮の上追て沙汰する」

と云ふのみにて更に要領を得ざる故大石の起草せる建白書を提出し一同退出した。其建白書は要するに

「容堂が朝廷の御召を辭じて京都の危急を傍觀し徒らに貨殖に努むるを慨し獄に下れる武市等に對しては其誠忠の志を憐れみ些細の過失を窮追せず寛大の處置を執る可きを主張し吉田參政

横死事件を今更市井の取沙汰に基きて取調ぶるの非を痛論せるもの」にて中々の名文である。

當時獄吏の同情により獄中の諸士と獄外の同志との通信自由なりし故此建白も武市に打合せの上提出したものである。其後獄中の武市より家族への手紙に「扱此間彌太郎等が色々云ふて出たげな云々」と書いてある。

又彼の同志會合の席にて過激の議論を唱へし清岡道之助清岡治之助は高知より罷々派遣せる同志の忠告を耳にも掛けず同志二十餘人と共に兵器を携へて野根山中に屯集せるが追討の爲め藩兵の野根山に向ふや佐喜の濱より帆船に乗じて上國向け脱藩せんとせしも風波に沮まれて意の如くならず遂に捕縛されて悉く奈半利磔に斬首された。

二十餘人が奈半利磔に幕打まわせし圍の中に追入れらるゝと道之助大音にて

「斯くなる以上最早云ふことはない。何れも從容刀を受け志士の名を汚すな」

と呼ばばると一同之に應じて

「そうだ。そうだ」

と叫んだ。例により酒食の饗應を受けたる後道之助第一番に刑に就いたが

「嗚呼男兒鼎かくに甘んず」

と高らかに吟ずる其聲未だ終らざる内に首は前に落ちて了つた。残りの二十餘人も續いて刑せられたが其中には十六歳を最年少者として二十歳以下のものも四五人加つて居つた。

斯くて武市等は獄に在ること足掛け三年其間藩吏の糾問峻烈を極め島村衛吉の如き遂に拷問に斃る

ゝに至つたが慶應元年閏五月十一日藩廳は武市に對して切腹安岡覺之助、島本仲道、河野敏鎌、島村壽之助、小畑美稻に對して牢舎の宣告を下した。牢舎と云ふは今日の終身禁錮のことである。安岡に對する宣告は左の通りである。

#### 安岡覺之助

右者先達而揚家入被仰付候仔細に付度々御吟味被遂處難遁事蹟白狀に及ざるに付御詮議振を以て牢舎之を仰付らる

切腹の當日藩廳は武市の親族等呼び出した。島村壽太郎、小笠原忠五郎等が呼出に應じて呼出時刻より少し前に監察の許に出頭すると「門の所に控へて居れ」と云ふ故暫時控へて居た。日没頃になると「一同留の間に由よ」と云つて來た故留の間に出ると「今日武市半平太切腹仰付けらる。夫れに付き死骸を引取るならば其用意をせよ。又介錯人の名前も書いて出せ」と申し渡された。夫れで島村等が「切腹の場所はどこで御座りますか」と尋ねると「吟味場」との答である。「着物は」と尋ねると「袴を着けて」との答である。「夫れでは自宅より着物を取寄せ度い」と願つた所「程無く切腹の場所の準備が整ふ故間に合ふまい。兎に角急いで取り寄せよ」と云ふ故直ぐに駕籠と着物取寄の手配に掛り又島村小笠原の兩人介錯の旨を書き出した。夫れから再び門の所に歸つて暫らく控えて居ると着物が到着した故下横目に頼んで其着物を武市の手許に届けた。武市は上士の園村に下された宣告を聞くと揚家番に向て

「これで私しがどう云ふ宣告を受けるかも判つた。今迄長々大に御世話になり千萬忝じけない」と挨拶し牢内にて着て居た着物や手道具等を取片付け髪を結び死骸に垢が付いて居ては見苦しいと

て洗粉にてすり磨き最後の時の着物をどれかこれかと撰んで居る際取寄せた着物が届くと此事であつたと大に悦んだ。六シ時少し過ぎる頃介錯人に一刻も早く南に廻る様知らせがあつた故直様島村と小笠原が南に廻つた。武市の着物は下は晒し上着は浅黄紋付絹の帯を占め袴を着て出て来て中えんに座つた。監察間忠藏前記の宣告を読み終ると武市は「仰せ渡されの趣奉畏」と御受をし引取る場合にも両手を袴の前にて聊かも禮儀を亂さず顔色立居振舞平常と變らなかつた。夫れより吟味場の蒔砂に出る潜の内にて上下に着替へ再び出て、切腹の座に着いた。切腹の場所は吟味場の落えんより三尺斗り下つた所に疊を二枚敷き其上へ打卸しのいの表を延べ白木の三寶の上に袴鞘の懐劍に白の木綿切れを添へてあつた。武市が座に着くと左右へ介錯人の島村小笠原が着席した。武市は兩人に向つて「けふは御苦勞」と挨拶し懐劍を取り鞘を拂つて中身を能く能く見三寶の上に置き双肩を引ぬき帯際を押しくつろげ懐劍を取り木綿切れにて刃を巻き腹に突き立て三段に切り刀を右に置き手を突きうつ伏に俯した。此時島村と小笠原が兩方より脇腹を六太刀斗り刺すと絶息した。武市は久しく病氣にて疲勞して居り吟味場に出るにも下番の肩に懸る程故何れも最期の模様を心配して居たが愈其場になると病苦も何のその物の見車に立派なる最期を遂げて仕舞つた。時に年三十七であつた。遺骸は駕籠に載せ斯くと聞いて駈け付けた、大石彌太郎、上田楠次、阿部多司馬、多田哲馬、五十嵐幾之助、西山志澄等附き添ひ新町の自宅に歸り翌日吹井谷の墓所に葬つた。武市は繪が巧みであつた。獄中に於て自己の肖像二枚を畫き其一枚には

花依清香愛 人以仁義榮 幽囚何可耻 只有赤心明  
其一枚には

燕雀得時擅 蒼鷹向暗眠 如何幽獄裏 慷慨只呼天  
と題した。

又牢舎即ち終身禁錮に處せられたる安岡覺之助は宋の文天祥が燕京の獄に繋がれ獄室の中幽暗で水氣土氣日氣火氣米氣人氣穢氣の數氣發作雜出して人體を襲ふも自ら浩然の氣を養ふて此諸氣に敵し蒲柳の質を以て能く二年の命を保ち正氣の歌を賦して其胸中の鬱勃を遣つたことを思ひ俯仰感慨の餘り天祥に擬して左の養氣の歌を作つた。

嗟吾遇陽九。慶應乙丑年。弱質何以堪。死生唯任天。獄室僅號尺。低容極鬱愁。暗澹無昏曉。鐵窓白日幽。搔首塵紛落。捫膺垢充盈。衣禪臭衝鼻。忽見幾虱生。或當近寒日。破窓逞風威。凜烈殆裂肌。又逢酷暑候。檐隙畏日洪。四壁微涼絕。人如座甌中。秋冷雁來夕。春照鶯啼朝。俯仰集百感。憂心沖如燒。憶昔文丞相。囹圄七氣唯養。浩然。嗚呼此氣真可養。養足四體全。或憶大塔王。土窖稜々。嚙折刀。或憶大河内。石窟八載幽。蟄愈強豪。近感櫻田之義舉。漂々毛骨寒。又聞鶯谷之苦節。吟咏微肺肝。朗誦韓愈伯夷頌。高吟文山正義歌。是養氣術。感激奚思家。此氣不可飢。不飢堪困難。孟軻不言乎。養而無害滿天地間。

武市の入獄切腹後在藩勤王黨同志の途中相遇ふや「御互に困つたものである」と挨拶するのみにて又爲す可き術を知らなかつた。

翻つて脱藩志士の行動如何と云ふに當時土佐脱藩者の主なるものは坂本龍馬、中岡慎太郎、池内藏太、土方久元、清岡公張、石田英吉、田中光顯、上田宗兒、南部甕男等であつた。

阪本は脱藩後江戸に赴き勝安房の門人となりて航海術を習ひ勝の取成にて一旦脱藩の罪を許された

るも其後再び脱藩した。中岡も瑞山入獄後間も無く脱藩せるが此兩人は薩の西郷隆盛長の木戸孝允等の間を奔走して薩長の融和連合に努めた。愈薩長連合の成立し長州征伐の失敗し薩長討幕の出兵は最早時機の問題となるや中岡は在藩中一夕訪問共に國事に盡さんと誓へる上士板垣退助と瑞山の殘黨たる大石彌太郎等を融和せしめ板垣をして武市の殘黨を卒いて討幕軍に加らしめんと考へ木戸も坂本も吉井友實も之に賛成するに至つた。

第一〇 板垣退助の蹶起

武市瑞山が土佐藩論統一勤王黨組織の決心を抱いて江戸を發するとき大石彌太郎の紹介により上士の齋藤利行を訪問し上士中共に國事を相談す可き人物を尋ねるや齋藤は冷笑して

「上士は美味を貪り美服を纏ふのみで國事の相談相手になる様なものは一人も居ない強いて云へば平井善之丞小南五郎右衛門位のものか」

と答へた。されども此答は上士の大部分が徒らに暖衣飽食物の役に立たざるを憤慨せる餘りの激語であつて成程上士中の公侯爵とも云ふ可き家老中老にはこれと云ふ人物が居なかつたが山内家の一門にも隱居容堂と云ひ其弟山内民部と云ひ大名の家族に珍らしき儷出の人物があり復た其伯子男爵とも云ふ可き馬廻り及び以下には

- 吉田 元吉 平井善之丞 小南五郎右衛門 齋藤 利行 板垣 退助 後藤象次郎
- 福岡 孝悌 佐々木高行 本山唯一郎 小原與一郎 毛利 恭輔 神山 郡廉
- 谷 兎 毛 小笠原唯八 谷 干城 林 龜吉 片岡 健吉 山地 元治
- 北村 重頼 土屋 可成 大脇 順苦 坂井 重季 谷 重喜 八木 間作

- 伴權 太夫 高屋 長祥 長屋 重名 竹内 綱 山川 良水 原 傳平
- 小笠原謙吉 前野悦次郎 山田平左衛門 吉松 秀枝 吉井 源馬

等相當の人物があつた。山内家の國老にして宿毛の郷主たる伊賀氏の臣岩村英俊の如き其子岩村通俊、林有造、岩村高俊と父子四人揃ひに揃へる立派な人物であつた。

叙上の如く上士の中にも數十名の人物があつたが其内維新史上の大立物として其名を萬世に傳ふ可きは何と云ふても板垣退助と後藤象次郎の兩人たるや亦贅言を要しない。前掲諸名士中には片岡健吉の如き馬廻の末子とか山地元治谷干城の如き子爵級男爵級の上士とか岩村兄弟の如き三四代前の成上り上士もあるが板垣と後藤は末子でもなく男爵級でもなく成上りでもなく上士中の伯爵級とも云ふ可き數百石取りの馬廻りの當主であつた。

板垣退助は甲斐の板垣駿河守信形の末裔である。武田家滅亡後信形の子孫掛川の山内家に仕へ乾氏を稱し山内家の移封に伴ふて土佐に下つたのが退助の先祖である。維新前は乾退助と稱せるも東征軍總司令として大垣に至れるとき板垣に復性した。武市瑞山も一黨の首領と仰がる可き天稟の資質を備へて居たが板垣も亦天賦の武將であつた。角力と喧嘩は少年の時より大好物であつた。其頃高知市の南端を流るゝ鏡川原にて毎夜武士も町人もごつちやになり手拭を被り顔を隠して角力を取つた。魚屋や豆腐屋が「昨夜は何所の旦那様に勝つた」など、自慢する有様で此角力で士に勝つても無禮討に遇ふ様な虞れは決してなかつた。後藤も板垣も此仲間に入つて角力を取つたが後藤は身體が大きくて國見山型の角力板垣は小柄乍ら手取りにて逆鋒荒岩の風があつた。角力に關しては一隻眼を有し

「逆鋒は呼吸を考へて角力を取るが海山は呼吸と云ふことを丸で考へない」と嘆いたりしたこともあつた。或時知り合ひの某が梅と鰻を同時に食つた後之を同時に食へば死ぬると云ふ俗説を聞いて神経を起し俄かに顔色が變り腹痛を感じ苦悶し始めた。其時板垣が

「夫れは能い藥がある。直ぐ癒る」

と言ひ様數多の梅と鰻を一口に食ひ畢り

「どうだ。未だ痛いか」

と問ふと之に勵されて氣を取り直したのか某の腹痛みは忽ちに全快した。

其後管稅奉行となつて高岡郡に赴くや庄屋や農民がやつて來て貧困を訴へ減稅を嘆願した。其時板垣は庄屋等に向つて

「郡奉行はお前達に喧嘩をしてはならぬと云ふか」

と尋ね庄屋等が

「左様で御座います」

と答ふると板垣が

「俺の考は違ふ。此村の様様を見るに米の飯が食へぬとか木の實を食つたとか泣言を並べて減稅を哀願し耻を知らざる惰民の集りである。之を勵ますには先づ喧嘩をさすがよい。喧嘩は耻を知つて始めて出来るものである。高知の菜園場では蚊帳や釜を質に入るゝ程の貧民でも初松魚を食て自慢する。安政の大地震の時も金持の救助を受くるを潔しとしなかつた。耻を知る實に斯の通りにならねばならぬぞ」

と庄屋等を叱り飛ばした。此事が藩廳に聞ゆると

「百姓に喧嘩を勤めるとは怪しからぬ」

と今度は板垣が叱られた。

此天稟の武將は平井善之丞とも親戚であつたが寧ろ吉田派に近く後藤と共に吉田元吉に可愛がられた。吉田派に近く吉田には可愛がられたが純粹の文官的吉田派たる後藤、福岡、由比、市原、野中等とは多少趣を異にし其意氣最も投合せる友達は小笠原唯八であつて吉田の暗殺當時は板垣も小笠原も江戸の藩邸に居つた。

板垣小笠原は江戸に居る武市系の間崎滄浪を介して他藩の状況を探つたりして居たが下士勤王黨の勢熾にして稍もすれば容堂に逼り上士を壓せんとする形勢に憤慨せるか吉田暗殺の事情等が段々江戸に知れて不快の念を生ぜるか將た間崎等と感情の衝突でもあつたのか次第々に武市間、崎等を敵視する様になり此等武斷派上士は江戸に於ても又容堂に従て京都西下並に歸國後も武市派の敵手となり周布事件(第二〇を見よ)の際間崎等が其側に居乍ら周布の無禮を咎めなかつたとて小笠原は間崎等の切腹を要求したり板垣は自ら發起人となつて毛利恭助、高屋長祥、小笠原唯八、山地元治等と

「一人たりとも上士の暗殺さるゝときは下士の所爲と認め我々も立て下士の首領武市を斃さんと約束し武市が小南五郎右衛門より此話を聞きて板垣を訪ひ其寛和を計るも耳を借さなかつたりした。

板垣は武市派と反目したが必らずしも勤王攘夷の絶對反對論者ではなかつた。少年時代喧嘩好きで

あつた板垣は公武合體とか開國とか云ふ生温い議論よりも討幕とか攘夷とか云ふ激しき議論が寧ろ好きであつた。討幕は未だ唱へなかつたが攘夷は既に唱へ出した。文久二年五月十日朝廷より攘夷の令を發し長藩下の關にて米佛英等の軍艦を砲撃するや板垣は

「毛利家は山内家の姻戚でもあり旁攘夷の援軍を送り度い。拙者自ら其任に當り兵を率いて彼地に赴き度い」

と申し出た。藩廳は無論此意見を納れなかつたが武市派の一人たる中岡慎太郎が此話を聞いて面白い人物だと思つたのが板垣の土佐歸國中一日突然板垣を訪問した。

中岡が板垣に遇ふと板垣は譬頭に

「君等は京都に於て俺を殺そうとしたではないか」

と中岡に尋ね中岡が

「左様なことはなす」

と辯解すると

「中岡慎太郎は男でないか。隠すのは卑怯でないか」

と擲擧し興奮性の中岡が

「如何にも最初は君を殺さねばならぬと思つた」

と白狀すると板垣も喜んで種々の話を始め板垣が勤王討幕論者にして保守佐幕論者に非らざるを明かすや中岡は事の意外に驚き

「今迄全く誤解して居つた」

とて他日共に國事に盡さんと約して辭し去つた。

中岡は間も無く土佐佐を脱藩し板垣は藩廳の一員として武市等の訊問にも多少關係したが其獄の未だ決せざるに先立つて慶應元年正月官を辭して江戸に赴き武市の切腹當時は土佐に居なかつた。

中岡は脱藩後坂本龍馬と共に薩長の連合を斡旋し連合の愈々成立し征長軍の連戦連敗し薩長兩藩の蹶起して討幕の義旗を翻すも今や時の問題となるや中岡坂本等は板垣等と在土佐武市殘黨を合併せしめ討幕の舉に加はらしめんとし在土佐武市殘黨の幹部も薩の西郷吉井も長の木戸孝允も皆之に賛成した。最初は板垣や武市殘黨の努力により土佐の藩論を動かして討幕の舉に加はらしむる考であつたが到底實現の見込なき故後には同志蹶起脱藩して之に加はることとなつた。

板垣は慶應三年春江戸に於て既に薩の吉井友實に遇つた。同年五月板垣の江戸より京都に上るや中岡慎太郎、谷干城、毛利恭輔の三人が板垣を訪ねて

「今や薩藩は土藩の行動を憤り且つ疑ひ今後討幕の相談をせざるは勿論甚しきは先づ土佐を討つてと云ふて居る。貴下は此際如何したがよいと思ふか」

と尋ね板垣が

「退助江戸を出るとき君前に諫死の覺悟を極めて來た。跡の事は萬事諸君に頼み度い」

と答ふると中岡は疊を叩いて

「足下は國家の危急を顧みずして唯自己一身の名をなさんとする乎。足下獨り先づ死ぬることは許さない。如何したらよいか其方法を云へ」

と大に怒つた。板垣は暫らく考へたる上



「此上は同志の士が藩に代りて討幕軍に加はるより外に方法がない」と答へ夫れより一同打揃ひ薩の西郷隆盛に遇て其約束をすることになつた。同月二十一日小松帯刀の邸に小松帯刀、西郷隆盛、吉井友實、板垣退助、中岡慎太郎、谷干城、毛利恭輔の七士會合し板垣が

「藩論の如何に拘はらず同志驟起して討幕の軍に加はり申さん。若し此言に違はゞ退助生きて再び御目に掛り申さぬ」

と云ふや西郷は

「愉快極まる御話誓て大事を御一所に致す可し」

と答へ中岡は更に席を進みて

「板垣の云ふた言葉に決して間違は御座らぬ。萬一間違を生せば此中岡が割腹して御詫する」と割腹抵當の誓をした。次て板垣は割腹抵當軍出發準備の爲め土佐に歸り中岡は勿論谷毛利等も京都に止まつた。

板垣中岡の討幕に賛成せる上士の一人は小笠原唯八であつた。板垣が歸國して西郷と會見の模様を小笠原に語るや小笠原は踊躍して之を喜んだ。板垣が兵を卒いて土佐を發せる際小笠原は土佐に止まり數日後松山征討軍に従て松山に向ひ之を降服せしめ後性名を牧野群馬と更めて總督府軍監となり江戸に下り上野の戦に臨めるが其後奥州に來りて戦地の状況を視察し明治元年八月二十三日會津城下大激戦の際自ら大砲の網を索き士卒を勵まして彈丸雨飛の中を進み丸に中つて死んだ。同じく上士の一人は谷干城であつた。谷の祖先は長曾我部氏の頃八幡の神官を務め累代國學者を出

し宗家は數代前より上士に列せるも干城の父は別家の末子のこととて窪川村に赴き醫を業として生計を立てんとせし程なりしが其後干城の父も亦上士の列に加はることとなつた。干城早くより江戸に遊學し漢學を安井息軒の門に習ひ其際下士武士派の河野敏録池内藏太等と學窓を同うした。

曩に武士派と反目して「一人たりとも上士を暗殺されたら武士を殺さん」と約束せる毛利恭輔、山地元治や土屋可成、山田平左衛門、小笠原謙吉、北村重頼、吉松秀枝、坂井重季、眞邊戒作等の諸上士も皆此討幕に加盟した。

板垣派と武士派を融和せしめ板垣を首領として討幕の兵を出さんとする中岡の計畫に賛成せる在藩武士殘黨の第一人は在藩武士派の泰斗とも云ふ可き香美郡野市村の大石彌太郎其人であつた。大石は文久二年江戸より歸國後藩命を帯びて中國九州に出張し文久三年再び藩命を帯びて長崎に出張した。此際獨斷を以て幕府が和蘭より輸入せる尖彈銃一千挺を買ひ受け歸藩後參政平井善之丞を訪ふて其趣を報告し專斷の罪を謝したが平井が大石の心事を了解してくれた爲め無事事濟みとなつた。此一千挺と慶應三年阪本龍馬の土佐に買下せる旅篠銃とが維新東征土佐軍隊の首動を奏する一因となつた。其後元治元年同志と共に瑞山救解の運動をしたのは前述の通りである。

慶應三年二月大石は上士に拔擢され軍備役を命ぜられた。西郷隆盛が土佐に來て容堂に遇つてから十日目であつた。

同じく武士派下士の一人にて大石の相談相手になり得るものは秋澤清吉であつた。秋澤は五十嵐文吉等と同格の白札にて高知城西の旭下島に住し夙に陽明學を修め武士瑞山の血判に加はれるは勿論文久二年武市が京都に活躍するや秋澤も同志と共に出京縉紳の門に出入し有志の間を奔走して國事

に盡し南部甕男千頭小太郎、池上源次と連名にて大原重徳を経て中興攘夷の意見書を朝廷に奉つたこともあり其妻は瑞山と江戸に同行し五十嵐、大石、坂本とも親善なる多田哲馬の妹であつた。山内容堂學を好み殊に歴史に通ぜるが秋澤も史學に通じて居つた。容堂は上士は勿論下士の子弟を引見して書を講ぜしめたが一日清吉が其中に交りて史書を講ずるや容堂は何思ひけん講書後重臣に向つて「あれは他日用ぬばならぬ」と言ふたことがある。板垣、小南、大石等が此言渡を利用したものは慶應三年末藩廳は秋澤を突如上士に拔擢した。

安岡亮太郎も亦同志の一人であつた。安岡は幡多郡中村の郷士にて幡多郡廳や高知藩廳に勤務し武市の連判狀には加盟せず且つ有志の會合等に餘り出席（藩吏の列に居る人は可成同志の會に出席させぬのが武市の方針であつた）せざりしも疑もなき武市派の一人たるのみならず樋口眞吉と共に幡多郡勤王黨の首領であつた。樋口も中岡の擧に賛成せる同志の一人たるも怨むらくは既に五十餘歳の老齡であつた。幡多郡の志士を提げて立つ可きものは安岡亮太郎其人であつた。幡多の有志は京都の樋口より通知もあり出兵が餘り手間取るなら幡多一郡にて分離脱藩安岡を領袖として薩長の討幕軍に加はらんと意氣捲き志士數十名武装高知に來り安岡及び桑原介馬等を總代として自費上京禁闕守護の願を出したが藩廳は之を慰諭し脱藩を中止せしめた。

桑原介馬は幡多郡の大庄屋の家に生まれ擊劍に長ぜるのみならず目から鼻にぬける様な才物であつた。或時山内容堂藩内の劍客を集めて御前仕合をやらせたが其時桑原が武市半兵太の相手に選ばれた。武市の顎が長くて尖がつて居るのは有名だが桑原の顎も長くて亦尖がつて居つた。

「顎と顎の勝負か。どつちが勝つたら」

と見物一同可笑しさを堪らへて眺めて居た。最初は丁々發止と打合つて居たが終りに組打となり桑原が武市の面を取つた。東征の際桑原は池知退藏等と共に徒軍監であつた。維新後中央政府に出仕し中央政府にて警察制度を定むるや桑原を其要路（羅卒總長の模様）に据えた。土佐人には珍らしき位伶俐な男であつて若し長生せば必らずや顯榮の地位に昇つたと思はるゝも天は此才物に壽を假さず不幸にも安岡に先立つて病死した。

池知退藏も亦同志の一人であつた。池知は知名の劍客にて長岡郡勤王黨の重鎮であつた。板垣が中岡等と共に西郷を訪ふて討幕を約する際大石も秋澤も兩安岡も京都に居なかつたが其代り樋口眞吉や瑞山夫人武市富子の弟島村壽太郎（祐四郎とも云ふ）や大石と異體同心の香長系志士森新太郎（助太郎とも云ふ）池知退藏が居て中岡と會合種々畫策して居つたのは特筆大書す可き重要事實と云はねばならぬ。中岡が在藩武市殘黨と打合せの上討幕の密約を結んだ事實を立證するものと言はねばならぬ。討幕の密約が愈成立するや森池知島村は準備の爲め樋口中岡と別れて急遽歸國した。樋口中岡は東山曙亭にて送別の宴を開き三士を送つた。

慶應三年九月曩に武市瑞山切腹の際終身入獄の宣告を受けたる河野敏鎌、島本仲道、小畑美稻、島村壽之助、安岡覺之助が出獄した。安岡は出獄と同時に此計畫に參與することとなつた。

此等の人々は或は板垣を助けて土佐の兵制を改革し從來の刀槍を棄て、銃隊砲隊を編成し或は同志を糾合し或は反對論者を説服して板武兩系の融和に努めた。

安岡等の出獄後同志の重立たるもの田淵の島村邸に會して板垣を推して討幕出兵を決行する可否を議したが同志中從來の關係を論じて之に異議を唱ふるものもなきに非らざりしも結局大局に鑑みて

一同之に同意することとなつた。脱藩討幕の意を決せるもの約二百人其主なるものは前記諸氏の外に

四八

島村壽之助	森 新太郎	岩崎馬之助	島村 外内	桑原 平八	三宅謙四郎
吉本平之助	田邊虎一郎	田邊豪次郎	楠瀬 六衛	沖野 平吉	大石俐左衛門
曾和愼八郎	矢野川龍右衛門	森田金三郎	三原兎彌太	島村壽太郎	堀内賢之進
中島與一郎	上田 楠次	島地 正存	西山 志澄	別役 成義	今村 長賀

等であつた。其頃長崎に於て英國水夫が殺され其加害者が土佐人海援隊員らしいと云ふので英國公使が軍艦に乗じて談判の爲め土佐の須崎に來たり土佐の藩廳よりは後藤象次郎が須崎に出張して之に應接した。坂本龍馬は英艦の須崎に向ふを聞き其模様を窺ふ爲め竊に土佐藩の漁船に便乗して神戸より須崎に來り脱藩の身を悼り船内に潜伏して居つた。其時板垣退助は軍令を出し部署を定め軍を二手に分ち夜を侵して一隊は浦戸種崎一隊は須崎に向はしめた。坂本龍馬之を聞いて痛く驚き岡内重俊を藩廳に遣し「板垣は英國と戦ふか」と尋ねさしたが板垣は笑て答へず傍に居た大石彌太郎が「攘夷をやるものか。討幕の演習をやつて居るのだ」と答へ重俊須崎に歸りて其旨を龍馬に傳ふると龍馬は之を聞きて哄笑した。

叙上の如く板垣は脱藩討幕を約束して歸つたが此脱藩討幕と云ふ事も中々思ふ様にはならなかつた。武士の入獄後平井善之丞小南五郎右衛門等の勤王系上士は退けられ吉田派は復活して守舊派と共に藩廳の要路を占めて居つたが其後薩長の連合征長の失敗と共に吉田派は二分して後藤象次郎、福岡後藤等の大政返上建白論者

野中等と守舊派の合併せる佐幕論者

板垣小南の討幕論者

の三派となつた。坂本以外の武士派は皆板垣派であつた。山内容堂は後藤の意見を採用し大政返上を建白することとなつたが板垣、中岡、大石等は云ふ迄もなく之に反對であつた。

其内に討幕の陰謀江戸藩邸に浪士を隠匿せし事件より暴露し始め佐幕派は連署板垣等を弾劾し慶應三年十一月十四日の夜の如き佐幕派が板垣の切腹を藩廳に強要するとの噂高く勤王黨の同志馳せ集つて板垣邸を警護し大騒ぎを演じたこともあつた。

明治元年一月二日(容堂上京後)江戸薩藩邸を落ちたる薩人の一隊漁船に搭して兵庫に來り幕府の海軍奉行榎本武揚に追はれ土佐の東端に來り救を板垣派に求むるや佐幕派は再び騒ぎ出し板垣等の所分を藩廳に迫り板垣の生命は殆ど風前の燈火同様の觀ありしが其際伏見鳥羽の戦報突如高知に達し形勢の轉換を見るに至つた。

第一 三條橋畔月下の格闘

三條橋畔月下の格闘は慶應二年九月十二日の出來事である。

幕府が征長軍を起せし際長州の罪狀を掲ぐる制札を三條橋畔其他數ヶ所に立て休戦後も之を撤去し

四九

なかつたが長州に同情せる人々は目障りなりとて此制札を抜き去り墨黒々と塗抹して之を加茂河原に投げ棄て新たに建てたる制札も同様之を抜き去り川に投込んで仕舞つた。此話が京中の評判となり町奉行は幕府の威信を損ずる事件なりとて其旨を會津侯に申送り會津侯より新撰組に其監視を命じ新撰組は隊員十數人宛を掲示場附近三ヶ所に潜伏せしめ更に數人を乞食に扮し三條橋下に潜伏させて居つた。斯ることは夢にも知らぬ土佐瑞山黨の宮川助五郎、安藤鎌次、藤崎吉五郎等八人丸山に痛飲し醉餘制札引抜て決し先斗町を北行すると先斗町會所に詰めて居た原田佐之助等の一隊は之を怪しみ見え隠れを尋行したが宮川等は之を知らなかつた。宮川等が三條大橋西詰に達し愈制札を引抜きて鴨川に投ずるや原田等の一隊は刀の鞘を拂て之に斬つて掛り宮川等も之に應じて抜刀互に勇を鼓して月下に切り結んだ。此時橋西の酒屋に詰めて居た新井忠雄の一隊も乞食に扮して居た橋本某の急報により駆付けて原田等に加り新撰組は土佐側の三倍の人數となり土佐側は高瀬通り三條を戦ひ乍ら南に逃げたが藤崎は遂に斬殺され宮川は重傷を負ふて捕虜となつた。残りのものは更に東に逃げたが此時橋東に詰めて居た大石敏次郎の一手も亦駆付け土佐側六人は重軽傷を負ひ乍ら辛じて逸走した。安藤は一旦河原町の藩邸に歸つたが翌日自殺した。

#### 第一二 坂本龍馬の横死

坂本龍馬は慶應二年一月二十三日の夜伏見寺田屋に於て幕府の捕吏に襲撃された。其時浴室に居た坂本の妾於龍俄かに街上の騒はがしきを怪しみ戸の隙間より透し見れば間に閃らめく槍の穂先扱では一大事と衣裳を纏ふ暇も無く裏階段を駆け上り急を龍馬に告げた龍馬直ちに短銃を擬し龍馬護衛の任に當れる長州の三吉慎藏は手槍を戦つて駆起するや抜刀の捕吏

は間も無く二階に駆け上つて來た。

「御不審の筋あり訊問する」

「薩藩の武士に對して案内も無く無禮千萬な」

「薩藩とは偽りならん」

「然らば薩邸に問合せて見よ」

「何故あつて武器を携へて居る」

龍馬からからと笑つて

「これは武士の嗜みだ」

理の當然に捕吏も返す言葉なく一先づ階段を下りて了つた。油断ならじと其隙に敵の小楯となる可き間の襖を取り拂ひ三吉は前に坂本は後に夫々足場を定め捕吏の再來を俟つて居つた。案の條數名の捕吏が再び階段を登て來て「肥後守の上意なるぞ。神妙に致せ」と呼ばり乍ら牛合龍燈をさし付けた。龍馬は「我は薩藩の士肥後守の指圖を受けるものでない」と叫び乍ら「ピストル」を連發し三吉亦槍を以て縦横に亂刺すると捕吏は支へ兼ねて階下に退むたが捕吏の一人突然坂本の左側に來たり刀を以て坂本に斬り付け坂本銃身を以て其刃を受け指を切り下された。三吉は槍を振ひて突進し捕吏は階下に逃げ去つた。三吉は更に追撃せんとしたが坂本は之を制し此間に裏口の物置を切抜け隣家の庭に飛び下り挨拶して小路に遁れ出て暫らく休息して又逃げた。途中寺あり其板扉に上らんとせしも捕吏の手配濟なるに氣付き路を轉し川端に出て材木置場に入り其棚の上に隠れ三吉は切腹せんとするを坂本押し留めて「君は薩邸に駆け付けくれよ。若し途にて捕吏に會ふ共死は覺悟

のこと故夫れ迄の話。夜明くれば事面倒故早く駈け付くれ」と三吉を促し三吉は川端にて血を洗ひ草鞋を拾つて旅人に扮し途中商人體の者に逢ひて薩邸の所在を問ひ薩邸に着すると留守居のもの出迎へて「昨夜の様子は坂本氏の妾より注進があつた。如何なれるやと心配の處御話を聞いて安心した」と斗り直くに船を準備し印を建て、坂本を迎へ斯くて坂本は萬死の中に一生を得た。其後幕府の運命の益々切迫するや京都の旅寓に居る坂本の身邊には影の形に添ふが如く數多の刺客が付き纏ひ其一命は實に風前の燈火と全様であつた。土佐藩邸に移る様坂本に忠告した人もあつたが例の氣輕の性分故左程意に介して居なかつた。窮屈なのを嫌つてか藩邸に移らなかつた。慶應三年十一月十五日當時洛北百萬遍に居た中岡慎太郎が百萬遍の屯所を出て午後五時頃河原町四條上る書店菊屋方に來り菊屋の小僧峯吉に一封の書翰を渡し「之を薩摩屋敷にもて行き其返事を近江屋に持つて來てくれ」と頼み置き夫れより近江屋に赴かんとして途中谷干城の寓所に立寄つたが谷不在故直くに河原町三條下る蛸藥師角の近江屋新助方に向つた。近江屋は坂本龍馬の寓所であつた。新助は龍馬の爲めに特に裏庭の土藏中に一室を設け龍馬を其中に入れ萬一の場合には其裏手の誓願寺の地内に出る様梯子を掛け置き夜具食器等皆藏の中に入れ置き出入の商人にも龍馬の居ることを秘して居つたが龍馬は兩三日より風氣にて其日は母屋の奥二階に居り眞綿の胴着を着舶來綿の綿入を重さね其上に黒羽二重の羽織を着て居つた。峯吉は午後七時頃近江屋に赴ゐて返書を差出すと坂本と何か話して居た中岡は話を止めて之を受取り峯吉と問答中岡本健三郎がやつて來た。雑談小半時後龍馬は峯吉に

「腹が減つた。峯シヤモを買ふて來ないか」

と云ふと中岡も

「俺も減つた。一緒に食ふから健三貴様も一所に食つて行かぬか」

と言ひ乍ら岡本を顧みた。岡本は

「私はまだ欲しくはありません。一寸外に行つてくる所もあれば峯吉と一所に出掛けましよ」と立上つた。中岡は

「又例の龜田へ行くだろう」

「左様ではありませんぬ」

と云ひ乍ら峯吉を促し梯子を下つた。其時坂本の僕藤吉は

「何か御用ならば私が行きませう」

と云へるも峯吉は

「いや俺が行く」

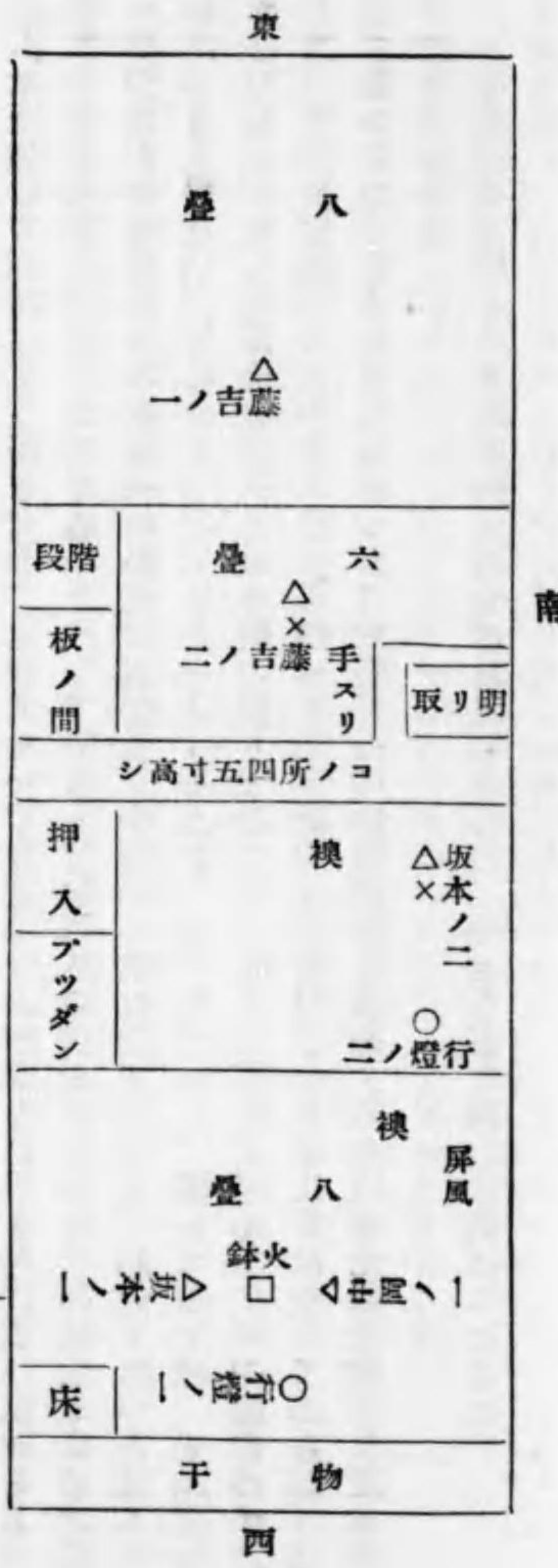
とて岡本と共に戸外に出た。

坂本と中岡が何か話をして居ると此時階下にて案内を乞ふたものがある。六疊二間を隔てた二階八疊の間に居た角力上りの僕藤吉階段を下りて之に應接すると客は一人にて「拙者は十津川郷士である。坂本先生御在宅ならば御目に掛り度しと」懐中より名刺を出し藤吉が其名刺を持つて階段を上ると後より二三人の武士が竊に之に續き藤吉が名刺を龍馬に渡して引返して來た所を突如斬り付け藤吉は聲を發する間もなく六太刀斗り斬られて其場に斃れて了つた。

藤吉の斃れた時ばかりと音がすると龍馬が「ぼたえな」と叱かつた。店の間で誰かふざけて居ると

五四  
 思つて土佐の方言で騒ぐなと云つたものである。其「ほたえな」の聲が終るや否や二人の刺客直ぐに奥八疊の座敷坂本と中岡が名刺を見て居る所へ躍り込み「こなくそ」と云ひ様一人は中岡に斬り付け一人は龍馬の前額へ深く横に切付けた。はつと思つた龍馬背後の床の間にある刀を取らんとしたが其際右の肩先より左の脊骨に掛けて大袈裟に斬られた。兩所の痛手にも屈せず刀をとつて刺客に向つたが之を抜く暇がない。三の大刀は鞘の儘にて受止めたが天井が曲つて居て西の方が低く鞘が天井に固へて鑑が天井を突き破つた。龍馬の太刀打の處より六寸許り鞘越しに刀身を三寸餘削りて太刀は流れ龍馬の前額部を更に深く横様に斬つた。流石の龍馬も今は堪らず「石川刀はないか。刀はないか」と連呼し乍ら其場に昏倒した。中岡も短刀を取つたがこれ亦抜く暇がない爲め鞘の儘振り廻はし乍ら刺客に向つた。刺客は之を拂ひ退け乍ら斬る。斬られ乍ら刺客に逼る。復た斬る。復通る。今は頭やら手やら數ヶ所の傷を負ひ致方無き故刺客に武者振り付かんとしたが兩足を斬られて倒れ遂に其場に昏絶した。刺客は返り際に中岡の臂部を切り中岡は其痛に蘇生せるも刺客の居るを見て死を裝ふて居つた。刺客は「もう宜い。もう宜い」と云ひ乍ら其場を去つた。暫時して坂本も亦蘇がへり刀を杖つき燈火の前ににじりより劔を抜みて燈火に照らし「残念残念」と呼び且つ中岡に向つて「手が利くか」と問ひ中岡が「利かぬ」と答ふるや行燈を提げて次の六疊の座敷に至り「新助醫者を呼べ」と叫び且つ「僕は頭を深くやられたから駄目だ」など云ひ乍ら昏倒した。  
 中岡は痛みを忍んで裏の物干を傳ひ北隣りの屋根に出た儘其處に蹲んで居た。

右の内「坂本の二」とあるは刺客前の地位「坂本の二」とあるは双傷後の地位中岡藤吉皆同じ此時階下の奥の間に居た近江屋新助はけたたましい二階の物音に驚いて戸外に出でんとせしも刺客が門口に立番して居るを知り一先づ居間に引返し聲を出さぬ様妻子に言ひ含め頭より布團を冠せて置いて裏口より土佐藩邸に急報した。此急報に接した土佐藩邸にてはすは一大事と島田庄作追ッ取り刀で第一番に馳け付けた。



菊屋峯吉はシャモを潰すのを俟つた爲め午後九時頃漸く近江屋に歸つて來た。返つて來て見ると入口の壁際に抜刀の男が潜んで居る故驚き乍ら表の光りに透して見ると顔馴染の島田庄作なるより「島田さんでは御座いませぬか」と云ふと「峰吉靜かにせい。今龍馬がやられた。賊は未だ二階に居る。出て來たら斬らうと待つて居る」と答へた。其内に二階の方で人のうなり聲が聞ゆるので峰吉が耳を澄して聞くと外に何の氣配もない故刺客は去つたであらうと拔足差足梯子を上つて見ると血腥き匂は鼻をつき藤吉は血まぶれになつて階子段の上り際の六疊の間に斃れて居り次の奥六疊の間には龍馬が俯伏しになつて血にまびれて斃れて居つた。恐る恐る行燈を携へ奥八疊の間を覗いて見たが中岡の姿が見えない。其内に隣家の屋上に人の呻き聲が聞ゆる故能く見ると中岡である。峯吉がふるひ聲にて「賊はもう居ませぬ。上つてをいでなさい」と呼ぶと島田も近江屋の家族も上つて來て中岡を八疊の座敷にかつき込み介抱して居ると曾和慎八郎がやつて來た。其時坂本は未だ温氣があつたが全身朱にまみれ呼吸は絶えて居つた。中岡が「賊は階下に居る。油斷すな」と云ふ故曾和が「もう居ない。安心せよ」と云ふと「あゝそうか」とうなづいた。續いて谷干城、毛利恭助等が駆け付け何れも切齒憤慨すれど最早後の祭りであつた。直ぐに醫者を呼んで中岡や藤吉の手當をした。中岡の傷は頭やら手やら足やら總べて十一ヶ所にて右の手などは皮丈け残つてぶらぶらして居て縫ひ合はすことも出来なかつた。此趣を白川の陸援隊に通知すると田中光顯や吉井友實もやつて來た。田中は

「長州の井上聞多はあれ程斬られたけれど助かつた。先生も氣を確かに御持ちなされ」と中岡を勵まし吉井も中岡を慰さめた。中岡は精神が確かだ

「刀を手許に置かざりしは不覺の基であつた。何れもこれから注意せねばならぬ」

「早く幕府を倒さぬと此通り反對にやられる」

「幕臣の中にも斯る思ひ切つたことをやるものもある。しかと覺悟せねばならぬ」

「賊はこなくそと云ひ乍ら斬り付けた。二人が名刺を見よをとする所へ斬り込んで來てをれを先にやつた。斬られた時ははつと思つた。其時坂本が後の床にある刀を取らんとした丈けは覺えて居る」

などと語り且つ

「王政復古の事は一に岩倉卿の御力によるなり」

と岩倉への傳言を香川敬三に頼みなどした。又中岡は咽喉が渴いたとて湯水を求め湯水を與へてよいものか相談中「焼飯が食ひ度い」とて之を求め「うまいうまい」と言ひ乍ら食つた。此變事を近在に居た海陸兩隊員に告ぐると高松太郎、長岡謙吉、菅野覺兵衛等何れも急いで入京した。

藤吉は翌十六日絶命した。中岡は後頭部の傷が腦に達して居たと見え嘔氣を催し翌々十七日遂に絶命した。翌十八日三人の遺骸を東山靈山に葬つた。

刺客は何者であるか判らない。證據物件は「こなくそ」と云ふた言葉と遺留品の鞘と下駄丈けである。其頃新撰組の伊東甲子太郎一派は近藤等と意見を異にし勤王黨に近付き坂本の遭難前「刺客にねらはれて居るから宿所をかへなさい」と坂本に忠告したこともあつたが坂本の遭難を聞くや直ぐに近江屋に駆け付け來り遺留品の鞘を見て「新撰組の刀である」と語つたと云ふ話である。下駄も瓢箪の印の中に亭の字があつて先斗町の瓢亭の下駄と判り瓢亭に聞き合せて見ると「新撰組の御方

に貸しました」と答へたと云ふ話である。其後桐野利秋、谷干城、毛利恭助の三人が伏見の薩摩屋敷に行きて伊東一派の人々に此鞘を見せると「こなくそ」と云ふ言葉が原田佐之助の生國伊豫松山の方言であることも思ひ合せたものか二人評議の上「原田佐之助の刀と思ふ」と答へた。これで見ると如何にも原田等の所爲の様に思はるゝが原田等でなく見廻組の佐々木唯三郎、今井信郎の所爲であると云ふ噂もある。確かなことは今以てどをも判らない。

### 第一三 天満屋の切込み

坂本龍馬中岡慎太郎の殺さるゝや海陸援隊士の痛恨やる方なく何者の所爲であるかと其搜索に血眼になつて居つた。所へ海援隊の一員たる陸奥宗光がやつて来て「紀州の三浦安が坂本を殺した」と報告した。血氣に逸る隊員は結束して直ちに立ち陸奥を始として宿毛の岩村高俊、大江卓瑞山派の澤村惣之丞等十六人白鉢巻を以て目印とし正面側面裏手の三手に分れ天満屋の二階座敷にて三浦や土方歳三等の酒宴を催せる所に切り込み亂闘の上引揚げた。双方共死傷を出せるが隊員側にては十津川郷士中井庄五郎が眞つ先に切込んで闘死せるは疑も無き事實である。平尾道雄君の著せる新撰組史を見ると

「中井が勢荒く蹈込み矢庭に正面の三浦に聲をかけて「三浦氏とは其許か」と問ふ「左様」と答ふる間を置かず中井特技の居合抜きで片ひさを突き様切付ける。切先は辛くも三浦の額を傷けたが之を見た土方歳三は突嗟に長脇差の鞘を拂つて傍から中井の腕を丁と切落す。岸島房太郎はすはと斗り刀を掴んで階段によつたが中井に續いた前岡力雄が障子の蔭から振り下した太刀先に眉見から眼へかけて傷けられ原田佐之助は階段の上り口から續いて馳せ登る本川安太郎

の肩先へ一太刀浴せれば本川は堪らず下へ轉び落ちる。これより双方入り亂れて戦ひ表へ走り出んとして側面の寄手と切結ぶ者もあり。短銃を發するものもある。遂に燈火も消えて暗黒の内に敵も味方も分ち得ない有様となつた。間もなく暗中に「三浦を打取つた」と呼ぶ者があるそこで目的を果したと云ふので一發の號砲を合圖に引揚げた

と書いてある。確に此通りかどうか筆者之を知らざるも平尾君の此著書が頗る面白き至て精確な書籍であることは讀者に伺つて斷言することが出来る。

### 第一四 近藤勇墨染の遭難

芹澤鴨の死後近藤勇は新撰組の改造を企て新たに武藝の達人を募つて隊中に編入したが其中に伊東甲子太郎等が加つて居つた。

伊東は劍術の達人で深川に道場を開いたこともあり學問も相當に出来近藤も伊東の人物を認めて参謀の地位を與へ副隊長と同等の對遇をしたが元來が動王の志を抱ける人物として近藤が兎角幕府の利益のみを謀り會津侯の命令のみに従ふに反感を抱き近藤等が壬生より本願寺境内に移れる頃伊東は口實を設けて近藤の手許を離れ弟鈴木三樹三郎や篠原泰之進、加納鷲雄、服部武雄、藤堂平助等と共に山陵衛士となり東山高臺寺内月眞院に移て仕舞つた。

兼ねて伊東の眞意を察せる近藤は間者を放つて細大漏れなく其動靜を探索し伊東が勤王黨に味方して坂本龍馬や桐野利秋の許に出入し新撰組に不利の行爲あるを探り憤り伊東を欺し打にする爲め慶應三年十一月十八日相談があるとして伊東を其妾宅に呼び寄せた。

伊東が近藤の妾宅に往かんとするとき伊東の同志は「どうも危ないから」と頻りに留めたが伊東は



割合に氣に掛けず駕籠に乗つてやつて行つた。愈往つて見ると土方等も席に在り酒宴最中にて伊東に酒を勧め伊東も大に酔ひ相談は明日の話と午後十時頃近藤の妾宅を出て木津屋橋の邊りに來た。其頃其邊りは火災の跡で家もまばらであり焼跡に板圍がしてあつた。兼ねて近藤の命を受けて伊東の來るを待ち受けて居た刺客の一人大石鉄次郎其板圍ひの透間より大身の鎗を突出して伊東の肩先より喉をづぶりと刺した。伊東の馬丁で近藤に買収されて居た勝藏も刀を抜ひてものをも云はず後口より伊東の肩先に切り付けた。伊東は志津三郎兼氏の刀を抜ひて勝藏に切り付けた儘油小路に出で北に走つたが五六人の刺客彼方より馳せて來た。伊東は東側の法萃寺の門前迄來て石碑に腰打掛け「奸賊奴等が」と叫び乍ら絶息した。刺客は伊東の左足を切つて見たが伊東は最早死んで居て動かなかつた。そこで刺客等は伊東の屍を七條油小路下る四つ辻迄曳き摺つて來て捨て置き伊東一派に顔を知られて居ないものを選んで月眞院に走らせ「唯今伊東氏が菊桐の灯を持ち乍ら町内にて殺され巡邏のものが番をして居る。直くに死骸を御引取あれ」と知らせた。居合せた鈴木三樹三郎篠原泰之進、加納鵬雄、服部武雄、藤堂平助等大に驚き人足二人に駕籠を吊らせ岡本武兵衛其宰領となり、鈴木等七人々に付き添ひ油小路にやつて來た。あたりを見ると人の影もない故伊東の屍體の側に至り嘆き乍ら之を駕籠に入れんとする際新撰組の伏勢四五十人三方より一時に現はれ彼我入り亂れの大格闘が始まつた。此夜は月がさえ渡つて相手の顔も判然と判る位互に必死となつて戦つたが彼は衆、我は寡加ふるに彼は戰鬪の準備を整へ居るも我は素肌であり藤堂平助、服部武雄等は數ヶ所の痛手を負ふて其場に討死し篠原泰之進等は漸く一方の血路を開き伊東の屍骸を棄て、逃走した。近藤は其後も屍體を棄て、置ひて取りに來た所を討たんと俟つて居たが何日迄待つても篠原

等が出て來ぬ故致方なく遂に屍體を葬つて仕舞つた。

徳川慶喜が大政を返上し大阪に下りて謹慎の意を表するや伏見は京坂の關門に當れる要害の場所しつかりした人物を据えねばならぬとて近藤勇に其警備を申し付けた。近藤は一隊を卒ひて伏見に至り奉行邸を屯所として其所に陣取つて居つた。

十二月十八日永井玄蕃頭が所用の爲め近藤を伏見より二條城に招ひた。近藤は十數人の從者を連れ肥馬に騎つて二條城に赴き歸路墨染に差し蒐ると民家に潜んで居た篠原泰之進等が銃を以て後方より近藤を狙撃し飛丸近藤の肩の中に刀を抜くことも出來無くなつたが流石は近藤落馬もせず涌き出づる血潮を手で抑へ乍ら續ひて起る亂射の中を從者に疵はれて伏見に歸つた。歸營後調らべて見ると意外の重傷故大阪に下つて松本良順の治療を受け伏見鳥羽の戦には土方歳三が近藤に代つて新撰組の指揮官となつた。

#### 第一五 伏見鳥羽の戦

山内容堂が後藤象次郎等を上京させて大政返上を徳川慶喜に勧告するや慶喜は之に同意し其旨を朝廷に願出で朝廷も亦之を聽許した。慶喜、容堂や松平春嶽等は大政返上の結果徳川家は將軍職を失ふも諸侯の首坐として相當の優遇を蒙るものと思つて居た。乍ら岩倉、西郷、大久保の考は慶喜、容堂、春嶽と違つて居た。

「唯將軍職を辭した大政を返上したと云ふだけでは大政復古の名があつて實が伴はない、王政復古の實を舉げんとせば慶喜をして一切の官職を辭せしめ領土を返還せしめねばならぬ。若し辭官納地の命に激して暴發驟起せば兵力を以て之を打ち拂ふ迄である。朝廷の武威は天下に赫

き却て好都合となる斗りである」

と云ふのが前三者の出張であつた。此主張は維新大改革の政行上必要の主張であつたが幕府側から見ると穩に大政を返上せる慶喜に對して隨分無理無體の主張であつた。辭官納地を命ずることが小御所の會議で可決され其旨を慶喜に傳達すると幕府の旗本や會桑兩藩は頗る激昂した。幕府方の軍隊は大阪より大舉北上明治元年一月三日伏見鳥羽の戦が始まつた。幕府方の兵は薩長より多く最初は有利の模様であつたが後には不利となり次第次第に後方に退却し結局幕軍の大敗に終つた。大政返上の勸告に對しては近藤勇も左程反對でなつたが辭官納地の命令に對しては言ふ迄も無く憤慨した。されども墨染の負傷割合に重く出陣不可能の爲め土方歳三が近藤に代つて新撰組を指揮し戦に加はつた。新撰組は至る所奮戦苦闘し死傷も頗る多かつた。

敗戦となつて南下した幕軍は大阪に集まつた。大阪にて官軍と戦はんとする論者も相當多かつたが慶喜は之を納れず軍艦に搭乗して江戸に歸り近藤土方等も亦其跡を逐ふた。

後藤に次つて間もなく上京した山内容堂は慶喜に辭官納地を命せんとせる岩倉等の計畫を聞いて深く憤つた。小御所の會議に於ても岩倉等の意見に反對し伏見鳥羽の戦の際も土佐軍隊の官軍に加つて戦ふを許さなかつた。されども一月七日徳川慶喜追討の大號令の出で且つ此上徳川家を疵護せざる様岩倉具視より容堂に勸告するや容堂も心機一轉他の諸藩主と共に慶喜の征討に努むることとなつた。斯く容堂の心機一轉せることが土佐に知れ渡り土佐の藩聽も四國に於ける諸藩諸藩の追討に努むることとなつたのは板垣軍の高知出發後であり又高松松山兩藩追討の勅命を奉し錦旗を護して歸藩の途に就きし本山唯一郎、樋口眞吉等が板垣軍に會合したのも既に板垣軍が川の江より高松に

進める後であつた。

### 第一六 板垣退助の出陣

明治元年一月一日谷干城出兵督促の藩命を帯びて京都を發し六日高知に着し續りて谷兎毛急行歸國し土佐に於ても伏見鳥羽の戦况略ぼ明かとなつた。

朝幕開戦の報に接するや板垣退助は咄嗟蹶起し藩聽に至りて遮二無二出兵を迫り藩主も板垣小南に命じて隊伍を編成せしむることにした。佐幕派は平生敵視せる板垣小南が勝手に隊伍を編成せるを見て頗る不満であつたが幕軍大敗の報に接して狼狽の極に達し居り又京都より出兵督促の藩命もあり加ふるに佐幕派が強めて出兵に反對するときは武市系下士が一切に起て佐幕派と戦ふやも知れざる危険もあり之を沮止することが出来なかつた。

板垣小南の組織せる軍隊は迅衛隊と稱し郷士白札足輕庄屋地下浪人等各郡輕格の有志より成立せる半義勇軍にて討幕の陰謀に加はれる武市系志士(○印は武市血判狀署名者)

- |          |           |        |        |
|----------|-----------|--------|--------|
| ○大石彌太郎   | ○秋澤清吉     | ○安岡覺之助 | 安岡亮太郎  |
| ○桑津一兵衛   | ○池知退藏     | 大石俐右工門 | ○森新太郎  |
| 桑原介馬     | ○三原兎彌太    | ○森田金三郎 | ○島村壽太郎 |
| 田邊虎一郎(兄) | ○田邊豪次郎(弟) | ○島村外内  | ○上田補次  |
| ○西山志澄    | 桑原平八      | 中島與一郎  | ○岩崎馬之助 |
| ○島地正存    | 別役成義      | ○吉本平之助 | ○沖野平吉  |
| ○曾和慎八郎   | ○三宅謙四郎    | ○楠瀬六衛  | ○堀内賢之進 |

○五十嵐幾之助 今村長賀

等が奔走募集し其上に板垣系上士を隊長に据えたるものにて其數約六百人刀を負ふものもあれば伊賀袴に陣羽織を付けたるものもあり其裝束は種々様々であつた。之を卒ゆる總督軍監は

- |        |         |         |      |
|--------|---------|---------|------|
| 總督     | 深尾丹波    | 仕置役     | 森權次  |
| 大監察    | 小南五郎右工門 | 迅衝隊大隊司令 | 板垣退助 |
| 右半大隊司令 | 片岡健吉    | 左半大隊司令  | 土屋可成 |
| 小監察    | 谷兔毛     | 同上      | 谷干城  |
| 差使役    | 乾三四郎    | 第一小隊長   | 日比虎作 |
| 第二小隊長  | 野本平吉    | 第三小隊長   | 横田祐造 |
| 第四小隊長  | 谷重喜     | 第五小隊長   | 宮崎合助 |
| 第六小隊長  | 眞邊戒作    | 第七小隊長   | 平尾喜壽 |
| 第八小隊長  | 谷口傳八    |         |      |

當時眞邊戒作の如き年齢漸く十九に過ぎざるも上士の子弟なるが故隊長となり池知退藏の如き年齢三十八有數の劍客なるのみならず長岡郡勤王黨の重鎮として久しく其名を知られ上田楠次の如き年齢三十二久坂玄瑞等と書面を往復して國事を相談せし程の人物なりしも輕格の悲しさ徒軍監として其下に就くを免れなかつた。

谷干城は慶應三年五月西郷との會見後板垣に別れて京都に止まり其後も屢々西郷に遇つて土佐藩論の討幕に決せざるを嘆き同年十二月廿八日西郷より「戦ひは愈始まる故至急板垣に通知してくれ」

との傳言を受けて居た。谷が討幕陰謀組の一人たるを知らぬ後藤象次郎は京都の形勢愈切迫せる故出兵督促の爲め谷を歸國せしめ且つ「兵を送るに付ては板垣を總司令としてはならぬ。片岡健吉を總司令として兵を送る様藩聽に傳へてくれ」と谷に依頼した。片岡は資姓温厚篤實討幕陰謀連が脱藩を企てし際も「余は藩命に背きて脱藩討幕に加はることは出来ぬ」と言ひ出し山田平左門に「君子はあれだから困る」と罵られたものである。後藤とは少年時代よりの知り合ひにて後藤の思ふ儘になる故思ふ儘にならぬ板垣を排して思ふ儘になる片岡を引出さんとしたものである。藩聽も必らずしも板垣小南の討幕論を採用した譯ではないが在京の容堂より出兵の公命もあり上國の形勢容易ならざる故國老深尾丹波を總督として兎に角兵を京都に送ることに決定したものである。

伏見鳥羽の戦報の高知に達するや小南板垣は大石彌太郎を阿波讃岐に遣はして隣藩の形勢を探らせ秋澤清吉と南清兵衛を讃岐備前に遣はして其形勢を探らせ且つ軍隊通過の交渉に當らせた。秋澤が備前に行て見ると中國の講第諸藩は既に着々長州備前の兵に征服せられ土佐の立後れが痛切に感ぜらるゝ故南を備前に留め急遽讃岐に渡り先づ急使を板垣等の許に馳せて「馬立迄監察の急來を願ひ度い」と申送つた。秋澤が丸龜の町を歩みて居ると向より何か話し掛そをな顔付で近寄り來たる丸腰の一人がある。顔に見覺はあるが何人なるか更に思ひ出せぬ。不思議に思ふて近付みて見ると豈圖らんや大石彌太郎であつた。秋澤は中國筋の形勢を大石に話し共に土佐出兵の遅れたるを痛嘆した。軍隊は十三日布師田泊十四日本山泊十五日立川に着くと其夜秋澤の使が手紙を持つて板垣の許に到着した。之を見ると谷干城即座に立ち下横目一人を連れ夜を轍して土豫國境の峻嶺笹ヶ峰を越え十六日未明馬立に着ゐた。

秋澤は大石に別れ馬立の旅宿に赴くと翌朝早曉降雪を冒して谷干城がやつて来た。秋澤は干城に向ひて

六六

「天下の形勢は最早定まりました。中國筋の譜第各藩は長州備前等より兵を向け何れも既に降参せる故追々四國へも手を入れると存じます。斯くなりては土佐は朝廷に對して益々面目を失ふ次第依て直様松山高松等四國筋の譜第を打つが宜しむと存じます。ぐすぐずして居て機會を失つてはなりません」

と勸むると干城素より之に賛成であつた。兩人が色々相談して居ると其内に深尾總督板垣司令等皆到着した。其話をした総督等は容易に之に同意せぬ。遂に未決定の儘行進川の江に着いた。此軍隊の兵卒は何れも瑞山系の討幕論者であつたが指揮官の上士中には討幕密謀に加はれるものもあれば密謀無關係のものもあつた。土佐藩廳の命令は兵を卒いて京都に赴け夫れから後は萬事在京容堂の指圖を受けよと云ふ丈けであつた。高松征討に反對するものは「藩命を受けずに左様のことをしてはよくない」と云ふのであつた。板垣、谷、安亮、安覺、秋澤、森、池知、桑原等は「此際左様のことを云ふて居つて機會を失つてはならぬ」と云ふ意見であつた。川の江に着くと早打が京都より来て「松山、高松征討の朝命が土佐に下つた」との話があり勤王黨の面々勇み立つたが總督等は「早打と云ふても正使でない。正使が來ぬと討つことは出來ぬ」とて中々承知しない結局谷干城を高知に歸し高松征討の許可を受くることになつた。干城が高知に歸つて見ると小笠原唯八、島本仲道等努力の結果か藩廳は既に高松松山を討つに決し小笠原も島本も松山に向て出發することとなつて居た。

干城の歸高後川の江にては依然「命を俟つ可し」「俟たずに打て」の兩論對立し一月十八日に至るも尙ほ纏らなかつたが同日京都より海援隊の長岡謙吉、岡崎山三郎、同恭助が偶然來り會し此話を聞

57

「幕府方の諸藩も皆佐幕を止めて王事に勤めて居るのに土佐は三藩の一と稱せられ乍ら兎角進退曖昧朝廷の覺も薩長の評判も頗る悪い。此儘日を送るときは或は朝敵の名を負ふことになるかも知れぬ。朝敵の汚名を避けんと欲せば一刻も早く高松を討つて天下の疑ひを解かねばならぬ」

と脅したので反對論者も遂に屈服谷干城の歸着も俟たず無命令の儘遂に高松に向ふことに決定した瑞山系の兵卒は之を聞いて踊り上つて喜び乍ら行進した。

土佐出發の際は火急のこととて砲隊を設けず大砲は名々に持参させて居たが丸龜に着するや新に砲隊を組織し秋澤清吉、大石彌太郎、小島慥介等を其指揮官に任命した。

軍隊は丸龜多度津の兩藩を嚮導として海陸兩路より高松に進むと高松藩は一戦に及ばずして降服した。此時樋口眞吉等高松征討の錦旗を奉じて京都より來り會した。

#### 第一七 甲府の爭奪

徳川幕府の瓦解と共に甲州へも色々のものが乗込んで來た。西からは

一、質勅使の高松某

二、黒岩治部之助直方

三、板垣退助、河田景與の卒ゆる軍隊

六七

が乗り込んで来れば東からは

四、近藤勇、土方歳三の卒ゆる甲陽鎮撫隊

が乗込んで来た。

高松某は京都の公卿の次男にて素行頗る不良維新の騒動を幸ひ小澤某等にかつがれニセ勅使として甲府に乘込んだが間も無く發覺して京都に逐ひかへされて仕舞つた。黒岩直方は土佐の生れ武市系勤王黨の一人にて七卿西走當時土方久元清岡公張等と共に七卿を擁護して長州に赴き其後清岡等と共に九門の戦に加はつた。伏見鳥羽の戦争後脱藩の武市系志士は何れも功名に志し南部甕男は山道軍に従軍し土方久元は三條公に従て東下し石田英吉は長崎振遠隊を卒いて海路秋田に上陸したが黒岩も亦徒手空拳甲州鎮撫の大功を奏せんと志し大膽にも單身甲府に入て居つた。

近藤勇は墨染にて狙撃されたる肩の傷も漸く癒え日々江戸城に出仕して居つた。慶喜追討の大號令が發せられ東海、東山、北陸三道の官軍が錦旗を奉じて江戸に向ふや江戸城内は主戰恭順の二派に分れ近藤勇は主戰論者の一人であつた。近藤は甲州鎮撫に赴き度いと慶喜に願ひ出た。鎮撫と云ふは名斗りにて其實甲府を占領し新に兵を募り甲府勤番の佐幕派と合し進んでは山道の軍を木曾、諏訪方面に海道の軍を富士川附近に脅し退きては甲府に籠城の考であつた。夫を知つてか知らぬのか慶喜は勇の願を聞届け大砲二門軍用金五千兩小銃二百挺を近藤に渡してやつた。江戸城を出で、上野に蟄居し

君の爲め民の爲めとて今暫し忍が岡に墨染の袖

の和歌を詠して飽迄も恭順の意を表せる慶喜として誠に不可解の次第であるが兎に角許可を受けて行つたことは疑も無き事實である。

勇は副將土方歳三を始め沖田總司、長倉新八等を連れて三月一日江戸出發甲府に向つたが所謂運の盡きと云ふものか此危急存亡の秋に際して其進軍は頗る緩慢であつた。

幹部の大會議を開きて行くか行かぬか評定の際も將軍家の内諾を得て居ると稱して甲州百萬石を取つたら先づ自分が十萬石、土方が五萬石、沖田、長倉が三萬石、其他五千石一千石など、夢の様なことを云つて居つた。愈々出發するや大將の近藤は駕籠に乗り副將の土方は馬に乗り第一日は新宿に泊り酒宴を催し其後も近藤土方の郷里や縁故の多い土地を通ることと泊つては飲み、飲むでは泊り甲州に入るのが之が爲め遅るることとなつた。勇は大久保大和、大久保剛、近田勇平歳三は内藤隼人と詐稱し其兵數二百餘の少數に過ぎざるも八王子同心や甲府番士や茶葉隊等を合すれば數千人に達する豫定であつた。

其時甲府には城代佐藤駿河守を始め柴田監物、中山精一郎等の諸士が居たが府内の議論は官軍と戦はんとするものと城を開いて降服せんとするものゝ二派に分れて居つた。主戰論者は近藤の到着を今か今かと俟つて居つた。

翻て土佐軍隊の動靜如何と云ふに板垣退助の卒ゆる軍隊は高松降服後海路大阪を経て京都に上り伏見鳥羽の戦に加はれる山地元治、北村重頼、山田平左衛門、吉松秀枝、坂井重季の五隊を入れて合計十三隊とし深尾總督等は軍隊を去り名實共に板垣を總督とし板垣の理想通り改造せる軍隊を組織し東山道軍に従つて東進することとなつた。其顔振は東征記及び栗原亮一、宇田友猪兩氏の編纂し

片岡健吉氏の檢閲せる板垣退助君傳第一卷第一五八頁及び川崎紫山著戊辰戰史第四編第三四頁に載て居るが即ち左の通りである。唯此内に軍事役安岡覺之助の名を掲げて居ぬは遺憾の至りと云はざるを得ぬ。

役名	氏名	戦後の履歴
總督大隊司令	板垣 退助 伯 爵	大監察兼右 半大隊司令 片岡 健吉 自由黨名士
大 監 察	谷 干城 子 爵	左半大隊司令 土屋 可成 少 將
小 監 察	秋澤 清吉 明治十二年病死	砲 隊 長 北村 重頼 明治十一年病死
一番隊長	日比 虎作	二番隊長 小島 捨藏 明治三年横死
三番隊長	小笠原謙吉 明治元年戦死	四番隊長 谷 重喜 明治二十年病死
五番隊長	宮崎 合介 明治元年戦死	六番隊長 眞邊 戒作 明治十三年横死
七番隊長	山地 元治 子 爵	八番隊長 吉松 秀枝 明治十年戦死
九番隊長	山田平左衛門 自由黨名士	一〇番隊長 坂井 重季 男 爵
一番隊長	平尾 喜壽 實業家	一二番隊長 谷口 秀浪
輜重奉行	大石彌太郎	安塚戦の際失體を演じ歸國を命ぜらる
軍 事 役	同 上	安岡亮太郎 明治九年横死

此軍隊は板垣が總督となつて理想通り改造せるものにて中岡慎太郎の割腹抵當脱藩討幕軍の幹部は即ち此人々を指すものと見て大差ない。右の顔振れの中にて大石、秋澤、安岡丈々が先祖代々の輕格即ち武市系勤王黨にて他は何れも累代の上士である。尤も同じ上士とは云へ家柄のよき數百石取

りの馬廻りもあれば「やつとこ」上士とでも稱す可き華族で云へば子爵級男爵級の上士も交て居る板垣、片岡、北村、坂井は前者に屬し谷干城や山地吉松は後者に屬する。

維新當時に於ける土藩の出兵は此軍隊斗りでない。家老深尾三九郎を將として越後口に向へる軍隊もあれば秋澤清吉、谷干城が歸國して板垣の許に連れて來た後援隊等もある。され共夫れ等は慨ね其後藩命により出陣したものであつて最初の出兵即ち所謂割腹抵當志士討幕軍なるものは明治元年二月十四日京都を發して東山道に向へる前記顔振れの迅衝十三隊であつた。

東山道に向へる官軍は薩長土因の諸藩であつて美濃の大垣に會し軍議を開き方略を決することとなつた。同月十九日大垣本營にて山道軍の會議を開いたが之に列席せるものは總督岩倉具定、副總督岩倉具經及び薩の伊地知元治、長の祖式金八郎、土の板垣退助、谷干城、大石彌太郎、因の河田景與等であつた。

會議の結果

- 一、中山道を下り碓氷峠に向ふこと
- 一、大垣謝罪の爲め先鋒を乞ふにより之を許すこととなつた。

會議の終つて土佐の本營に歸るや大石彌太郎は谷干城に向つて

今日本營の會議にては唯一筋に山道を押して碓氷峠に向ふこととなつたが若し幕兵にして我に敵する意あらば甲斐に出で來り我側面を牽制せん。然れば諏訪より一手を分け先づ甲府を占領して置かねばならぬ。

と云ふと嘗て甲府に遊び其天嶮の地勢を諳らんぜる谷干城は直ちに之に賛成し板垣退助に向て甲府占領を勸め大石も亦直接板垣に向て屢々此説を主張した。板垣は遂に心動き斷然總督本營に参り岩倉具定に面し

甲州は徳川直轄にて旗本等勤番の士の之に居る者數百人萬一江戸よりも多人數入り込み兵を分て諏訪及び富士川に出さば官軍は海道も山道も後路斷絶輜重續かず釜中の魚となる。宜しく兵を分けて一部は甲府に向度し

と申出た結果因州土州の兵のみは高島藩を案内とし甲府八王子經由江戸に向ふこととなつた。

土因の軍隊が諏訪より甲府に向ふと云ふ噂が甲府に傳はると甲府番士中の佐幕主戰論者が慌て出した甲府へは既に黒岩が乗込んで居るが黒岩は兵隊を連れて居らぬ。黒岩一人ならばいざと云ふ時に短刀一本で始末が付く故棄て置ても差支ないが近藤勇の到着に先ちて數千の官兵に乗込れては最早如何共する事が出来ぬ。従て近藤の到着迄何とかして官軍の入府を阻止し度と云ふ考を生ずるに至つた。

黒岩は官軍と戦ふとか幕府の味方をするとか云ふ考は毛頭以て居なかつたが折角單身敵地に侵入して甲州鎮撫の大功を立てんとする際官軍に乗込れて其功を奪るゝを好なかつた。鹿を追ふ獵師は山を見ずとかや功名に熱中の餘り官軍に不利益となる事も自己の死地に陥らんとして居る事も黒岩の腦裏に映じなかつた。此黒岩の心情を看破せる甲州佐幕派は黒岩に向つて

「貴殿の鎮撫宜しきを得たる爲め今や甲城は無事に治まつて居る。夫れにも拘らず猥りに大軍を容るゝときは却て人心を激發し騒動を惹起し貴殿の今迄の努力は全然水泡に歸し甲城の士民

も亦如何なる災禍を蒙るやも計られぬ。何とかして官軍の入府を阻止することにし度いものである」

と相談した。結局目的は違て居り乍ら事實上兩者協同の動作を執ることとなつた、

三月一日土因の軍隊上諏訪に着き二日高島藩を嚮導とし土州因州高島各一小隊合計三小隊を前哨隊として甲府に向はしめた。土佐の隊長は日比虎作軍監は秋澤清吉であつた。二日の夜葛木に宿するや甲府代官中山精一郎の部下川上繁之助從者三名を連れて葛木にやつて來た。官軍の隊長は日比虎作等であつたが谷干城日記等にある通り萬事は土佐の秋澤清吉と因州の唯九十九の兩人が處斷した川上等は兩人に遇て

「黒岩治部之助の命を受けてやつて來た。甲州は既に鎮定して居るに拘らず官兵を甲州に入れると云ふは何故であるか。其上甲府江戸間は至て狹隘で大兵の通行す可き道路でない。嚮には高松某官軍の名を借りて甲府に來り士民を惱ました。今來たる所の者も亦高松同様官軍の名を僞はるものと思はれる。夫れならば治部之助甲府の兵を率いて之を討つことにする。」右治部之助の口上を傳言する」

「甲府は人氣の荒らい所だから卒爾に兵を入るゝときは如何様の騒動を生ずるかも知れぬ。暫らく進軍を控ゆるがよい」

と述べた。使者の口上も無禮千萬なれば果して黒岩の使者であるかないか夫れも判らない。或は官軍の甲府入りを遅延せしむる賊の策略かも知れない。秋澤と唯は從者三人を葛木に留め置き川上一人を軍後に從へ三日の朝雪を冒して葛木を發し葦崎に着いた。其夜斥候に出せし土佐の美正貫一郎

甲府より返り来り黒岩より官軍入城の不可を説諭されたる事並に甲府の形勢を述べた。夫れで川上繁之助が眞に黒岩の使なることが判り之を甲府に返してやつた。其夜中山の部下村松繁一郎来り次で黒岩治部之助来て秋澤等に遇つた。

黒岩は

「官軍甲府に向ふと云ふ噂を聞いたが事實と思はれず多分先般の高松郷同様のものが官軍の名を偽つて來たるものと思ひ其實否を糺し品によりては治部府兵を率いて之を討たんと決心し自ら往て其實否を探らんとせしも中山精一郎之を止むる故使者を遣はした。甲府は治部命を受けて入府既に能く鎮定した。總體に人氣の荒き所故卒爾官兵を入るゝときは如何なる騒動を生ずるやも計られぬ。且つ街道狹隘にして大兵を江戸に通ずることも六づかしい。甲府に兵を入るゝことは止めたがよ」

と述ぶると秋澤等之を駁して

「此度甲府受取の爲め我等前哨隊として先發した。とは云へ甲府が全く鎮定したものならば又其計ひもあるべけれど願ふに甲州の大なる足下一人にて鎮定出來たとは信じ得ない。柴田監物の如き人もあれば會津の人も入り込んで居る。官軍入府の時若し變起らば何を以て鎮定と云ふことが出来る。明曉必らず府城に入る故足下甲府の人に懇意なれば吾輩をして城代に應接せしめよ」

と斷然兵を進め四日雨を冒して葦崎を發し午後甲府に着し城代佐渡駿河守代官中山精一郎に交渉の上甲府城を受取て仕舞つた。受渡が終つて駿河守等官軍の下席に就いたが其時の駿河守等の顔と來

たら凄絶と云はんか槍絶と云はんか無念の思ひ面に現はれたとへ様のない程物凄がつた。

此時大久保剛(近藤勇)兵百七十を率いて猿橋より甲府に向ひ甲府の番士も之に内應の説ある故秋澤唯等相談の上兵を潜めて東行不意を狙て夜襲することとし美正貫一郎、武市熊吉等を東行せしめて之を探らしめ且つ別役成義を本陣に走らして後軍の急來を促した。柴田中山等は土佐の本陣にも使を遣して甲府入りの見合せを説いたものか此時安岡覺之助が本陣の命を受け跡より秋澤を追掛來り甲城未受取なれば暫時見合せよとの傳言があつたが談判後且つ事情紛々の際故其不可能を述べ安岡も之に同意共に夜襲のことなど協議した。

別役が本陣に着いて使の趣を傳ふると片岡健吉即夜二小隊を率いて葦崎を發し甲府に向ひ翌日土佐の全軍甲府に到着した。

近藤勇が四日駒飼に着くと官軍甲府に入つたと云ふ注進があつた。僅かに一日の違いで甲府を官軍に奪はれて了つた。

甲府争奪に關しては東征記及び之に據れる板垣退助君傳川崎紫山著戊辰戰史もあるが谷干城遺稿上卷七三頁に掲ぐる谷子日記の一部及び秋澤清吉日記を左に掲載す。

谷子日記の一部左の如し。

「黒岩治部之助と云ふ者は御國ものにて三條公に従ひ西府に行き居し者なり京師より條公の命を受け東海道の方より甲府等の探索をなし再び駿府に來り甲府の平穩なる事を大總督様に言上の處大總督様より甲府金米取調の儀命を蒙り又甲府に赴き代官初旗本等に渡合ひうまく鎮靜せしめたる積りの處へ大兵押込候故大に不平にて秋澤清吉に固く兵を止めん事を乞ふ清吉云我等



御總督の命を受け甲府城を請取り眞田に渡すの事を任せられたり私に兵を止むる事は不叶治部云大總督府より命ありて甲州へは猥りに兵隊の通行被差止有之且高松郷の暴動によりて士民等騒ぎ立ち居る處へ我來り鎮撫之漸く安堵に付けり旗本始武家共恭順にして決して異謀なし若兵隊繰入に相成る時は反つて激するも難計と云清吉云我は兵を以て此地の取調を命ぜられたれば決して止むる事は出來ず若し此により動搖致す者あらば兵を以て取押へ可申と斷然進行す治部甚不平之由斥兵己に甲府着と齊しく賊徒近藤勇姓名を大久保剛と稱へ江戸より兵二百餘を率い來る治部見を謬りたるを耻ちいつしか甲府を脱せり（彼全く中山精一郎等に欺れたる由也）我全軍己に韮崎驛に着の處へ斥兵に隨行せる遣役西山志澄（別役の誤なるは東征記に照して明かなり）甲府城より來り報ず賊徒多人數既に甲城に迫れり速に兵を繰入る可し斥兵は孤軍を以て賊を夜襲するの議決せりと云（秋澤清吉の議）時に因の全軍我軍に後る事一泊監軍西尾遠州に謀り人を因軍に馳せ此意を報ず我兵は即夜二小隊韮崎を發す片岡健吉之を管轄す蓋し孤軍賊を撃の策粗暴に失せん事を恐て也全軍は翌朝早發五つ頃甲府に着せり城は既に秋澤清吉城代佐藤駿河守に渡り合請取れり」

秋澤清吉の日記左の如し。

「三月朔日因土の二軍上諏訪に着陣す。

同二日半時高島藩に命ぜられ一小隊を以て嚮導たらしむ因及本藩（迅衝第一小隊々長日比虎作小監察秋澤清吉）各一小隊を出す合せて三小隊なり前哨職務に充て、甲府に差向けらる。

同夜蔦木驛に宿陣し因高と相議して三藩より斥候一名宛を出し（本藩は美正貫一郎を遣

はす）府城の形勢を探らしむ

夜中府城より使者來り（甲州代官中山清一郎手代川上繁之助並隨從の者三人）云今般黒岩治部之助の命を受け來れり此度官軍の甲府に向ふ實に其所以を解せず何となれば甲府は己に鎮定せり且街道甚だ狹隘にして衆兵通行し難し嚮者（空字一）某なる者官軍の名を借て甲府に入り大に士民を惱す今來る所の者も亦前日の如き暴激の徒官軍の名を偽り來るならん然るときは治部之助府兵を率いて之を討せん又云甲府は人氣最も荒し卒爾に兵隊入り込むときは如何の變動を生も計りかたし暫らく進軍を控可しと其言無禮實に甚しく且使者の眞偽を辨せず或は賊の術策にして我兵を府下に遲着せしめん爲めかと疑ひ因人唯九十九高人千野新左衛門及日比虎作秋澤清吉等相議して使者を軍後に從はしめ行軍中其情實を詰問せしなり（使者に隨從の者は執へて當驛へ預け置きしなり）

同三日朝雪夕雨蔦木を發し韮崎に宿陣す。此より先き高島藩に謀り屢々府城の動靜を探索せしむるに彼の番士等徳川氏を援けて歸順せず會兵をして日に三五人城下に容らしむるの説あり且柴田監物（甲府銃砲の長にして衆を壓せり細事は後日足田喜一郎の白狀に依りて明瞭なり）姦魁にして黨與を煽動するの聞へあり故に此夜三藩相議し明曉迅速甲府に入り彼が姦策の稔熟せざるに乘じ受城せん事を約す

同夜美正貫一郎府城より返り黒岩治部に説諭せらるゝの事（即ち官軍入府の不可を説諭せらる）並府下の形勢を縷述す

同夜川上繁之助眞に黒岩の使なることを聞き三藩相議して之を甲府に返す其謝禮として中山清

一郎の手代村松繁一郎來る

七八

同夜黒岩治部之助府城より來り百方我軍の甲府に入るを拒む其言云今般官軍府下に向ふの説有り治部聞て不信必ず前日の如き暴徒名を偽り來るならん其實否を糺し品により治部府兵を率て之を討んと決心し自ら往て其事實を探らんと欲すれど中山清一郎等自から往の不可を止めし故に先づ使者を差遣すの處拘留せらる然るに甲州は治部奉命して來り既に能く鎮定せり且人氣頗る荒く然るを今卒然官軍入府のときは如何の大變を生も計りがたし殊に街道狹隘にして衆兵の江府に通行することがたし冀くは兵隊の入府を止めよ清吉等抗辯して云今般府城受取の爲めこの兵前哨隊を以て先發せり雖然府城已に鎮定せば又其計らひもあるべけれど願ふに甲州の大なる今足下一人にて鎮定云ば未だ信ぜざるなり。既に柴田監物在り會人の入込あり且官軍入府のとき如何の變あらば何を以て鎮定と云可きや街道の廣狹軍兵の通不通は余が輩の知る所に非らず必ず明曉早發を以て府城に入らん足下府人を熟知せば吾輩をして城管に應接せしめよと治部遂に葦崎を去り甲府に返る

同四日雨夕晴曉發已牌府下の市街に着し三藩より城管佐藤駿河守及代官中山清一郎に應接して受城を議す(駿河守に應接せしめしは治部の周旋なり而して治部又受城の不可を陳じ且應接に連席せんと欲す清吉等治部に向ひ奉命の處を問ふ治部云三條公より甲州の探索を命ぜらると清吉云然らば吾輩は受城を命ぜらる各奉命の處異なり今足下の連席は不可なりと云ふこれより治部寢所に入り不告して潜に〇〇(二字不明)に走る)駿河守諾して退き後刻官軍入城の時機を告んと云

此日賊兵大久保剛者其兵凡百七十名を率て猿橋より甲府に向ひ又府城の番土内應せんとするの説あり於是三藩相議して夜に及で賊の來るを伺ひ兵を潜めて東行し其不意を襲撃せんと因人高人及本藩美正貫一郎武市熊吉を東に馳せ其事實を探らしむ

同日安岡覺之助本陣の命を受けて來り云受城未だなれば暫く控ゆ可しと然れども談判後且つ事情紛々の中に其義は不能なり而して相與に襲撃の策を議し且襲撃すれば城中の守兵に充るものなし故に別役柳馬を本陣に走らし速に後軍の續き來らん事を告ぐ

維時駿河守入城告ること甚だ遅し飛語あり府城防戦の用意せりと即ち三藩直に城の〇〇(二字不明)に到り入城す駿河守中山清一郎等人をして之を導き城中の什物悉皆之を受取る城外に倉あり米凡四萬俵計城中の庫には凡四千俵金庫は空虚なり

美正貫一郎石和より返り云賊兵大久保某甲府鎮撫を名とし陪道兼行今夜府城に達すべし即ち人馬の先觸の寫を以て之を示す於是彌襲撃のことに決す

此夕片岡健吉本陣より來り今夜襲撃のとき必ず先づ府城に入る可からざるの談判を遂げ不聞は速に之を討つ可きことを命す

同夜三小隊城外に巡邏すと云て夜に乘し兵を潜めて東行す三藩策を約し敵の來るを見れば速に兵を路側に伏せ之を横撃せんと即因人唯九十九及秋澤清吉等兵隊に先んじて斥候す栗原驛にて天明けたれども賊兵不來於是賊の動靜を聞けば今日勝頼の廟を拜して府に進軍すと即ち因人一人田夫の服に變し人足に紛れ敵中に入り之を探らしめ九十九清吉等は石和に返れば前哨三隊は既に甲府に引取り谷神兵衛一隊(即迅衝第四番)替りて同所に屯す清吉等も亦府に歸る

七九

此日武市熊吉直に賊地に入り賊兵を欺き勝沼を過ぎ道を左の山に取り石和より府に返る」

(附記) 維新史を讀む人は「誠忠の志を抱ひて國事に盡せる人は假令失策があつても其過失を咎めず又誤つて賊名を負ふた人でも事情憐れむ可き點があれば之を憐れんでやる。叙上の人々は決して永久に之を惡み之を笑ふてはならぬ」と云ふことを忘れてはならぬ。黒岩治部之助直方は元來誠忠の志士であり三條公西走の節は身を以て之を擁護し九門の戦ひの際には銃火を冒して鷹司邸に奮戦した。單身甲府に乗込んだのも亦王事に盡さんとする精神に外ならぬ。彼が土軍の甲府入りに反對したは失策に相違なきも功名に熱中の餘り思はず此失策を演じたるものにて其誠忠の心事に對し之を宥恕せねばならぬ。加之甲府爭奪以前及び以後に於ける其功績は此失策を償つて餘りある。甲府爭奪史を讀む人は能く此事を記憶し決して黒岩の一時の失策を嘲笑してはならぬ。

#### 第一八 勝沼の戦

明治元年三月四日近藤勇の率ゆる所謂甲陽鎮撫隊が甲斐の駒飼に着いた。近藤は一日の違ひで官軍に甲府を取られたと聞き足摺をして悔しがつたが最早後の祭である。致し方が無から此附近で官軍を迎撃し切めても體憤を晴さんと味方の軍隊を點檢すると何時の間にか數十名の脱走があつて僅に百二三十名に過ぎなかつた。尤も會津の志士が谷村附近に居て近藤の到着を待合せて甲府に入る手筈になつて居るがこれとても左程人數が多くなかつた。流石の近藤も閉口して「會津の侍が三百人援兵として猿橋に來て居る。明朝着く筈だ」と宣傳して味方の志氣の鼓舞すると同時に土方歳三を神奈川方面に急行させ茶葉隊を迎へさせることにした。

此茶葉隊と云ふは神奈川方面を固めて居た旗本の一隊で揃ひの青羽織を着て居たから茶葉隊と云ふ名が付ひて居た。茶葉隊は初めより近藤と通謀し後援隊として甲府に入る手筈になつて居たが官軍に甲府を奪はれ火急の加勢を要する故罷々土方を迎へにやることにした。新宿を起點とせる甲州街道は八王寺の西數里の所迄平坦、之より山路に差し掛り秩父山脈を越え甲州都留郡に入ても尙ほ山斗りである。道路は溪流に沿ひ山の間を縫ふて西に向つて居る。山の全く盡きて甲州の平野に出た所が即ち勝沼の町である。近藤は此勝沼の驛東に於て山を背にして官軍を迎撃せんとしたものである。

近藤は土地の者を案内に立て、近傍の地形を視察し勝沼驛に關門を据え土地の壯丁を狩出し薪を徴發して山の中腹やら街道筋に積上げ火を放ち篝火として虚勢を張り隊を二に分ち一隊は勝沼東南の岩崎山の山腹により近藤の率ゆる本隊は柏尾山の東神願澤を前に控えて陣を取り大砲二門を据えて官軍の來るを待つて居た。

甲府に入れる秋澤清吉唯九十九等は近藤の卒ゆる所謂「鎮撫隊」を迎撃する爲め石和附近迄進出したが敵の影も見えざる故一先づ甲府に歸つて休息し續ひて甲府に入れる因の三隊高島の一隊土佐の三隊が之に代つて東方に行進した。土佐の總指揮官は片岡健吉、谷干城、隊長は小笠原謙吉、谷重喜外に北村重頼が砲隊を卒ひて居た。因州の河田景與も谷干城と共に勝沼附近迄進んで居たが甲府に居る板垣退助等と打合せの爲め甲府に歸つて戰場に居なかつた。甲府の番士が内より蹶起する虞があつたのと武市熊吉等の偵察によりて近藤の兵の少ないことが判つて居た爲め官軍の大部隊は甲府に留まり勝沼に進んだのは總數の三分の一にも足なかつた。

近藤は人を頼んで「幕府の鎮撫隊長大久保剛で御座るが官將に遇て直談致度き儀が御座る」と官軍に申入れたが相手にされなかつた。

三月六日官軍と幕軍と勝沼驛の東方に戦つた。官軍は軍を三手に分ち北村重頼の砲隊と因の一隊は甲州街道の本道に向ひ小笠原謙吉及び因二隊高島一隊は甲州街道の南の川を渡り山を攀ぢ上りて岩崎山腹にある幕軍に向ひ谷重喜の隊は街道の北の初鹿野山の道路もなき嶮所を遮二無二突進し漸く山頂に出で茂林の中より幕軍の側面を脅した。片岡健吉は河南に向へる軍に付き添ひ谷干城も最初此手に付添ふて居たが本道の戦ひ餘りに激しき故川を渡りて本道に引返した。

幕軍も必死となつて防戦し戦ひは中々劇しかつた。川の南に向つた小笠原謙吉が岩崎山を攀ぢ上ると山頂にて六七人の兵に遇つた。其距離僅に七八間謙吉に向つて「誰か」と問ふ故「土佐」と答ふると一齋に謙吉を射撃した。謙吉は抜刀にて敵の中に切て入ると敵は其勇氣に怖れて逃げ出したが敵の一人は逃ぐるものを叱り乍ら刀を抜りて謙吉に切て掛つた。双方必死となつて切結ぶ際晩年刀劍鑑定の名家と云はれたる今村長賀がはせ來り謙吉を助けて敵の背後より斬て掛り遂に之を斃した跡で調べて見ると謙吉の陣笠には二ヶ所の刀痕があり今村は手の甲を切られ敵の刀は鏝の近くに凌ぎを削つた刀痕が數知れず付いて居つた。官軍も相當苦戦であつたが午後に至りて幕軍の敗北と決した。

近藤は二門の大砲を持つて居たが砲手が不馴の爲めものゝ役に立なかつた。之に反し土佐の北村重頼は幕軍の散在せるときは砲を發せず密集せるときは猛射を浴せ掛ける爲め幕軍は數多の死傷を生じ少からず狼狽した。

街道の本陣に居た近藤は自ら先頭に立ちて因州勢の陣中に突入し今日を最期と奮戦し因州勢も崩れ立ちて將さに敗走せんとする模様であつたが其時谷重喜が道路もなき山腹を潜り幕軍の横合を襲ひ河南の官軍も幕軍の横合に打つて掛り加ふるに北村重頼が猛烈に幕軍を砲撃せる爲め幕軍は遂に敗走の餘儀なきに至つた。

官軍は幕軍を追撃して勝沼より約一里半を隔る鶴瀬の驛に至り幕軍の使用せし砲は官軍に捕虜されて仕舞つた。

近藤は齒がみをして憤り敵陣に突入打死の覺悟であつたが會津の浪士大崎莊助が之を留めて「某一入殿りとなり官軍を支ふる故一先づ此所を立ち去られよ」と殿戦を希望して止まざる故近藤も其意に任せ殿りで大崎に頼んで東方に退却した。大崎は薪に火を付け烟の下より切て出て手當り次第に切り捲り一旦山中に逃げ入つたが翌朝近在の代官の家にて田邊豪次郎等の爲めに捕へられた。

秋澤清吉、別府彦九郎、大崎を訊問したが、未だ二十前後の青年乍ら中々剛膽の男にて「我は幕府あるを知て天朝あるを知らぬ。命は欲くない。早く斬て了へ」と傲然言放つて如何しても屈服せぬ。秋澤別府は板垣總督にも相談したが致方無き故之を斬ることにした。愈刑場に臨むや大崎は草履を脱ぎ捕へ従容として刃を受けた。其態度の天晴なる陣中の評判となり當時東京にて發刊の新聞に迄掲げられた。「板垣退助君傳」に大崎處刑の様子が詳しく書いてある故左に之を抄出する。

「營前に斷頭臺を設け以て壯助を牽かしむ、一軍の士之を覩んと欲し、來り集る者堵の如し、少焉にして一兵卒壯助を引て出づ、壯助徐々に歩を移し、四邊を環視して君（板垣）が前に至り、急に君を見て低頭膜拜すること數次、従容として斷頭臺に臨む君乃ち衆を顧みて曰く、誰

か能く彼を斬ると、一軍相視て逡巡、背て應ずる者なし、中屋修治身の丈六尺、常に好で三尺の長刀を佩ぶ出で、曰く、小生京師四條に於て會士と闘ひ、其二人を斃す請ふ之を加へて數を三に満たしむ、可ならんかと、霜刃手に在り意氣山の如し。進で壇に薄る既にして一軍の士、堂々として四面に威立せるを視て氣少しく阻む、君其過たんことを恐れ、中屋に向ひ謂て曰く、中屋君中屋君あんまり刀が長いじゃないかと、一軍哄笑す、中屋氣を得て壇に上り乃ち刀を揮て壯助を斬る。首は皮を留めて體の前方に垂れ、落ちんとして而して落ちず、中屋再び刀を翻し其髻を把て其皮を斷ち更に首を壇上に置く、而して壯助目をカツすること再四、首忽にして旋回す、生色少しも減せず。一軍皆奇と稱し、盡く驚異せざるなし」

勝沼戦後甲府にては柴田監物等を捕へて賊との通謀を訊問したが剛復にして中々實を吐かなかつた嚴敷訊問すると其一人が

「近藤等の到着を俟て甲府城に立籠り笛吹川を前にして官軍と戦ふ考であつたと白狀した。」

茶葉隊は遂に戦の間に合はなかつた。勝沼の戦に加はりし幕軍は近藤が江戸より連れ來りし人々と甲斐の東部に居て之に加つた人のみであつた。

過勝沼

安岡亮太郎

王師恰似惠風過 除舊敷新物々和

昨日前軍殲賊處

岸頭春暖樂耕歌

第一九 近藤勇の最期

勝沼の敗軍後新撰組の中には今一度引返して官軍と戦はんと云ふ人もあつたが其議行はれず結局隊

伍を解散して思ひ思ひに江戸に歸つて行つた。此敗戦後近藤の威望漸く衰へ銘々思ひ々々の行動を執る様になつた。

近藤と土方は江戸を脱走し流山邊に屯集して居る幕臣を糾合して再び旗を擧げんと企て江戸より流山に赴き近藤は矢張り大久保大和の名を詐稱し脱兵鎮撫の爲めに來れりと言ひ振し百有餘名の人數を集つるに至つた。

土州の軍隊は近藤等の跡を逐ひ甲武國境を越え八王子より日野に出て、多少近藤の餘黨を訊問したがさしたる罪科も無き故間も無く釋放し江戸に入つた。

東山道軍の先鋒は江戸の西北に陣し東海道軍の先鋒は西南を固め江戸は東北方面が開けて居る斗りであるから脱兵は皆此方面から脱走した。三方より押寄せた官軍はちりちりと江戸近在に彌蔓し近藤は流山の小天地に孤島の如き姿となつて居た。總督府付きの祖式金八郎香川敬三等は脱兵の逮捕解散に努めて居たが流山にも屯集の團體ありと聞き追捕の兵を差向けた。當時總督府付きとなつて居た上田楠次も之に加つた。

上田等が近藤に遇つて兵を集めて屯集せる理由を詰り武器の差出を命ずると別に抵抗もせず尋常に差出した。更に「最早怪しむ可き點も無いが兎に角隊長丈けは一應本陣迄同道して貰ひ度い」と云ふと近藤は少しも躊躇せず上田に護られ途中上田と雑談をし乍ら總督府にやつて來た。其所へ伊東甲子太郎、篠原泰之進の一味たりし加納鷲雄が現はれて「やあ近藤君」と聲を掛けると流石の近藤も顔の色が變て仕舞つた。官軍は大久保大和と稱するものが其實近藤勇なることを推測し加納に首實驗をさす爲め本陣に同道を求めたが比較的正直な近藤は斯る事と夢にも知らずうかうか本陣にや

つて来て見事捕虜となつて仕舞つた。近藤の實名が発覺して捕縛されたと聞くと土方は直ぐに流山を逃げて仕舞つた。

近藤の訊問には薩摩も土佐も因州も立ち會ひ土佐からは谷干城と安岡亮太郎が出席した。應接所の椽に筵を布き其上に坐せしめ總督府の軍監が訊問した。近藤は何とかして此場を逃れ去り再擧を計らんと考へて居た。

「流山に出たのは臣子の分を盡す爲めである」

「然らば兵を募り官軍に抗する考か」

「全く以て左様に非らず今慶喜の心を察するにさぞ心外ならん。此上慶喜の御所置によりて臣子の分を盡さんと欲するのみだ」

「然らば兵を以て官軍に抗するのでなくて何か」

嚴敷訊問したが矢張り臣子の分を盡さんとするのみで官軍に抗するとは違ふと同じ事を繰り返すに過ぎなかつた。軍監は問を轉じて

「流山に出たは勝安房の命でないか」

「決して左様ではない」

此時薩の平田九十郎は勝に關する訊問を止めさゝんとして

「萬一の場合臣子の分を盡すと云へば夫れで事が判つて了つた。最早別に訊問に及ぶまい」と云ひ出した。谷安岡は之に反對して

「近藤一人の話さへ聞けば宜い譯でない。如此巨魁故勝初め幕臣の計畫も知て居るに相違ない

強く訊問して白状せば禍を未發に防ぎ得る。是非共未發の計畫を云さねばならぬ」

と主張したが平田堅く反對し安岡と平田と大激論をやつた。平田は

「勝等の事迄訊問せば海道の穩な取扱の主意にも戻り却て事の敗れにもなる。且つ近藤も賤しきものに非らず數十人の隊長をも勤めし程のものなれば拷問などは宜しくないと思ふ」

と主張し谷と安岡は

「近藤は始より爵位のある人でない。唯徳川の爲浮浪の徒を集め暴威を張れるに過ぎない。殊に今は脱走の身の上一何故あつて拷問を控へねばならぬか」

と之を反駁した。軍監は問を轉じて

「甲州に出たは何故か」

「大久保一翁の命を受けて参つた。甲州は人氣の惡き處官軍通行の砌り間違があつてはならぬ故鎮撫の爲め出張した」

「然らば何故勝沼にて官軍と戦つたか」

「其儀誠に申譯がない。最初江戸發足の節は毛頭其考がなかつたが途中にて會津脱藩のもの段々加はり追々暴論を唱へ官軍と戦はんと主張し私に對して強迫がましき振舞に迄出づる故此儘甲府に参りては如何様の事變生ずるやも難計と存じ伺ひの爲め三月五日江戸表に歸れる處其跡にて近田勇平（近田勇平は勇自身の假名なり）と云ふ者官軍に抵抗したる段私として不取締の罪難免恐入つたる次第」

と官軍を馬鹿にした様な全くの出鱈目を云つた。谷等は近藤に向つて

「汝の云ふことは皆嘘だ。我等甲州にて汝等と約束せし柴田監物等を召捕り汝の策略は我知して居る。明白に云へ」

「柴田は江戸より歸り掛とて鶴瀬の驛にて初めて面會別に込入つた話もなくて、別れた迄である」

夕刻に近づける爲め其日の訊問を中止せるが其後薩の反對により拷問も止め四月二十五日遂に板橋の刑場にて斬首することとなつた。土佐側の態度の強かつたのは勝沼の戦等の爲めのみでなく這奴確に坂本中岡の刺客と睨んで居たのも其一原因であつた。

近藤處刑の噂傳はるや夥しき見物が集つたが所謂蟲の知らせか郷里に残した一女の婿にて勇の兄の子たる勇五郎も偶然其内に加つて居つた。

近藤は係り役人に願て床屋を呼び鬚を剃らせ従客として刑に就いた時に歳三十五首級は鹽漬として京都に送り四條河原に梟首し遺骸は板橋に葬り後郷里龍源寺に改葬した。

近藤勇を總督府本營に送り届けたる上田楠次は祖式金八郎等の跡を追ひ四月十七日祖式と共に結城附近に居た。當時大鳥圭介秋月登之助土方歳三等の率ゆる幕府の脱兵は路を分つて下總の市川より宇都宮に向ひ(第二二を見よ)其一部は同日小山街道より結城に向て進撃した。

小山結城間の街道は概ね平坦其大部分は田畑又は雜木林にて山や丘は殆ど無きも丁度麥の成熟季にて麥莖三尺内外に達し敵味方の馳驅に都合であつた。幕府の脱兵と祖式等に屬する附近諸小藩の兵は此麥圃の間等にて衝突した。敵は脱兵と稱するものゝ洋式の訓練を受けたる精兵にて何れも新式元込銃を携へ居り味方には陣羽織袴や鎖帷子に身を固め士分以上は手槍を持ち士分以下は火繩

筒を携へ陣貝陣大鼓で進退する藩もあつた。祖式は此舊式の陣備へに驚き呆れ勝敗如何を危んで居たが案の條敗軍となつた。上田楠次は此日流丸に中つて負傷した。敗軍となつた祖式等は同夜八時頃結城を退却し鬼怒川西岸の久保田村に向ひ久保田村にて村吏を呼出し船の用意を命ぜし祖式等の敗軍を傳聞せる村吏等は後難を恐れ口實を設けて之に應じない。己む無く鬼怒川に沿ひ約二里下流の山川村に辿り着き此所にて船の用意を村吏に命じたが矢張り應じない。夜は次第次第に更け亘り落人の悲哀を染々と身に感じ乍ら更に三里下流の高崎村には船筏が多いと云ふ里人の言葉は僅かに頼りとして傷の痛みを忍び疲れ果てたる足を曳摺て十八日早曉漸く高崎村に着いたが昨朝以來終日終夜戰場に奔走食事もせねば眠にも就かざる上田等は最早疲勞し切つて居つた。高崎村に入ると村吏の家や民家を叩き起し船筏の徴發を命ずると同時に民家に入りて食を求むるものもあれば眠を食るものもあり又負傷に惱める身を横たへるものもあつた。船の準備が整ふと皆争て繫船場に集まり隊別も順序もなく先を争て乗船せんと揉ひ合ひ押合ひ混雜甚しき故祖式等は之を制し負傷者を先つ乗船さすことにした。一隻は既に満員となつて鬼怒川の中流に漕ぎ出し數隻は將に岸を離れんとする際突然川向ひの籤蔭より中流に漕ぎ出たる船や川端に立てる集團に向つて銃丸を打出しときの聲をどつと揚げた。此不意打に遇つた祖式一行の狼狽たとふるに物なく殊に中流に漕ぎ出せる第一船は銃撃の焦點となつて悲惨の状を極めた。武市血判狀第十二番目の署名者にして流山に近藤勇を捕へたる上田楠次は此時飛丸に中つて戦死した。籤蔭から銃撃した敵は脱兵であるとも云へば下館藩兵であるとも云はるゝ。

## 第二〇 吉井行二の敵討

維新當時土佐に關係を有せる敵討が四組ある。

第一は文久三年廣井磬之助の敵討である。廣井磬之助の敵討は磬之助の父が釣の歸り路泥酔の棚橋三郎に喧嘩を吹き掛けられ水中に落ちて死亡し磬之助は乞食同様の姿となつて三郎を探し廻り勝海舟坂本龍馬の援助を得て之を討つたものである。

第二は明治三年住谷兄弟の敵討である。住谷兄弟の敵討は水戸の志士住谷寅之介が慶應三年六月京都松原通りで暗殺され其子七之介と忠次郎が種々探穿の結果土佐潮江の山本旗郎を下手人と突止め東京神田筋違で之を討つたものである。

第三は明治六年萩原兄弟の敵討である。土佐一宮村の萩原源八夫妻が行き暮れて宿を乞へる三人の男に殺され殺せる男の二人は源八の二子源一兼猪に捕へられ源一と兼猪は其一人を打殺し一人を官に差出し残れる一人の男は官の手に捕へられ二人共に絞罪に處せられ源一兼猪は發狂の名義で無罪放免となつたものである。

第四は明治元年吉井行二の敵討である。行二幼名は四郎土佐郡初月村久萬の父を顯藏と云つた。顯藏舊名は茂市、多田三五郎の弟多田哲馬及び秋澤清吉の妻久枝の兄にて瑞山血判狀第十九番目の署名者である。顯藏は明治元年正月藩命を以て山内家の親戚幕府の旗本松下嘉兵衛の附き人となり爾來松下家の領地たる伊豆牧の郷や京都や江戸を往來し王事に努力して居つた。

同年四月江戸脱走の遊撃隊長伊庭八郎、人見勝太郎等上總請西藩主林昌之助と共に海路相州眞鶴港に着し直ちに小田原に至り譜代恩顧の情誼に訴へて徳川復興の盟主たらんことを小田原藩主大久保家に説いたが小田原藩論の容易に決定せざる爲め熱海、韭山、三島、佐野を経て御殿場に至り進ん

で甲府に入らんとせしも途中にて方向を變へ沼津に至り更に函嶺に進撃して來た。此時因州の中井範五郎、佐土原の三雲爲一郎豆相軍監として江戸より小田原に出張し顯藏及び松下家の家來等も亦此行に加はつて居た。

小田原藩は五月十九日夕刻より藩士一同を城内に召集して官幕何れに左祖するかを徹宵評議し遊撃隊の伊庭八郎も同夜竊に小田原に來て色々運動したが藩論は容易に決定しなかつた。二十日早曉に至りて漸く遊撃隊と戦ふことに決定し藩兵數十人函嶺に向ひ賽の河原に進んだ。此時小田原藩は竊に遊撃隊と妥協互に空砲を放つ約束となつて居たとも云ふが兎に角官軍の軍監等が頻りに遊撃隊討伐を強要せし爲め餘儀なく實弾を發射し遊撃隊も亦之に應戦した。

二十日午後に至りて小田原藩の態度俄然一變官軍と戦ふこととなり午後七時頃函嶺出陣の藩兵に對して松下家臣討伐の命令を下した。其結果顯藏等の泊つて居る權現坂の營舎は同夜半四方より銃撃され數多の死傷を生じた。此時顯藏は銃創を蒙り従者村上庄司と共に營舎を逃れ二十一(二?)日早曉迄絶食の儘山中に潜伏し同未明權現坂を下り湯本にて駕籠を雇ひ小田原に赴き今の光圓寺の向側なる上方口板橋見付にて見張の侍山田龍兵衛小泉彦藏の兩入に殺され村上は捕縛された。

顯藏が板橋見付にて殺されたる光景に關して参照す可き文書が三つある。  
第一は村上庄司の復命書である。其要旨は左の通りである。

(前略)二十一日未明權現坂を出で顯藏と共に小田原に向つたが途中關所がある故「印鑑はないが小田原城軍監(三雲が小田原に居た)の許に參る大村藩山田周藏と申す官軍に相違ない」と云ふた所「たとひ官軍であつても印鑑がなくては通行を許さぬ」と云ふ故種々かけ合つたが飽



迄不法の返答をし顯藏は殺され自分は獄に下された。察するに小田原は賊に味方し云々。

第二は板橋見付番士の始末書である。其要旨は左の通りである。

二十二日朝六時過ぎ大村藩山田周藏と云ふもの上下二人にて見付に来て「通り度い」と申出たが主人はかごにて桐油をかけ居り面體も分らぬ故「かごより出よ」と云ふたが出て来ない。再三云ふと「支度をして出る」と云ふてをいて見付外に引返す故次の番人が出て改めた處容子が怪い故呼び戻すとかごに乗つたまゝ返つて来た。「藩の印又は官軍の印又は參謀方の印をもつて居るか」と問ふと「權現坂にわすれて參つた」と答へた。夫れから色々きゐて居ると實は土洲藩と言直し愈あやしき故捕縛せんかと思つたが苛酷のことをして藩の不利となつてはよくない故一同相談の上家老に取扱方を伺ふ爲め保田收藏を差出した。其留守中見付のえん側に再三上り通行を催促する故「伺中故差控えよ」と云付けたが待兼ねたものか顔色を變じ山田龍兵衛の坐席の脇にある刀を奪取る爲め栗形の所に手をかくる故龍兵衛は柄をさへて渡さず其内一同立かゝつた所手に餘る故致方なく小泉彦藏山田龍兵衛兩人にて打果した云々。

上方御見付伴頭小野司、同番士保田收藏、福田瀧之丞、山田龍兵衛、小泉彦藏、永岡武之助、宇野泉五郎。

第三は慶應戊辰小田原戦役史である。大正六年小田原にて官幕殉難者五十年祭を行ひ翌年前掲書名の非賣品小冊子を發行した。其編纂者は村岡尙功君なるも材料殊に吉井横死に關する材料の蒐集者は吉井を殺せる山田龍兵衛の嗣子山田克復君である。此書籍に其時此見付に居た下士の一人當時十五歳の早川莊次郎君の目撃談が載つて居る。其要旨は左の通りである。

小田原藩は廿日より小田原の入口に見張りを置くことにした。今の光圓寺の向側なる上方口板橋見付には侍四人足輕四人（伊藤包衛、長谷川小兵衛、尾關德藏、早川莊次郎の四人）警備の任に當り侍の筆頭山田龍兵衛は右手の正面に控へ左手に小泉彦藏が控へ残り二人の侍は鐵砲で見付を楯に前後の見張りをして居ると二十一日午前十時頃一人の從者を連れた一挺の早駕籠がやつて来た。早速法に従つて調べると疑はしい點があるので尙ほ調べを續けて居ると駕籠の主は其隙を見て山田が側に置いてあつた刀の柄に手をかけて大刀を奪はんとした。之を見た足輕の一人長谷川小兵衛が六尺棒を以て駕籠の主の腦天を打つと同時に小泉が右の肩先より切り付け續いて山田が首を刎ねて仕舞つた。從者も斬らんとしたが全くの田舎者で詰らぬ人間故斬らずに縛つて仕舞つた。其時の駕籠昇の周章と來たら抱腹絶倒滑稽の至り溝の中に入つてがたがた慄へて居つた。其内に伊庭八郎の一隊が首を七八つ提げ板橋方面から葵の旗を押し立てゝ乗込んで來ると云ふ知らせがあつた故今見付が汚れて居るから待つて貰ひ度いと斷つて置き大急ぎで荒久に居た番太に死骸の始末を付けさせ伊庭の一隊を迎へ入れた。

刀が一本かごの屋根にしつかり結び付けてあつたが其刀は詰らぬ刀で顯藏の刀と思はれない。衣類も借着の様に思はれた云々。

右三文書を對照するに符合せる點もあれば符合しない點もある。第一第二によると大村藩山田周藏と名乗つた模様であるが何故に本名を名乗なかつたか不明である。

小田原藩脱兵に與したとの報傳はるや問罪使と問罪の兵は直ちに小田原に向つて出發し江戸に居た重臣は馳せ歸つて其不可を論じ其結果小田原藩は幾干日を経ずして再び官軍の味方となり佐幕論を

唱へたる重臣二名切腹其罪を謝し山田、小泉の兩人も吉井殺しの下手人として明治元年九月二十七日江戸鈴ヶ森にて斬首された。

九四

顯藏に行二行三（宇賀行三）の二子があつた。顯藏横死の報土佐に傳はり且つ其死が戦死に非らずして人手に掛れることの明かとなるや當時十三歳の行二は父の敵を打たんとして伯父多田三五郎病中の叔父多田哲馬付添の上江戸に赴き敵打を願出たが敵打は許されず其代はりに斬首の時のきり手となることを許可してくれた。先づ山田を斬つたが未だ少年のこと故首は容易に落ちなかつた。回を重ねて漸く之を斬り落し續いて小泉を斬らんとすると小泉は之を見て

「坊さん上手に切つて下さう」

と戯談を云つた。刑場の周圍には見物が山の如く集り遙か遠方の木の上に迄登つて見て居つた。敵討が終ると行二等は漚船に乗じて歸西した。

行二は過渡期に生まれ正式の教育を受けなかつた爲め世に著れなかつたが人物は中々しつかりして居つた兎角身分不相應の生活をしたり見榮を張つたりするは日本人通有の惡癖であるが行二は夫れをやらなかつた。毅然として其信する所を守り入を量つて出を制し産を全ふして安穩に世を終へた行二の妻は土佐都一宮村淡中新作の娘である。新作亦維新當時の一人物其傳記は大日本人名辭書に左の通り載つて居る。

嘉永年間京師に來り春日潜庵の門に遊び外塾大徳寺中の見姓庵に寓せり夙に有爲の志を抱き慶應年間其藩の周旋方となり京師に來り後藤象次郎板垣退助等と共に諸藩の間に周旋す維新の際大和鎮撫總督府の監察となる其師潜庵の推舉する所なり其後職を辭し去て東京に至り諸官に歴

任す其後故山に歸り閑雲野鶴飄然世外の人の如し云々

「閑雲野鶴飄然世外の人の如し」とは實に淡中新作のことである。或日の夕刻一宮村の某が高知に赴く途中比島橋に差掛ると幽靈とも違へば大入道とも違ふ上部は非常に大きく其下から足二本ぬつと出た一種異様の怪物が高知方面より此方に向つて進んで來るのに遇つた。夕方とは云へ未だ日のある内のこと殊に人通りもある故不審に思ひ乍らも勇を鼓して近いて見ると知り合ひの淡中新作が高知市にて購へる鶏伏せ籠を頭から「スツポ」と被り兩手をふところに入れて悠々自宅に歸る途中であつた。

## 第二一 山内容堂の赫怒

封建時代の大名と云へば床の間の様な一段高い所に五ツ紋の羽織を着て端然と坐り其後には佩刀を持つた御小姓が控へ前の低い所には數多の家來が左右に居並び中央には麻上下を付けた御家老様が「トンボ」の止つた様な恰好をした頭を疊に付けて

「我君様には御機嫌美はしく恐悦至極に存じ奉る」と云ふと殿様も

「そちも健固で重疊々々」

「はは——」

など云ふ光景を聯想する。實質に於ては殿様の御意通りにならぬ場合が多いとしても形式に於ては殿様は殿様の威嚴を保ち家來は家來の禮儀を守り殿様は大奥の女中に戯むるゝ場合とか近習相手の酒宴の座でない限り何處迄も殿様然たる體度を崩さず家來はなる可く殿の御機嫌を損はぬ様失禮

にならぬ様周到の注意を拂ふたものと通常想像する。所が實際は斯様に單調な斯様に窮屈なものではなく、殿様の内にもいたづらな殿様があれば、家來の内にも無作法無遠慮極まる家來があつた。

「耐だ、耐だ、耐侍」と、今迄聞いたことも無い悪口を云はれて、赫とのぼせた淺野内匠頭、われを忘れて刀の鞘を拂つた斗りに、赤穂五萬石の御家は潰れて講釋師や浪花節語りの米櫃が出来た。之を見た或藩の家老が内の殿様に此眞似をやられては大變と、俄かに心學の大家を招いて心學の家庭教授をさせることにした。或日其教師が何時もの通り殿様の前に出て頭を疊に付けて禮をする。桶を抱えて忍び寄つたる二人の近習、心學の教師の頭の上から水を「サブリ」と浴せた冬の眞中に全身「ゾブ」濡れになつた心學の教師寒さに慄へ乍ら「これは何事で御座る」と驚くと、上段の殿様より

「先日そちの話した「なる勘忍は誰もする、ならぬ勘忍するが勘忍」と云ふことは斯様な目に遇ふても腹を立てゝはならぬと云ふことか」

と皮肉極まる質問があつた。

退屈の餘り斯様な惡戯をする殿様もあれば無作法極まる家來もあつた。

漢の高祖（大名とは違ふが）の前身は沛の刑務所長「肥料の分配とは何のことか」と問ひ兼ねぬ位の無學文盲であつた。從て之に付き添ふ攀喙などゝ云つたら武勇は一騎當千の兵者であつても禮儀作法と來たら皆目辨きまへぬ連中であつた。天子になつた後も「大將一杯行ふ」とか「親方わつちの盃を受けておくんねえ」などゝ盃を高祖に突付けると云ふ有様であつた。

何時迄もこれではならぬと思つた蕭何曹參叔孫通と云ふ學者に頼んで禮式を定めて貰つた。豫め稽

古をした上で或式日に調見の式を行ふこととなり皆々習つた通りの三拜九拜の式を行ふと跡で高祖が

「おらー天子の尊いことをけふ初めて知つた」と感心した。

幕末の明君と云はるゝ山内容堂も色々のこともやれば色々な目にも遇つた。

容堂は山内家の支族に生れ宗家豊範幼少の爲め中繼ぎ養子となつた。其際に家老や重臣達が

「なあんだ。南御屋敷の輝衛さんが殿様になるのか」と馬鹿にし掛けた故

「其儀ならば目に物見せてくれん」

と角力を挑んで片つ端から投げ飛ばして仕舞つた。

江戸に於て或大名の邸に招かれ酒酣にして列席の侯伯何れも隠し藝を演じた際主人を始め來客達何れも容堂が能の達人たるを知り居り辭退するも聞かず強いて所望する故忽ち疝癩を起し

「然らば土佐流の藝を御覽に入れん」

とて手拭にてほう被りをし刀を帯びて立ち上り刀の柄を手に握りて

「おらのとんと（美少年）にさはらばさはれ。腰の朱鞘は伊達ぢやない」

と怒鳴り散らし終りに「すれすれ」と叫び乍ら「これが土佐流の陣ノ一だ」とて山海の珍味を盛りし盤臺の眞中を遠慮會釋もなく縦横にあれば廻りし爲め皿も小鉢も微塵となり酌に侍りし女中共は恐ろしさに逃出し一座呆れ果たが容堂は一切頓着なく「もう御暇申す」と云ひ捨てゝ立ち歸つた。

其後京都二條城にて鳥津久光と同時に將軍に謁せんとして久光が之を拒ばむや矢庭に久光の襟首をつかみ引摺つて行かんとし久光怒つて扇子にて容堂の手をたたくとからからと笑つて久光を突き放した。

腕力の強き斗りか學を好み歴史に明るく例の將軍繼嗣事件の際水戸側の味方をしたとて井伊掃部頭に睨まれ封を豊範に譲つて隠居した。井伊の死後一橋慶喜越前春嶽の幕府に用ゐらるゝや容堂は兩人より相談相手と頼られ幕府の政治に參與し公武合體開國論に賛成し長土勤王黨の討幕攘夷論に耳を傾けざりし爲め長州の志士達は容堂の此態度に反感を抱いて居つた。

文久二年十一月五日容堂は毛利定廣に招かれ、板垣退助、小笠原唯八、山路元治等を従へて櫻田の長藩邸に赴いたが、酒宴の席にて爲政の要を論じ、周布政之助の書せる漢字が違て居るとて之を訂正し、更に興に乗じて倒まに瓢箪を畫ぎ

「今の長州は此通りだ」

とて暗に毛利家が志士の云ふ儘になつて居るを誹つた。周布は漢字を直されて耻を搔いた後でもあり旁之を見て大に腹を立て「何か仕返しをし度い」と考へて居つた。其際丁度久坂玄瑞が出て來て容堂に挨拶すると容堂は杯を久坂に差して

「お前は吟詩が上手だそうな。何か吟じて見よ」

と久坂に勧めた。周布はこれ幸ひと、久坂の袖を曳いて其場を離れ、何かさゝやめた後久坂は再び宴席に出て來て僧月照の長篇を吟じて。吾居方外猶切齒、廟堂諸公何遲疑。と云ふ所に至りて「ハタ」と止めると、周布が突然進み出でゝ容堂を指して

「侯も亦廟堂諸公の一人だ」

と無遠慮にやつてのけた。友藩の藩主に對して無禮極まる此振舞に、満座の面々これはと驚いたが容堂は顔の色を少し變へたのみで左程咎立もせず、其場は其儘に濟んで仕舞つた。

其後高杉晉作の横濱居留地焼打中止に關する問題で小笠原唯八、山路元治等が毛利定廣より酒を賜て退出するや周布が大醉の體にて宗十郎頭巾を眞深に被り馬に乗て近いて來て、

「容堂公は中々御上手の御方尊王攘夷をちやらかしなさる」

とからかつた。小笠原、山地等之を聞いて信相を變へ馬上提燈を後に廻はし

「何と申さるゝぞ」

と刀の柄に手を掛けて詰め寄ると傍から飛び出した高杉晉作

「各々方此男は拙者が成敗致す」

と刀を抜いて周布を斬り捨てんとした。其時久坂玄瑞も飛んで來て

「暫らく俟て」

と高杉を抱き留める。其間に周布が逃げ出すと山地元治拔刀の儘之を追はんとしたが年長の小笠原が之を制し一先づ藩邸に引返へした。此話を聞いた容堂一時は頗る怒つたが元來が活達の明主のこととて斯る重ね重ねの無禮も左して意に介せず定廣の挨拶にて其儘に濟んで仕舞つた。

同年十二月容堂京都に上り廿四日の夜河原町の藩邸にて酒を飲み好機嫌となつて居ると

「間崎哲馬土方久元が御目通り願度と申して参りました」

と云ふ取次があつた。

「此夜更けにうるさい奴が來た。もう寢たから明日來いと云へ」

と逐ひ歸さんとしたがいつかな退却せぬ。

「天下の大事に候へば御目酔めを願ひます」

と遠慮會釋もない。天下の大事と云ふは何事かと不審に思て遇て見ると

「一刻も早く攘夷の期限を確定發表する様殿の御盡力を願ひ奉る」

と云ふ丈で別に其夜に差迫まつた用事でもない。之を聞いた山内容堂長坂橋上の張飛の叫びも斯くやと思ふ程の大聲を出して間崎を叱り飛ばした。

武市半兵太が容堂に謁して公武合體の否を論ずるや直言彈る所なく容堂も頗る閉口した。武市が

「山内家は島津毛利と違て徳川に恩誼を受けて居ると殿様は仰せらるゝも、土佐二十四萬石に封ぜられた恩誼は關ヶ原當時の戦功で帳消になつて居ると存じます」

と述ぶるや容堂は顔の色を變へた。或人が武市に向ひて

「左様のことを云ふて居て自分の身が危くないか」

と注意すると

「俺は素より命を投げ出して居る」

とびくともし無い。身を棄て、掛つた武市半兵太殿の御機嫌を損ふとか損はぬとか云ふことはてんで眼中になかつた。

愈々大政返上の献白をする事となるや容堂は老臣一同を集めて其旨を申し聞した。此折衷案ならば誰も異議を唱へまいと一統を見廻したが勤王黨も佐幕黨も折衷案に不満足か「恐れ入つたる殿の御明案」など、賛辭を呈するものはなく席を離れて進み出でたる板垣退助

「夫れはいけません。徳川家の先祖が馬上で取つた天下を口先きで朝廷に取り戻すなどと云ふことは到底出来ませぬ」

と恐れ入る可き殿の御明案を恐れ氣もなく罵つた。案に相違の山内容堂

「退助が復た亂暴なことを云ふか」

と苦笑ひをした。

土佐の軍の東進するや日を経るに従つて兵數の不足を痛切に感ずるに至つた。大石彌太郎は他國の士民を集めて斷金隊を組織し美正貫一郎を其隊長としたが秋澤清吉は後援軍督促及び軍資調達の爲め板垣總督の命を受け外國船を雇ふて横濱より京阪に向つた。伏見鳥羽戦後最早徳川家の救解を斷念せる容堂は其請求を納れ京阪に滞在せる佐幕派隊長の軍隊に出陣を命じたが今度は佐幕派が中々承知せぬ。佐幕派の領袖にして前年武市瑞山を糺問し嗚聲を出して「シマツ」の綽名を得たる野中太内容堂に面謁を乞ふて後援軍發送の不可を論じ容堂之を肯き入れぬや興奮の餘り脱線し君臣の禮なんか一切打ち忘れ

「殿様は今迄徳川家と山内家の情誼を仰せ乍ら今になつて討幕の援軍を送るとは何事で御座りますか。殿様はうそを仰せらるゝか」

と容堂に喰つて掛つた。夫れが爲め太内は土佐に逐ひかへされ切腹を命ぜられた。太内は野中兼山の支流であり相當の人物であつたが餘りに行掛りにとらはれ身を亡すこととなつた。これで佐幕派も出陣することとなり土佐に於ける勤王佐幕の争ひは永久に終つた。

會津を陥落させて歸つて來た板垣退助が意氣揚々として容堂に謁を求むるや折柄來客があつて「暫

時俟して置け」と云つた切り一向に遇ふとせぬ。客は氣の毒がつて暇を乞ふたり其席に呼んでは如何と勧めたりしたが容堂は中々承知せぬ。小一時間程経つて客が歸り板垣が容堂に遇ふと

「御苦勞御苦勞待つたであらう。だが少し待たして英氣を挫いて置いて遇はぬと自慢話がえらくてとても堪らぬて」

と見事先手を打たれた。

### 第二二 安塚の戦

近藤勇の捕縛と同時に流山を去つた土方歳三は旗本會津桑名の脱兵と合し明治元年四月十二日土方及び秋月登之助、立見尙文等下總の市川に於て大鳥圭介と會合大鳥を主將に仰ぎ宇都宮を経て日光に向ふこととなつた。其兵數約二千之を三隊に分ち第一隊は三妻下館を経て宇都宮に向ひ十九日宇都宮城を攻めて之を陥れた。宇都宮城の官軍は必死となつて戦つたが何を云ふにも兵は寡く彈藥は乏しく武器は弓槍火繩銃の舊式であり己むなく城に火を掛けて退却した。大鳥軍の第二隊第三隊は關宿諸川小山朽木を経て鹿沼に向つたが朽木鹿沼の間を進む際遙か東北方に當てえんえんの天にみなぎるを見第一軍が宇都宮城を陥れたるを察し鹿沼より轉じて宇都宮に至り二十一日再び第一隊と合併した。

宇都宮危急の報總督府に達するや總督府は直ちに其救援を薩長土等の諸藩に命じ薩長大垣の兵は關宿結城を経て宇都宮に向ひ土佐の半軍は因州の四小隊と共に十八日江戸出發奥羽本道を通つて宇都宮に向ふこととなつた。土佐の指揮官は左半大隊長土屋可成にて砲隊長北村重頼、歩隊長日比虎作小島捨藏、宮崎合介、眞邊戒作、平尾喜壽の諸隊を率い大石彌太郎、秋澤清吉、安岡亮太郎、大石宇都宮城に居た大鳥圭介(同日病氣宇都宮に止まる)土方歳三等は官軍壬生入城と聞き直ちに宇都宮を發して南進し又敵兵出沒の噂を聞ける小鳥、宮崎、眞邊の三隊は大石彌太郎附添の上因州の三小隊と共に北進し二十二日宇都宮壬生の間安塚に戦つた。此夜は暴風雨にて霧深く濛々として呎尺を辨せず最初は土因の軍敗色を呈せしも壬生を留守せる土屋、秋澤、安岡、北村等全軍を擧げて來り救ひ安塚の驛端に胸壁を築き中央に大砲を据え歩兵を其左右に配置し二十二日深更より二十三日の朝に掛けて激戦數時間折柄寒氣強くして恰も冬の如く敵も味方も地理不案内の爲め大に困しんだが結局脱兵軍の敗北となり脱兵軍は遂に宇都宮に退却した。此戦の際敵彈飛び來つて徒軍監大石側左衛門の腹を貫き大石は立ち乍ら

「もう助からぬ」

と叫んで戦死した。享年四十二地理及び測量に達し惜む可き人物であつた。

戦が終つて歸陣した様子を見ると敵と味方も大雨の爲め「ピシヨ」濡れになり川の中に飛び込んだも同様であつた。土佐の軍隊は輜重奉行が狼狽逃走した爲め頗る困んだ。大石、秋澤、安岡は連日連夜殆んど一睡もせず或は敵偵察より作戦計畫或は糧食運搬より負傷手當に東奔西走した。此時關宿を経て宇都宮に向へる薩長大垣の軍も亦此近く迄進んで居り安塚の激戦を聞き大急ぎで駈

付けたが最早戦の終つた跡であつた薩長の兵は此勢に乗じて宇都宮城を取り返さんと翌日大垣因州の兵と共に宇都宮に向つて進撃した。

安塚の戦に敗れた大鳥、土方等は官軍が勝に乗じて宇都宮に攻め来るに相違ないと思つて翌二十四日早朝諸隊長相會して戦争の方法を相談して居ると小銃の音遠く聞え最初は味方の兵が昨日雨に濡れた銃の筒拂かと思つて居たが次第次第に其音が烈しくなり殷々たる大砲の響も耳に入る故扱は愈々敵の襲來かと直ちに防戦に着手したが午後になると官軍の攻撃益々激しく大砲小銃の音雷の如く脱兵軍は己むなく宇都宮を棄て、日光に向つて退却した。此際土方歳三は足指に負傷した。日光に退却するにも直に日光街道に出ることが出来ず一先づ奥羽街道に向ひ間道より日光街道に出て退却した。土佐の軍隊は輜重奉行逃走の爲め宇都宮城奪回戦に加はることが出来なかつた。

脱兵隊軍が二十二日宇都宮より本道を経て安塚に向へる際小部隊の支軍を雀宮の間道より壬生城に向はしめた。此小部隊は官軍の恰好をして生壬に向へる爲め易々として壬生城下に至ることが出来た。前日負傷の爲め壬生城に留つて居た眞邊戒作等は敵兵既に城に迫れるを見大に驚き打死の覺悟を決したが脱兵軍も後援の續くもなく壬生城を陥るには人数が不足だとして退却せる爲め死を免るゝことを得た。此飛報が江戸に達すると江戸にては土因の軍安塚に大敗せるものと誤解し板垣退助は直に谷干城、片岡健吉、山地元治、坂井重季、安岡覺之助等を率いて吊合戦の爲め江戸を發したが二十五日越谷驛に至りて初めて安塚の捷報に接した。

宇都宮城を奪還せる官軍は其後數手に分れ薩長因垣の兵は或は白河に向て奥羽街道を北進し或は宇都宮を留守し土屋可成の率ゆる土佐の前半軍は板垣退助の率ゆる後半軍と合し大鳥等の跡を逐ふて日光方面に向ひ今市に滯陣した、

日光に退却せる大鳥等は彈藥も兵糧も缺乏せる爲め一先づ會津領内に退き軍備を整へて再舉を圖ることにした。日光方面より會津領に入るには今市より小佐越や五十里村を経て田島に通ずる本道があり此道は牛馬も通ふ相當の道であるが土佐の軍隊が既に今市に進出し來り之を占領して居る爲め此道を通ることが出来なかつた。己むなく六方越の間道を通つて五十里村に出て夫れより本道を通つて田島に赴くことにした。此六方越は八里の間人家一軒もなく蜀の棧道にも勝ると云はるゝ程の難所であつた。

大鳥等が日光を出發して山路に差掛ると雨上りのこととて泥は深く暫らくの間は提燈があつたが後にはろをそくも盡き果て、咫尺も辨ぜぬ眞のやみ其やみの中を多人數の通ることとて難とを甚だしく一步ふみ外せば千仞の深谷に陥る爲め半丁行きては立ち止まり一丁行きては休み苦心たとふるにもものなく別に嚮導もなければ大凡方角を定めて深山幽谷を跋涉し道程凡そ三四里も行きたる頃既に夜更の模様故木蔭によりて腰を掛け枯木を拾ひ集めて火を點じ石を枕とし木の枝を折つて蓐とし一睡の夢を結び翌曉再び進軍峨々たる峻坂を越へ漸く一軒の茅屋に辿り着いた。此日は朝から飯も食はぬこととて士官も兵卒も疲勞甚しく食を求めんとしたが寒郷の一軒屋のこととて飯は素より食するものもなく或は味噌を嘗めて水を呑み或は澤庵をかみ或は梅干を食つた。夫れより更に三里斗りを進み米と稗とを交ぜたる粥を食らひ翌日河沼に着し三日目にて初めて米飯を食ひ河を渡りて五十里村に出でこれより本道を通つて田島に赴き田島にて軍備を整へ全軍を數隊に分ち白川、鹽原、日光方面に分遣することにした。

安塚破賊

安岡亮太郎

神機轟九地

奮戰賊營空

伏屍縱橫裡

披襟納細風

106

六方越退却

大鳥圭介

重轡道險細於糸

暗夜攀來兵悉疲

澗底掬泉分綠草

樹陰燃火拾枯枝

滴襟零露寒驚夢

拂袂山風冷透肌

林外馬嘶天欲曙

滿溪朝霧日昇遲

第二三 板垣退助の北進

土軍の滞在せる今市は官軍に取つても敵軍に取つても頗る要害の場所である。今市より會津領の田島に通ずる牛馬の通る位の道路がある。會津の軍隊が田島より今市に出で、宇都宮を襲ふときは白河に向へる官軍の背後を絶つことが出来る。官軍が今市より田島に進むときは白河に居る敵軍と會津の連絡を絶つことが出来る。双方共に如何しても守備を置かねばならぬ場所であつた。土佐の全軍は大鳥等追撃後四月下旬より五月始迄約四十日間（閏四月のある故）今市に滞在して其守備に當ることとなつた。一旦田島町に退ける大鳥等は脱兵軍を數隊に分ち白河那須鹽原日光諸方面に分遣し大鳥自身は會津の山川浩等と共に再び日光方面に進出し來り今市の正北に當れる日光山脈の中腹藤原に陣取つて今市に居る土佐の軍隊と對抗した。

爾來大鳥山川等が大谷川を渡り今市に在る土佐の陣營を襲ふこともあれば土佐の警羅隊と敵軍の斥兵と衝突することもあり又土佐の軍隊が大鳥山川等の軍隊と戦はんとして出陣し乍ら之に出遇はざることもあり又出遇つて之と戦ふこともあつた。大鳥山川等は今市を奪取せんとして屢々土軍の陣營を襲撃したが土佐の諸將善戰能く之を守り遂に之を奪取することが出来なかつた。其代り土佐の軍隊も亦大鳥、山川等を藤原方面より追拂ふことが出来なかつた。閏四月十九日の如き土佐の諸將

藤原、今市の中間に當れる小佐越を奪取せんとし土屋可成土佐の四隊及び彦根の二隊を率い谷干城桑原介馬、安岡覺之助之に付添ひ小佐越に向つたが山下より山上に向つて進撃することとて敵は山上の樹木の間より官軍を眼下に見下して之を射撃し官軍の進む所は廣原にて小楯とす可きものなく漸く土地の窪める所斷崖となれる所に沿ふて進撃するも敵は大鼓ラツパを林中にならして盛に虚勢を張り間道より背後に出で、官軍の退路を絶たんとする形勢を示し山地元治齒がみをして憤り抜刀を以て敵の陣中に切り入らんと言出したが大勢の敵が山上の林中に散在し諸所方々より銃を發射することとて何れに向つて切込む可きか其見當も立たず携ふる所の彈藥は既に費ひ果し己む無く今市に向つて退却することとなつたが敵も官軍の退却の緩かなるを見偽計に陥るを恐れて強いて追撃しなかつた。板垣退助は小佐越奪取軍の戦況如何を案し坂井重季、北村重頼等を率いて土屋等の跡を追ふたが途中安岡覺之助が援軍を求むる爲め本陣に歸るに遇ひ板垣は兵を安岡に渡して今市に歸り安岡は坂井等と共に戰場に引返へし土屋谷等と合して夕刻今市に引上げた。

今市滞陣中秋澤清吉は援軍督促の爲め土佐に歸り谷干城も續いて土佐に歸り安岡亮太郎は小山に居る軍隊に打合せの爲め小山に赴いた。四月にも援軍が土佐より到着し五月にも秋澤清吉七月にも谷干城が援軍と共に城中に歸て來た。四月到着の援軍中に第十四番隊長桑津一兵衛、小軍監三原兎彌太、小軍監森田金三郎が加つて居た。此三人は何れも瑞山血判狀署名者の一人にて桑津は舊名を山本三治と云ひ父系にては坂本龍馬の從兄の子母系にては瑞山夫人武市富子の從弟に當り文久二年土佐勤王黨の志士五十人屈棄の儘上國に向ふや桑津は中岡慎太郎、北代正臣、河野敏鎌等と共に其伍長の一人であつた。今や輕格も隊長となつて出陣の出来ることとなつた。森田金三郎は伏見に於て



暗殺されたる土佐の偵吏井上佐市郎の加害者の嫌疑を以て武市入獄後獄に收容されたが下獄者切つての硬骨漢とて獄吏が

「如何に隠した所で御上では何事も判つて居るぞ」と云ふと森田が

「判つて居れば問ふ必要があるか」

とやり返し如何に拷問を加へてもびくともしなかつた。三原兎彌太は文久二年三條實美姉小路公知勅使として東下の際其隨従者の一人であつた。森田は五月七日隊を監して今市の北方小百に向へるも大鳥等の隊と遇はず桑津は六月二日白河口に奮戦し八月二十日保成峠進撃の際も奮闘負傷し三原は八月二十三日會津城攻撃の際谷口傳八の軍を監して其後門に向ひ彈丸雨飛の間に奮進重傷を蒙り遂に死亡した。

土佐の軍は今市を守る約四十日五月上旬肥前の兵と交代して宇都宮に歸り同月未旬總督府の命により白河に向つた。白河は五月初旬伊地知正治、薩長大垣忍の兵を率いて之を取つたが奥羽の咽喉とも云ふ可き重要な場所とて爾來敵軍の奪還を試むること殆ど絶間もなく官軍も頗る之に惱まれて居た土佐の軍の白河に近くや白河を守る薩長兩藩より急使を馳せて應援を求め來り秋澤清吉一隊を率いて石川に進み敵軍を撃退して長軍を援ひ安岡覺之助一隊を監して金正寺山に到り敵と戦つて薩軍を援つた。

官軍白河を取つて以來既に二十日其間絶えず敵の襲撃を受くるのみにて一步も白河以北に進出することが出来なかつた。板垣退助は座して白河を株守し自ら兵を登むるよりは進みて棚倉を攻むるが

よいとて之を薩長二藩に計つたが何れも兵數が足らぬとて之を躊躇し結局三藩より各一人の使者を出し兵を江戸に求むることとなり土佐よりは安岡覺之助を使はした。三藩の使者が江戸軍務局に赴き大村益次郎に遇つて援兵を求むると大村は

「海路より軍隊を派遣したれば平瀧に上陸の上棚倉三春二本松を下だすことと思ふ。其時海陸相應じて先づ仙臺米澤庄内を討ち會津を孤立せしめて置いて之を抜くがよい。されども白河より援兵を求むること故陸路よりも少しく兵を送ることにせん」

と答へ數日後阿波の兵等五百人を白河に送つて來た。

六月廿四日午前三時官軍白河を發して棚倉に向ひ途中より三分して左右の間道及び本道に向ひ土佐の本隊は板垣退助之を卒い片岡健吉、安岡覺之助之を監して長州の兵と共に本道より進み敵は堡壘を正面に築き伏兵を左右に備へて官軍を狭撃せしも官軍力戰之を敗り遂に棚倉城を陥れた。

爾來土佐の軍隊は一部は白河一部は棚倉に滞在した。敵は屢々白河棚倉の奪還を試みた。七月一日敵白河を襲ふたが土屋可成兵を率い秋澤清吉、三原兎彌太之を監して敵兵を迎撃し之を破つた。七月十五日敵白河及び棚倉を襲ふたが白河は秋澤清吉棚倉は安岡覺之助軍を監して之を撃退した。七月十六日敵兵棚倉の附近淺川に逼つたが片岡健吉、大石彌太郎、安岡覺之助三隊を監し彦根の兵と共に之に應戦し敵軍は城山に據り砲を放つて戦つたが土佐彦根の兵山上に突進して之を撃破した。七月廿六日薩長土大垣忍の兵三春に向つたが三春藩土河野廣中等城主秋田萬之助の叔父秋田主税を導き降旗を樹て官軍を城外に迎へ河野は之より斷金隊に屬し敵軍と戦つた。

七月廿七日北村重頼、坂井重季等大垣忍等の兵と共に本宮を攻めて之を取つた。平瀧に上陸した海

路派遣兵は未だ寸功を建てざる故白河より進んだ軍隊の本宮奪取に頗る不満であり稍もすれば双方の間に不和を生ぜんとする虞ある故板垣退助は大石彌太郎を本宮に遣し一旦本宮の兵を三春に退却せしめんとしたが安岡覺之助其不可を論じ其内に海路派遣軍の意も解け兵を本宮に止めて更に二本松を攻めることになつた。

此日甲府争奪の斥候として首動を奏せし美正貫一郎が戦死した。美正は勝沼戦争後大石彌太郎の組織せる斷金隊の隊長となり各所に轉戦頗る功勞があつたが二十六日の夜或隊長が美正は醫師の粹だと云つたとかで頗る激昂し二十七日の戦には興奮の餘り思はず猪突戦死した。美正の一隊は途上敵軍と戦つて之を破り逃ぐるを追つて阿武隈川高木の渡しに至り敵兵中或者は川を渡りて彼岸に遁れたが或者は高木の渡しに追ひ詰められ川に溺るゝものもあれば斬殺さるゝものもあつた。敵軍は川を隔て、銃を發し防戦甚だ努め大雨の後に河水は大に漲り我軍は進まんとするに舟筏がないので頗る躊躇した。美正は之を見て大に怒り象に先んじ自ら躍り水に入ると新に斷金隊員となれる河野廣中等數人奮然として之に續き川に飛び込んだが楮て中流に進むと水勢は頗る激しく敵の狙撃も亦甚しく急となり偶一發の銃丸美正の眉間に中り急所を打れたこととて美正は其場に戦死した。年僅に二十五資性機敏にして雄辨惜む可き可き人物を失つた。

七月二十八日曉霧漸く晴るゝや敵本宮を襲ひ館林藩の陣地に襲來し館林軍苦戦となり諸藩の兵馳せて之を救出した。土藩にては池知退藏美正貫一郎に代つて斷金隊を率い山地元治、北村重頼、谷重喜、小笠原謙吉等と共に咄嗟之に赴き敵の後方の小松林を占領して其退路を遮斷し突進之に逼り敵軍周章狼狽崩れとなり漸く一方の血路を開き這々の體にて潰走するを追撃し館林藩が敵に奪はれたる大破二門を取り返へした。此時敵側の將士二人道路の左右に伏し突然蹶起して左右より山地元治に斬つて掛り山地奮闘其一人を斬つたが五十嵐文吉の子五十嵐幾之助駆け來りて残りの一人を斬つた。

七月二十九日薩摩土佐大垣等の軍二本松城を攻めて之を取り二本松城主丹羽長國は米澤に奔り老臣丹羽一學等城に火を放つて戦死した。此日敵軍は山に沿ふて柵を結び木立の間に隠れて銃を發し彈丸雨の如く次て接戦となり官敵呎尺の間に相うち池知退藏は紅衣を着けた六十歳内外の男に槍を捻ねつて突いて掛られ銃を棄て剣を取つて之に向ひ終に之を斃し大石彌太郎も亦組打をやつた。大石が路傍の小山に登つて戦況を視察して居ると前方の藪影より二人の敵が突如として現はれ刀を抜いて大石と斬り結んだが武藝にも長けたる大石のこととて敵は叶はじと思ひけん山下の畑へ逃げ行くを大石追駈けて其一人とむづと引組んだが敵は思ひも寄らぬ大力にて大石は其場に組伏せられあはや戦死を遂げんかと思はれたが沈勇不敵の大石のこととて今はこれ迄と覺悟を極め刀の柄を畑の中に深く押付け刃先を上に向け敵の腹を鏝も通れと突込み弱る所を刎返し美事之を仕留めて了つた

(附記)平石辨藏君の著せる「會津戊辰戦争」と云ふ書籍に仙臺の細谷十太夫の日記が載つて居るが其内に左の如く書いてある。「此日二本松嶽下を通り二本松に出でんとして進み行きしに二本松城の焔炎盛なるを望見す斯くては到底同地に出る能はずと思ひ再び嶽下に戻り荒井原通り福島に出でんとしたるに二本松より逃げ來る男女老若の様は實に見るに忍びず聞くに耐へず饑に泣くもあり疾みて哭するもあり、幼兒の手を携へ且つ負ひて走る女もあり若き者の肩にかゝり喘ぎ々々涙を流して來る老人もあり中にも昨夜分娩せりと云ふ若き女が人の肩にかゝり殆ん

ど生色なくしてとぼと歩み來れるげに悲慘の極みなり自分も空腹耐へ難くて畑の中の西瓜を頻りに狙ひては採り喰ひけるが其中の大きやかなるを晩食にせばやと鎗の尖に貫きてかつぎ來りけるに饑えたる子供の跣足にて今や倒れん様に歩み來れるを見て之に與へたり子供喜びに耐えざりけん皮の儘にて喰ひけり聞けば昨夜より一粒も食はず庭坂迄落ち行くなり」云々

官軍は二本松陥落後八月二十日迄二本松に留まつたが八月十五日土軍より勸降使を米澤に遣はした米澤藩主上杉齊憲は土佐藩主山内豊範の姻戚なる故土軍の幹部も官軍に歸順させ度いと思ひ乍ら如何共することも出来なかつたが從軍書記岩崎惟謙米澤勸降書と云ふ一文を作り安岡覺之助に示すと安岡は面白しとて之を用ゆる機会を待つて居つた。二本松に入るに及んで愈々其勸降書を用いんと安岡は板垣退助及び總督府軍監小笠原唯八に其趣を申出で板垣が其實施を難すると

「軍律を犯かし死刑に該當するもの三人あり其内澤本盛彌は膽大に氣豪此使を果す見込がある之を赦して米澤に使せしめては如何」

と勸めた。板垣も安岡の意見に賛成し一先づ澤本の膽力を試みた上にせんとて秋澤清吉に其旨を言ひ付けた。八月十四日秋澤が檢使となつて三人を刑場に導き既に其二人を斬り愈々澤本の順番となつたが澤本は致方が無いと諦めたものか平然として顔色も變へない。創手愈々澤本を斬らんとすると秋澤が

「待つた」

と留めて澤本を人の居ない場所に伴なひ

「此所で刑に死するよりも國の爲めに死んでは如何か」

と云ふと澤本は大に喜んで

「既に命は無い身體國の爲めに死ぬる事が出来るなら此上の幸はない」

と云ふ。茲に於て秋澤は澤本を伴つて本陣に來たり谷干城等澤本に例の勸降書を渡し

「米澤にて殺されても節に死せる汝の名は萬世に残る。醜名を残して茲に死ぬると比較にならぬ」

と確かと言ひ付け翌十五日の朝澤本は姿を變へて土人の姿となり米澤より二本松に來て居た鍛冶屋を案内とし山中無人の境を過ぎて米澤に入つた。米澤にては行掛り上會津の味方となつて官軍と戦つたが段々收戦となり其頃はつまらぬことをしたと最早いや氣がさし君臣其進退に窮し途法に暮れて居た際とて澤本のもたらせる勸降書を読んで渡りに船を得たる心地にて大に喜び直ちに歸順と決定し澤本は思ひもよらぬ歡待を蒙り米澤藩は一小隊を若松に送り攻撃軍に参加せしめ歸順の實を擧ぐることとなつた。

八月十七日敵兵六百人福島街道より二本松を襲ひ土佐彦根の兵迎撃之を破り砲二門を奪つた。此日の土軍の總帥は土屋可成軍監は片岡健吉、伴權太夫、秋澤清吉、安岡覺之助にて胸壁を本道に築き兵を左右の山に伏せ斥候を出して敵軍を誘つたが敵兵遂に敢て進まざる爲め己むなく攻勢を取るに決し本道より猛進すると同時に彦根の兵は右方土州の兵は左方より突如並進すると本道の官軍を防ぐに汲々たりし敵軍は不意に側面を攻められて周章狼狽總崩れとなつて退却した。

第二四 會津の落城

維新當時奥羽に於ける大中藩と云ふは

仙臺	六二萬石	外様	伊達慶邦
會津	二三	親藩	松平容保
秋田	二〇	外様	佐竹義堯
盛岡	二〇	外様	南部利綱
米澤	一五	外様	上杉齊憲
莊内	一五	譜第	酒井忠篤
弘前	一〇	外様	津輕承昭
二本松	一〇	外様	丹羽長國

にて其内秋田津輕兩藩は官軍に味方し仙臺、盛岡、米澤、莊内二本松の諸藩は磐城、岩代、越後の諸小藩と共に會津に左祖し幕府の脱將大島圭介、土方歳三、古屋作左衛門等亦之に加つた。

官軍は四手に分かれ板垣退助、伊地知正治を参謀とせる白河口の軍隊は前述の如く幕府の脱兵と下野に戦て之を敗り更に進んで白河棚倉三春本宮二本松の諸城を陥れ木梨精一郎等を参謀とせる海路派遣軍は平瀧に上陸し平を陥れて白河口の軍と聯絡し黒田清隆、山縣有朋を参謀とせる越後口の軍隊は長岡の名士河井繼之助の率ゆる新式の兵と戦ひ對陣數旬に亘り或は山縣有朋が

仇守るとりでのかゝり影更けて夏も身にしむ越の山風

の和歌を詠じ或は南洲翁の弟西郷吉次郎や長州の時山直八が飛丸に中つて戦死せる後遂に長岡藩の軍を破り八月上旬越後の東部に進出し九條道孝を載ける一軍も亦秋田に滞在し米澤莊内の背後を伺つて居た。

會津にては軍制を改革し白虎、朱雀、青龍、玄武等の諸隊を編制し之を日光口、越後口、白河口、大手口等に配置した。其内最も有名なるは白虎隊にて十六歳十七歳の少年より編制されて居つた。江戸の軍務局に居て征討の方針を定むる大村益次郎は平瀧、棚倉、三春、二本松を下せる後仙臺、米澤、莊内を下し然る後會津を攻むる考であつたが白河口の参謀板垣退助、伊地知正治は

「會津は根本であつて仙臺、米澤は枝葉である。根本の會津を亡すときは枝葉の仙臺、米澤は自ら亡びる。愚圖々々して居て冬とならば戦は暖國の兵を以て成立せる官軍に不利となる。さればとて明春に延ばすときは其間に如何なる事件が出来せぬとも限らぬ。一刻も早く敵の中堅たる會津を攻撃し之を陥れねばならぬ」

と云ふ意見にて二本松陥落後全力を擧げて會津に進撃することとなつた。奥羽街道に沿へる白河郡山二本松福島と會津との間に一帯の山脈があり之を横切つて前者と後者とを聯絡する數筋の本道間道が在るが其何れを進むかが會津攻撃に際して第一に決す可き問題である官軍が二本松の本營にて會議を開らくと其席にて板垣退助は

「土湯峠、中山峠、保成(ボナリ)峠の三口より進撃すると揚言し敵兵を此方面に牽付けて置いて其實密かに御靈櫃口を衝き勢至堂口の背後より會津城下に突進せん」と述べたが伊地知正治之に反對して

「御靈櫃口勢至堂口には白河口より退却せる敵の大部隊も居り防備も嚴重なる故此方面より進出することは困難である。保成峠は路險にして攻め難き様に見ゆるも間諜を放つて偵察するに敵は險隘を恃んで保成に嚴重の防備を設けて居らぬ。敵の油断に乗じ守備の薄弱なる此保成峠

を衝くがよし」

と主張し板垣は之を駁して

「保成を突破し猪苗代に入るとしても敵が猪苗代城に火を放ち戸の口の十六橋を断ては若松城下に進み得ざる故矢張り御靈櫃口に向ふがよし」

と論じ伊地知は

「保成峠さへ突破したら十六橋は疾風の勢を以て之を奪取する故十六橋を断たるゝ心配はない」と頑張り両者の議論容易に一致しなかつたが長藩の桃村發藏等巧に其間に斡旋し結局伊地知の意見通り主力軍を保成峠に向け少部隊を中山峠に向けることとなつた。

明治元年八月廿日薩長土佐大垣大村等の兵二本松及び本宮を發して保成峠と中山峠に向つたが保成峠の會軍は伊地知の偵察通り全く天險を頼んで手薄であつて雲霞の如き大軍が此方面に殺到するや急使を若松に馳せて援ひを求むるも援軍の到着に先だち翌二十一日官軍三道に分かれ薩長土垣の軍は中央の本道を進み薩の別軍及び大村の兵は左の間道を進み長土の別軍は右の間道即ち猿岩の間道を進み濃霧の中に砲火を交換し猿岩に向ひし右軍の如き絶壁を攀ち窮谷を越え三道より猛進し會軍も必死となつて之に應戦したが結局衆寡敵せず遂に保成峠を棄て、退却の餘儀なきに至つた。此戦の際安岡亮太郎、桑原介馬、は前軍を監して土軍の眞先(二十日)に進み片岡健吉、大石彌太郎、安岡覺之助、山地元治、坂井重季亦本道より進み谷干城、秋澤清吉は土屋可成、小笠原謙吉、吉松秀枝眞邊戒作等の率ゆる別軍を監して猿岩の間道に向つた。

八月二十二日前日保成峠を奪取されて退却せる會軍は猪苗代城を燒き十六橋(猪苗代湖の狭くなつ

て日橋川となる所即ち戸の口に架けたる石橋)を渡り全軍の渡橋を待つて橋梁を落さんとしたが其時河村純義(海軍大將伯爵)の率ゆる薩摩軍人の一隊は會軍の跡を追ふて疾風の如く走せ來り見る間に橋を渡つて仕舞つた爲め會軍は橋を落すことが出來ず二本松會議の際板垣退助の主張せしことは此機敏なる河村の働きの爲め全然杞憂となつて仕舞つた。

土佐の軍隊は保成峠陥落後猪苗代に本營を設けたるも板垣退助其全軍を率いて前進し猪苗代の本營は名義斗りて之に居るものは谷干城、安岡亮太郎、池知退藏等數人に過ぎなかつた。其夜薩の本營伊地知正治の許より土佐の本營に使が來て

「薩も一中隊を猪苗代に留むる故土も三小隊を留めて貰ひ度い」

と請求せる故谷、安岡等は使を前方に進める板垣の許に遣し打合せの上近傍に居る土の三小隊を猪苗代に留むることにした。

官軍の主力が保成峠に殺倒した保成峠を奪はれた猪苗代も奪はれたと云ふ注進が刻々會津城内に傳はると會津城内は大騒ぎとなつた。會津の精兵は日光方面、白河方面、越後方面に派遣されて居て會津城内には保成峠を破て會津領内に亂入せる官軍を支ふ可き多數の精兵が残つて居なかつた。

己むなく農民や商人や神官等より募集した俄か仕込の軍隊や十六七の少年より成立せる白虎隊迄も之に向け藩主松平容保も亦自ら出陣之に當ることとなつた。白虎隊の一人飯沼貞吉將に家門を辭せんとするや其母は左の和歌を認めて飯沼を激勵した。

梓弓向ふ矢先はしげくとも引きな返しぞものふの道

八月二十三日猪苗代城や十六橋を奪へる官軍は進んで瀧澤峠を奪ひ會軍の逃ぐるを追ふて會津

城下に殺倒し一擧會城を陥れんとし茲に若松市内に於て大激戦が開始さるゝに至つた。會津の精兵は國境各方面に派遣されたとは云へ城内には保成峠より逃れ來れる軍隊や老年の武士や少年の白虎隊等とを合せて猶相當の兵が残つて居つた。何れも必死となつて防戦せる爲め一氣に會城を陥れんとせし官軍も數多の死傷を出し目的を達することが出来なかつた。總督府の軍監で當時土佐の陣中に在つた小笠原唯八其弟土軍の隊長小笠原謙吉、隊長宮崎合介、小軍監三原鬼彌太皆飛丸に中つて死し土屋可成等亦負傷した。會津の決死隊は槍を執つて突出死物狂ひに奮闘したが其一人は土屋に肉薄し土屋銃を發して之を打つも中らず身を翻して之を避けんとして誤つて背後の凹所に躓き仰向けに倒れあはや槍に刺れんとする際下より銃を放つて之を斃し辛じて死を免るゝことを得た。此時猪苗代に残れる土佐の三小隊は進軍を谷干城等に逼て己まぬ故谷は板垣に相談の爲め池知退藏と共に馬上若松に向つたが途中板垣の許より猪苗代三小隊の進軍を促す使に遇ひ谷は直ちに若松に赴き池知は猪苗代に引返して其旨を三小隊に傳達した。官軍は會城を陥れんとして盛んに猛襲を試むるも城は頗る鞏固にして容易に陥落の見込無く兵士皆疲勞を感じる故攻撃を中止し各藩の守備區域を定めて會城を包圍し諸道より前進する友軍の來着を待つことにした。

此日會津の藩士及び其家族の難に殉するもの頗る多かつた。瀧澤峠の破れて官軍若松城下に殺倒するや若松城下は混亂の極に達し藩士の家族に城内引揚げを命ずる早鐘の響は物凄く城内より鳴り渡り市民は周章狼狽右に走り左に逃ぐる其間を縫ふて藩士の家族は續々城内に引揚げたが官軍が疾風の勢で城下に殺到せる爲め城内に引揚ぐる暇無く亦暇があつても足手纏ひとなると思ひ自殺した藩

士の家族婦人も頗る多かつた。

千石取りの重臣沼澤出雲の母貞子當年取つて八十二歳妻道子同じく五十一歳長女ユヤ子同じく二十七歳次女スガ子同じく二十三歳引揚の暇無く辭世の歌を書き残し枕を並べて自殺した。

もののふの兼ねて覺悟の梓弓引いて返らぬ今日となりぬる

貞子

諸共に死なん命も親と子の唯一筋の誠なりけり

道子

敵の手に掛らんよりは勇しく死ぬる我身の花とこそ知れ

ユヤ子

浮世には残す思もなかりけり兼ねて覺悟の今日にぞありける

スガ子

千七百石取りの家老西郷頼母の邸にても一族親戚二十一人衣服を改め水盃を擧げ悉く刃に伏して悲壯なる最期を遂げた。頼母の妻千重子三十四歳

なよ竹の風に任する身乍らもたゆまぬ節はありとこそ聞け

辭世の歌を認めたる後先づ懷劍をぬきて九歳の長女田鶴子を引寄せ一刀の下に其胸をえぐつた。次女常磐僅に四歳此有様を見驚きて泣聲を立つると千重子其うでを押へ

「於前も武士の子と生れた以上幼いとは云へ卑怯未練の振舞があつてはなりませぬぞ」

と懷劍を取り直して之を差とをした。其下に季子と云ふ二歳の三女があり之を刺さんとして抱き上ぐると無心の赤兒は慈母の顔を見てにこにこ笑つた。これを殺すかと思ふと流石の女丈夫も胸迫り手をのき暫らく涙にかきくれたが心弱くては叶はじと思ひ切つて差とをし更に懷劍を逆手に持ちかへ我と我のどを突いて美事なる最後を遂げた。夫れを見た頼母の第一妹マス子二十六歳死に返り幾度世には生るともますらたけをとなりなんものを

第二妹ユフ子二十三歳

もののふの道と聞しを便りにて思ひ立ちぬるよみの旅かな  
第四妹タキ子十四歳

手をとりて共に行きなは迷はじな

と上の句を詠むと第三妹タヘ子十六歳其下を受けて

いざたどらまし死出の山道

母律子

秋霜飛兮金風冷 白雪去兮月輪高

夫々辭世の詩歌を書き残し何れも懐劍の鞘を拂つて我と我のどに突立てた。

官軍の兵士が西郷邸に亂入し此凄壯悲惨の光景を見て餘りのことに茫然として居ると未だ死切れぬ

タヘ子既に眼は見えぬと思はるゝが蚊のなく様な聲で

「其方達は敵か味方か」

と尋ねた。官軍は互に目を見合せて黙つて居たが其内の一人がタヘ子の心を思ひやり

「味方だ。味方だ」

と云ふとタヘ子は少しく頭を起し手探りにて血に染つた懐劍を取出し黙つて之を差出した。苦しく

て堪らぬ故殺してくれと頼む心を察し介錯して其場を立去つた。

晩年佳人の奇遇を著はし有名なる

月横大空千里明

風搖金波遠有聲

夜寂々兮望茫茫

船頭何堪今夜情

の長詩を賦して文名を天下に轟かせる東海散士柴四郎時に年僅に十六病氣臥床中であつたが征討軍が會津城下に亂入すると母フチ子(五〇)四郎に向て聲を荒らげ「御身も武士の子でないか。早く戰場に立つて討死なさい」と勵まし四郎が「勿論です」と云ひ様出て行くとフチ子は其留守にて四郎の兄太一郎の妻徳子(二〇)太一郎の妹素衣子(一九)サツ子(七)祖母ツネ子(八一)と共に自殺した。後年陸軍大將となれる柴五郎(一〇)は前日より田舎の親戚の許に行て居り城下の變事を聞いて親戚と共に返つて見ると我家は既に焼けて灰となつて居つた。

婦人も悲壯の最後を遂げたが少年も之に劣らぬ壯烈の打死をした。退却の際道を失して城内に入ることを得ず已む無く飯盛山に引上げた白虎隊の一部山頂にそびゆる老松の邊りに立つて南の方鶴ヶ城の方角を望めば濛々たる黒煙は天をををひ殷々たる砲聲は喊聲と和し祖國の運命は最早けふが最後かと思はれた。隊長篠田儀三郎時に年僅に十七朗々として文天祥の零丁洋の詩を吟し了はるや隊員十九人或は肌押寬いて白刃を其腹に突立て或は大刀を逆手に持つて其喉笛を突き或は兩人對座互に相手の胸や咽喉を刺し貫き見事なる最期を遂げて仕舞つた。

少年團結白虎隊

國歩艱難成堡塞

大軍突如風雨來

殺氣慘澹白日暗

擊鼓喧闐百雷震

巨砲連發僵屍堆

殊死突陣怒髮立

縱橫奮擊一面開

時不利兮戰且退

身裹瘡痕含藥

腹背皆敵將何行

杖劍間行攀丘岳

南望鶴城砲煙颯

痛哭飲淚且彷徨

宗社七兮我事畢

十有九人屠腹僵

俯仰此十有七年

畫之文之世間傳

忠烈赫々如白日

壓倒田橫麾下賢

八月二十五日前々二十三日一舉に會城を屠らんとして廓門に突貫其目的を達するを得なかつた官軍

は夫々守備區域を定めて友軍の前進を待つて居たが友軍の前進に先じて四境に出陣せる會藩の軍隊や舊幕脫兵隊が會城の危急を聞いて續々返り來り二十五日早朝越後口に居た古屋作左衛門、町野源之助等坂下を發して若松に向ひ會津の藩老萱野權兵衛の一隊も亦米澤街道より若松に向ひ曉霧に乗じて長州大垣の擔當守備區域を猛襲し長垣兩軍は救援を其隣地の守備を擔當せる土佐軍隊に求むるに至つた。此急報に接するや八番二十番の二隊は叱咤直ちに起ち谷干城安岡覺之助、安岡亮太郎之を監して先づ出陣し續いて十六番十七番の二隊秋澤清吉之を監して出陣兵を三方に展開して會軍を迎撃した古屋作左衛門の隊には會津藩士の妻や娘が十數人交つて居た。此婦人達は二十三日の大混亂の際城内に入るを得ず坂下に引上げ坂下にて古屋作左衛門の隊に合し

「今日の戦ひは鐵砲の打合ひにて女達が薙刀で出合つても何の効果がない故思ひ止まれ」と勸むるを肯き入れずに従軍せるものであり中にも會津の勘定役中野平内の長女竹子當年取つて二十

二歳其妹優子同じく十六歳みどりの黒髪を惜氣も無く切り棄て義經袴たすき十字に白鉢巻をなし腰には刀を指し花の顔ばせ朱を注ぎ薙刀を水車の如く打ふり官軍に迫つて戦ふ有様は名にし負ふ古への巴板額も斯くやと斗り思はれたが偶一發の敵弾飛び來つて竹子の胸を貫き妹優子姉の命により泣々其首を切り會藩士某之を白無垢の小袖に包み坂下に持ち歸り法界寺に葬つた。竹子の薙刀の柄に

「ものふの猛き心にくらぶれば數にも入らぬ我身乍らも」と云ふ辭世が書いてあつた。此日の戦ひは朝八時頃より正午に及んだ。敵軍は朝霧を利用して竊に

柳橋に在る長州大垣の持口に近づき霧の晴るゝを待つて一切に攻撃を開始し長州の胸壁に突進し餘

りの不意に驚き潰ゆる官軍を打破り逃ぐるを追ふて七日町附近迄追撃せしが此近傍にて土州の軍隊に食ひ止められた。土州の軍は三ヶ所にわかれ兵を伏せ胸壁を設け弾丸を亂射して一步も敵を前進せしめず敵軍は數多の死傷を生じ戦友の死屍を小楯に取り必死を極はめて奮戦せるも士兵亦勇敢に防戦して之を近寄らしめなかつた。暫らく立つと土州の軍隊より長州の軍隊に相圖をする必要が生じた。何の相圖であつたか確かと判らないが多分追撃に關する相圖であつたと想像せらる。其相圖をする爲め安岡亮太郎が胸壁の上に登らんとすると側に居た安岡覺之助が「自分はわらじをはいて居るも亮太郎は足駄をはいて居る」を見「おらが上る」と言樣胸壁の上かけ上り其隅に突立ち身體の側面を敵に向け乍らぬび上つて長州の軍に相圖をした。其時早し彼時遅し一發の敵弾うなりを發して飛び來り覺之助の耳の直ぐうしろ(覺之助の郷里山北村にてやろくがつぼと稱する所)に命中し急所の傷手にはたと倒れ其儘其所に絶命した。所は柳橋の東又は東東北年齢は三十四歳であつた。覺之助の死後敵軍は疲労に堪へずして退却を開始し土軍は之を追撃して前村に至り其宿所に放火して歸つた。覺之助の遺骸は若松融通寺に葬り「官軍土藩小軍監安岡覺之助正義墓」と刻してある。覺之助思慮周密智謀絶倫然かも温厚にして圭角なく弱冠の頃長崎に遊學し蘭書を読み西洋の地理書兵書を講究し世界の氣勢に通じ漢學の素養も勤王黨中之に勝るもの少なく義には武市瑞山の謀議に參じ後には板垣總督の樞機に與れるが戊辰戦争の終りに際して偶々一發の彈丸其急所に命中し三軍の痛惜する所となり乍ら秋風落莫空しく骨を盤梯の山下に埋むることとなつた。

(附記)若し文久二年長士志士の運動が一直線に成功し武市久坂等が廟堂に立つたとせば其際武市を輔佐して施政の方針を定む可き土佐側の大立物は平井間崎よりも一層外國の事情に通じ吉



村よりも頭腦緻密坂本よりも博學多識細川潤次郎よりも政治家肌の此安岡覺之助でなかつたらうか。

一一四

八月二十九日會津の重臣佐川官兵衛決死の兵を率いて城外に突出官軍を逆襲し之を若松市外に撃退せんと決心し藩主松平容保の前に出で、其趣を述ぶると容保は其壯烈なる決心を激賞して盃を下し正宗の佩刀を與へ出門の際は嗣子喜徳と共に之を大鼓門迄見送つた。佐川が決死隊を編成すると七百の志士欣喜雀躍悉く死を決して之に加つた。官兵衛の父佐川幸右衛門當年取つて六十五歳官兵衛に向つて

「官兵衛此父も決死隊に加はるよ」

「父上は御老年のこと故思ひ止まれ度う」

「老年だから加はれぬと云ふことがあるか。わしの心は何としても動かぬぞ。之を見よ」

と肌押し脱いた下着を見ると墨黒々と「慶應四年八月二十九日討死佐川幸右衛門直清生年六十五歳」と書いてあり到底思ひ止まる模様のない故父子打揃つて出陣することになつた。愈々當日の曉となつて此決死隊が藩主父子の見送りを受け乍ら曉霧の中を肅々と出陣する際は之を見送る城兵や藩士の家族の眼は感激の涙に潤つて居つた。風肅々として易水寒く壯士一度去つて亦返らずとかや。行くものも送るものも無量の感を禁じなかつた。決死隊は曉霧を利用して長州大垣備前の守備區域に突撃し長州も大垣も其銳鋒を支へ兼ね備前の如き彈藥盡きたりと稱し守備區域を捨て潰亂敗走した此警報に接するや土州の諸隊直ちに陣谷干城、伴權太夫、大石彌太郎の三軍監之を監し決死隊の側面に突いて掛り双方共に奮戦死闘官軍の死傷も頗る多かつたが會津方にも戦漸く利あらず佐川

幸右衛門を始めとして戦死するもの頗る多く最初の勢は挫けて遂に退却を始むるに至ると長州大垣の軍も之を潮に亦退いたが土軍は勝に乗つて孤軍突進し會軍顧みて土軍の兵の少なきを知り退却を止めて逆襲に移り幕原の中にて石碑を小楯として激戦數刻或は壕を隔て、廓内より或は土手に沿ひて諏訪の社の林中より我軍を射撃し其槍隊は隙を窺ふて土軍に突撃せんとし土軍は地理には暗らく深追ひはし過ぎたし頗る苦戦に陥り援兵を備前に乞ふも備前は會藩の手並に恐れ逡巡進まず土軍の進退殆んど谷まれる状態であつたが折能く薩州の軍來り援ひ漸くに兵を收めて退却することが出来た。

九月五日薩州土州大垣等の兵は越後街道に向ひ越後方面より進出し來れる黒田清隆、山縣有朋の軍と對峙せる會軍の背後を襲つた。此日の土軍の軍監は片岡健吉、大石彌太郎にて會軍を撃破し白河口の官軍と北陸道の官軍は始めて聯絡することを得るに致つた。

九月十七日會津城外に屯せる敵兵が城内の敵と相應し官軍の隙を伺つて之を挾撃せんとして居たが此日谷干城片岡健吉秋澤清吉等の監せる土佐の軍隊は薩軍と打合せの上東西より挾撃大に之を敗つた敵は胸壁を築き必死となつて防戦せしも結局薩土の猛襲を支へ兼ね總崩れとなつて敗走した。長州の軍隊は戦にこそ加はらなかつたが鯨波を擧げ大鼓を鳴らして盛に薩土の軍に聲援した。

九月二十二日會津城主松平容保城を開らいて降服した。城を枕に討死の覺悟を決せし籠城の男女之を聞いて今更に無限の感に打たれた。其夜秋天碧として拭ふが如く一片の弦月城頭に懸り草叢にすだく蟲の音は降人の腸を斷つかと疑はる山本八重子（新島襄夫人）之を見て感慨の思ひに堪へざりけん箭を取りて城中の白壁に

一一五

明日よりは何處の誰か眺むらん馴れし御城に残る月影  
と一首の歌を書き残した。

### 第二五 土方歳三の戦死

奥羽諸藩の官軍に降服するや大島圭介、土方歳三等は品川を發して松島灣に来れる榎本武揚と仙臺に會し其軍艦に搭して明治元年十月中旬荻の濱出帆渡島に向つた。  
同月二十日渡島の北岸鷺の木に上陸し軍を二手に分ち大島は大野本道より土方は河吸間道より函館に向ひ何れも官軍と小衝突後函館に入り官軍は函館を棄て、内地に退却した。  
榎本等は更に松前を攻むることとなり土方は其主將として二十七日松前に向ひ十一月五日松前城下に迫り軍を二手に分ち一隊は海岸一隊は山手より進み松前城を砲撃して之を陥れ更に逃ぐるを追ふて江差を陥れた。

其後榎本等は投票を以て役割を定め榎本は總裁大島は陸軍奉行土方は陸軍奉行待遇となつた。  
榎本等は徳川家の一人を請ふて島主とし北海を開拓せんと願出たが朝廷は之を許さるのみか海陸兩路函館を攻撃することに決定した。

榎本等も其由を聞くと機先を制して官船を奪取せんと欲し明治二年三月二十日夜荒井郁之助、土方歳三等軍艦回天に乗じ死士數百人回天蟠龍高雄の三艦に分乘し函館を發して南下したが途中暴雨風に遭遇し別れ別れとなり回天一隻丈は同月廿五日米國旗を翻して陸中の宮古灣に侵入敵艦に近ける頃俄に旭旗に變更して敵の甲鐵艦を襲撃した。此甲鐵艦と云ふのは官軍が最近外國より購入せる當時無双の堅艦にて其後東艦と命名され彼の「日清談判破裂して品川乗り出すあづま艦西郷死んだ

もきやつゝの爲め大久保死んだも彼奴の爲め」と語られた其東艦であつた。土方等は味方の軍艦を此東艦に横付にし死士を移乗せしめ艦上の官軍を悉く斬り棄て、仕舞ひ之を奪取する考であつて愈々宮古灣に入るや東艦とあはや衝突せん斗りに近付き死士數人既に東艦に乗り移つたが何分にも艦の構造の相違し高さの違つて居るのと回天一隻にて蟠龍高雄の其場に居ぬ等の爲め東艦の奪取は豫期の如くならず乗り移つたる數名の決死隊は衆寡敵せず悉く悲壯の討死を遂げ回天は灣内に在る官軍の各艦より砲撃せられ瞬く間に艦長初め數多の死傷を生じ遂に灣外に退き函館に返つた。

四月十一日官軍の一隊が渡島西岸の乙部に上陸三道に分かれ函館に向ふや土方は一軍を率いて大野方面大島は木古内方面に向ひ同月十三日土方は大野方面に向へる薩長等の軍と十餘時間に亘る大激戦をやつた。

其後海軍側の連敗し腹背敵を受くるに至れる爲め土方も大野方面を引上げ五稜廓に退いた。五月十三日官軍海陸兩道より五稜廓及び函館を攻撃し幕軍亦必死となつて防戦し彈丸雨飛砲聲雷よりも烈かつたが土方は此時彈に當つて戦死した。

### 第二六 門閥打破の失敗

門閥の打破は云ふ迄も無く勤王討幕黨の一希望一目的で在つた。

土佐に於ては薩長よりも門閥打破に都合の能き史的事情が在つた。

足利の末葉に於ては土佐は安藝氏、本山氏、長曾我部氏始め數多の大小名割據幡多の一條氏國司と稱するも有名無實僅に近郷を領するに過ぎなかつた。長曾我部元親の出づるに及んで群雄を掃蕩し一條氏を豊後に逐ふて土佐の國主となり其子盛親石田三成に與して封を奪るゝや山内氏遠州掛川よ

り移封之に代つた。長曾我部氏の遺臣中山内氏に反感を抱くもの相當に多かつたのか山内氏は土着の者よりも寧ろ掛川以來隨從の舊臣や新たに召抱えたる諸國の浪人を寵用し深尾五藤伊賀の國老を始め百々渡邊福岡後藤板垣孕石等の中老馬廻皆外來移住者の子孫であつた。尤も馬廻及び以下には土着の人々も相當に採用し吉田元吉、谷干城、本山唯一郎、山地元治、岩村通俊の祖先の如き皆土佐土着の人であつた。士格に採用されざる土着の武士や兵卒の子孫は皆輕格であつた。上士の中には知名の士の子孫も相當交つて居た。

子孫 祖先

伊賀男爵 美濃の三人衆

板垣退助 板垣駿河守信形

土屋可成 祖父江道印

吉田元吉 長曾我部の名將吉田備後

谷干城 谷泰山。谷丹内

本山唯一郎 本山梅溪入道

輕格の中には郷士の株を買へる百姓や雜卒の子孫もあつたが土佐名族の子孫も相當交て居た。」

子孫 祖先

中島信行 長曾我部の支族且名將たる窪川城主中島與一兵衛泰重房

黒岩直方 黒岩越前

黒岩涙香 同上

金地嘉正 香美郡岩村郷金地城々主金地十兵衛嘉道

片岡直温 仁淀川上流兩岸の領主片岡左衛門太夫

輕格の中にも斯くの如く上士に劣らざる土着名門の子孫が相當多かつた。

上士の内にも家老中老馬廻小性組留守居組等の階級があり下士の内にも郷士白札等の區別があつた乍然公侯伯子男の差よりも華族非華族の差が大なると同様家老中老馬廻の差よりも上士下士の差が大きかつた。上士ならば馬廻でも留守居組でも同様那奉行になることが出来たが下士が奉行になることは絶対に出来なかつた。

斯る事情は上士に對する下士の反感を挑發し門閥の打破を促進するに好都合であつた。乍然長曾我部氏の滅亡山内氏の入國以來既に數百の星霜を重ね上士に對する下士の反感は依然として存するも外來の國主に對する土着土佐人の被征服的反感は既に消失し居り斯る好個の事情も「殿様に弓を引くとはけしからぬ」と云ふ文句に叶はなかつた。

門閥の打破上下士の反目にかんれんして幕末當時人口にかいしやせる二大悲劇がある。第一の悲劇は井口刃傷事件である。

高知市内に住する上士の山田廣衛、松井繁齊が文久元年三月旭村福井に住む馬廻小野某の長女の初節句に招かれ鱈伏御馳走になつて酔歩蹣跚提燈も燈さず丹中山を越へ井口橋を渡り永福寺の前に差掛るや山田の雨傘が向より來た輕格中平忠一郎の雨傘に突當つた。

「何者なるか。無禮千萬な」

「突き當つたは互の粗惚。夫を咎立するのが無禮でないか」

やり込められて一層怒つた山田廣衛

「やあ無禮なる其一言。愈々以つて捨てゝは置けぬ。こりや我れを誰と思ふ。當時家中に隠れなき山田廣衛を知らないか。何者なるか名乗れ名乗れ」

中平は扱はと驚き輕格の悲しさ名乗りもならず躊躇すると

「名乗らぬ所を見ると輕格だな。近頃輕格は増長して居る。こらしめの爲め斬て棄てん」

と一刀を引ぬき斬つて掛れば中平も最早絶體絶命抜き合はして斬り結んだが彼方は當時高知城下に刺客のほまれ隠れなき山田廣衛何かは以て叶ふ可き胸の邊りを切り下げられあつと云ふ間も無く息はたえた。

中平には宇賀喜久馬と云ふ少年のつれがあつて斬合が始まると中平の兄の池田寅之進の許に注心した。池田が宇賀と共に現場へ駆け付けて見ると山田は刀を洗ふ爲めか水を飲む爲めか水際に身を屈めて居る。其所を後より斬り付け到頭山田と松井を殺して仕舞つた。死骸を其儘にして置いて一先づ家に還つて來ると其跡へ中須賀に住む上士の長屋重名と諏訪重中が通り掛り死體を見て調らべて見ると二人は知り合の山田廣衛と松井繁齊一人は名前を知らぬ男である。二人は急いで其由を知人に知らせ再び現場に馳せ付けて見ると池田等が中平の死骸を背負ふて其場を立去る所であつた。夫れで池田が山田を殺したことが明白になつた。

山田の弟次郎八は之を聞いて大に憤り

「輕格の身にて我兄を殺せしは無禮千萬」

と上士の面々を呼び集め池田を呼寄せて手打にせんか但しは一同池田方へ押寄せんかと色々評議を

凝して居ると此事家中一般の評判となつた。斯くと聞いて輕格の面々も

「池田を手打にさせてなるものか」

と池田方へ馳せ集つた。山田の使が池田へ來ると坂本龍馬が出て應對した。使が

「池田を貰ひに來た」

と云ふと坂本が

「池田は切腹した」

と答へ

「然らば其屍骸を見せよ」

と押し返すと

「檢視の役人は別にある。貴殿は當方の答を山田に傳ふれば宜いでないか」

とやり返し使が止むなく歸つた後で池田は從容として腹を切つた。汗血千里之駒の記事によると此時坂本龍馬は池田のりんりたる血潮に刀の下げ緒を浸たし衆に示して

「池田の死は無駄で無い。彼は我國輕格の士の爲め萬丈の氣を吐き意を強せしめたのだ。諸君

亦姑息に流るゝ勿れ」

と云ふた由である。

中平と同行の宇賀喜久馬も亦切腹した。宇賀の死狀に關して其姪伊野部幸子(理學博士寺田寅彦姉)に問合せた處左の返事があつた故其全文を左に記載する。

家は小高坂西町車瀬を少し東へ行た處南側〇〇の西隣り今も其儘誰か居ります。年は十九歳名

はきく馬多分喜久馬と書くと思ひます。幡多郡へ何か役目にて参り居り三月節句に歸り居り友達の子供の初節句へ池田さん(中平のこと)と一所に参り歸りのことで御座います。

別役伯母(喜久馬の實姉)宇賀伯母(喜久馬の兄の妻)から聞きました。其時の士は二派(輕格と士格)に分かれて居たそを以て派遣の人(輕格が士格を斬る)を切りましたから向から大變の掛合で坂本さん(坂本龍馬)も大變御心配になり何卒して切腹させん様に色々御世話になり玄關へは向から絶へず人が来て早く切らせ切らせと迫りますから外同志の人と裏の倉の脇の芝の上で御相談被成た由つまりもう仕方が無いと言坂本さん言はれ叔父さんに言聞かせ被成た時の坂本さん外御一同の心持今も見様なと申しました。

其朝事が極まると庭から座敷名残りに見廻り何の於菜も無かつたに心能く食事をして皆に暇告げ落付めて切腹した由其時私の祖母これは一宮の政岡から来て居りましたが大變たけの高い實にをとなしい誰でもなつく様な人でした。祖父は酒呑みで常は我儘者でしたが其時は大變弱り座に居たゞまれざつた由ですが祖母は叔父が切腹の座に着くと側へ行き必らず未練を残さず落付いて死ね卑怯な死様をすなと言聞かせて涙一滴こぼさつたとこれは確かに聞きました。坂本さん初め同志の人からほめられたさうです。叔父も立派な人で御座いました由皆から惜まれ坂本さんも惜しいことをしたと涙を流されたさうです。

父(喜久馬の介錯は幸子の父寺田利正がした)は介錯に心臓を突いたと聞きました其時は皆嗜んで居りましたが祖母は其後胸痛になり別役伯母は大變腹を下しました。

墓は奥福井にあります。兄は眞之助と言ひ次男は私の父三男が喜久馬です。別役伯母は二番で

した。

切腹した短刀とじゆばんとが私が伊野部へ来た後出て來ましたが何處か御寺へでも納めましたものか其後見へません。

昨夜別役へ参り姉(安岡覺之助従弟未亡人)と話し合いましたが父や伯母から聞きましたのはこれ位しか覺えませぬ。

第二の悲劇は青蓮院宮令旨事件である。

文久二年滄浪間崎哲馬が容堂の命を受けて江戸より歸國の途中京都にて隈山平井收次郎に遇て

「土佐も門ばつの打破をやり輕格も士格と同様要職に据えることにせねばならぬ。就ては青蓮院宮より門ばつに拘はらず人材を用ゆる様の令旨を申受け藩廳に差出し度いと思ふが君は如何思ふか」

「夫れはよからう」

兩人相談の上廣瀬健太と三人同道青蓮院宮に謁し令旨を申受け滄浪歸國後土佐藩廳に差出したが之が爲めかへつて藩廳の怒りを招き切腹を命ぜらるゝことゝとなつた。

滄浪は詩が巧みであつたが隈山も亦詩や歌が上手であつた。愈京都より土佐に送還さるゝことゝなり肥後の宮部鼎藏等來りて別れを叙するや

欲去歎恨滿胸 孤舟何處接談鋒 今朝一別終難遇 無限煙波思萬里

山城の國境を出づる際遙かに石清水の神社を拜して

死なん身の今は何をか石清水清き心は神ぞ知るらむ

櫻井の驛は彼方にありと聞きて

色も香も其枝乍ら残しけむ芳野に匂ふ櫻井の花

舞子の濱を過ぎて

ゆうざればあまのたく火のかつ見えて煙に消ゆる淡路しまやま

浦傳ひ磯打波の夜はなを打返しつゝ思ふ頃かな

讃州丸龜に渡海し土豫國境の山脈を越ゆるとて

谷渡り山越え幾日過すらむ如何に險しき世の習とて

滄浪も亦未だ幼き一女の行末を案じて

もる人の在るか無きかは白露の置き別れにし撫子の花

愈最後の日となつて隈山従容短刀を取り腹に「ざつく」と突立て續いて介錯人が刀を其首に下だす

や隈山は血に染まつた儘振り返つて

「まだまだ」

と叫び二度び斬ると漸く絶息した。滄浪は獄吏の出せる酒を滿引し絶命の詩を書して屠腹した。廣瀬健太の最期は殊に立派であつた。屠腹の際は先づ刀尖を浅く左腹の下部に突き立てきり、と右の腹へ一文字に廻はし刀尖を斜に刎揚げ其餘勢にて一と思ひに右の乳の下なる急處を刺さば腸を破らす血の出ることも少なく衣服を多く汚さずして見ごと絶息すると常に云ふて居たが切腹の際果して之を實行し殆んど介錯を要せぬ位見事なる最期を遂げた。平井時に年二十九間崎は三十廣瀬は二十八何れも惜しむ可き人物で在つた。

門ばつを打破せんとせば宮の令旨を奉じて藩廳に突き付ける位な生温いことではとても駄目だ。清岡道之助の提唱せる如き果斷の處置に出づる必要があつた。所が武市も大石も樋口も「殿様に弓を引くとは怪しからぬ」の非難を蒙るを好まなかつた。干戈に訴へて保守的藩廳を叩き潰すてふ非常手段に出なかつた。滄浪隈山先づ斃れ瑞山次て刑せらるゝも古澤滋が

昨日殺一人。 今日殺一士。 君家一口屬鎌劔。 忍使忠臣相逐死。 忠臣死美人驕。

姑蘇臺上月輪高。 君王沈醉深宮裡。 胥山秋冷泣風濤。

の詩を賦して之を嘆するに過ぎなかつた。

薩長に於ては内亂や外患の突發續發によつて門閥の打破を速成した。九門の戦や長州征伐や俗論黨との戦や外艦の砲撃や英艦の襲來は薩長の門閥打破を促成した。土佐は階級打破の刺戟劑となる可き斯る國難否な藩難に遭遇しなかつた。

門閥打破に都合の能き史的事情はあり乍ら門閥打破は土佐に於て失敗した。討幕の愈逼迫するや「在藩瑞山派も上下士の反目は一先づ中止し板垣を助けて討幕軍に加はるがよい」と云ふ坂本中岡の意見であつた。此意見は行はれたが出陣の際板垣系上士は隊長として之を指揮し武市系下士は兵卒として其指揮を受けた。二十四歳の北村重頼や十九歳の眞邊戒作が隊長の任に當り三十八歳の池知退藏や四十二歳の大石俐右衛門が徒軍監として其下に付いた。未だ二十臺の片岡健吉や高屋長祥は家柄のよき爲め大監察となり四十歳の大石彌太郎や三十歳の秋澤清吉は成上り上士なるが故に小監察であつた。大政返上献白の任に當れる後藤、寺村、福岡、神山云ふ迄もなく皆上士であつた。岩倉も西郷も大久保も武市殘黨よりは山内容堂を重視し其信任せる板垣、後藤を優遇した。其結果薩

長にては出身の士格たると輕格たるを論せず手腕如何によりて最初より當時の大員級たる參議や卿や大輔及び之に次げる少輔の地位に就くを得たるも土佐人にて斯る要路に立てるものは悉く上士であつた。但し土佐を脱藩し三條公や長州人に親しみ其引立を受けたる土方久元田中光顯等は此限りでなかつた。

斯る要路に立てる土佐人は

- 板垣 退助 後藤 象次郎 佐々木 高行 齋藤 利行 福岡 孝悌
- 一段下て

谷 干城 土方 久元 田中 光顯

にて脱藩の土方、田中以外は悉く上士出身であつた。  
明治三年末頃の顔振れによれば中央政府にては其下に

第一、上士出身

神山 群廉 毛利 恭助 林 龜吉 本山 唯一郎 吉井 源馬

(附記) 神山は最初地位高かりしも後は左程にあらぬ故茲に記入す。

第二、英學者

細川 潤次郎

第三、宿毛系(大部分上士)

岩村 通俊 岩村 高俊 竹内 綱 大江 卓 小野 義真

第四、在藩瑞山系下士出身

安岡 良亮 北代 正臣 島本 仲道 河野 敏録 小畑 美稻

尾崎 忠治

第五、脱藩瑞山系下士出身

清岡 公張 中島 信行 岡内 重俊 長岡謙吉(死) 南部 斐男

片岡 利和 石田 英吉 黒岩 直方 平川 光仲

第六、下士出身

岡本 健三郎

海援隊の面々と共に寫眞を取て居るも脱藩にも非らざる模様、履歴不明故別記

等士佐にては

一、政治方面

片岡 健吉 寺村 左膳 林 有造 大脇 順若 伴 權太夫

谷 重喜

二、軍事方面

山地 元治 八木 礪作 北村 重頼 長屋 重名 吉松 秀枝

秋澤 清吉 山田平左衛門 別役 成義 島地 正存 坂井 重季

大石 彌太郎 土屋 可成

等が居た。中央に出仕せる神山以下の面々には概子佐官乃至大尉であつた。板垣は土佐の大參事に  
もなれば中央にも出仕した。

門閥の打破に失敗したとは云へ徹底的に失敗した譯ではなかつた。門閥尊重の舊風は土佐人間に於ても世の趨勢に應じて或程度迄は自ら寛和され「輕格出身者は一流の地位に登れなかつた少輔以上の地位を上士出身者に占められた」と云ふ迄の話に過ぎなかつた。大丞以下の第二流の地位に於ては上士の林龜吉、岩村通俊等と下士の安岡良亮、北代正臣等と同等の地位に立つ事が出来た。乍然土佐に於ては門閥尊重の弊が中央よりも一層甚しく第一流の板垣の下に片岡、山地等が第二位を占め大石、秋澤等は更に其下に第三位として吉松、山田、谷重喜等と同等の地位を占むるに過ぎなかつた。時勢の變遷に伴ふて郷土や白札の家に生れたる大石秋澤も馬廻の家に生れたる坂井等と對等の地位を占むるを得るに至れるも半大隊長たりし片岡や土佐武人の花と譚はれし山地と對等の地位を占むる程の出世は從來の因襲が之を許さなかつた。

大石彌太郎、安岡亮太郎、秋澤清吉、島本仲道、は維新後殘存せる在藩瑞山黨第一流の人物（樋口眞吉島村壽之助は隱居格）であつた。秋澤清吉は東征以前に於ては第二流の人物なりしも東征の殊勳により一躍して一流の人物となつた。凱旋後新馬廻に列し百五十石を賜り其行賞は大石と同一であつた。

上 士  
齋藤利行 四七

下 士  
武市半兵太 四〇

佐々木高行	三九	坂本龍馬	三四
後藤象次郎	三一	中岡慎太郎	三一
福岡孝悌	三四	間崎哲馬	三五
岩村通俊	二九	平井收次郎	三四
竹内綱	三〇	島本仲道	三六
林有造	二七	河野敏鎌	二五
板垣退助	三二	小畑美稻	四〇
谷干城	三二	尾崎忠治	三八
片岡健吉	二六	土方久元	三六
山地元治	二七	安岡亮太郎	四四
北村重頼	二四	大石彌太郎	四〇
長屋重名	二五	安岡覺之助	三四
山田平左衛門	二四	秋澤清吉	三〇
坂井重李	二五	池知退藏	三八
吉松秀枝	二四	田邊豪次郎	二九
谷重喜	二六	森田金三郎	三四
眞邊戒作	一九	上田楠次	三二
池田應助	二〇	森新太郎	三九



暗闘と軋轢はあるが如くなきが如く茫漠として捕捉し難きものである。維新當時に於ても種々の暗闘軋轢があつたと傳へられて居る。果して斯る暗闘軋轢があつたかないか判らないが兎に角世に傳つて居る儘を左に列記する。

(暗一) 岩倉具視は薩長の勢力を削き自己中心の政府を造らんとして居た。岩倉は西郷、木戸を疎外し大久保を寵用した。

(暗二) 大村益次郎は西郷等を第二の足利尊氏視し早晚之を打たねばならぬと考へて居つた。第二次戦として薩長の戦が始まると云ふ考を抱くものもあつた。

(暗三) 長州は討幕運動の發頭人たるも明治三四年頃には其形勢は割合に振はず木戸は大久保程岩倉に好遇されず井上は江藤等の彈劾する所となつて官職を失つた。反之佐賀は討幕の功績割合に少なきに拘らず江藤、副島、大木、大隈相並んで廟堂に立ち勢力を振て居つた。江藤新平は薩の西郷土の板垣等と結んで長州を排斥せんとする陰謀を抱ひて居た。

(暗四) 大村益次郎の暗殺さるゝや薩人中には西郷の従弟大山綱良を其後任に推さんとするものもあつたが西郷は薩長連合の精神に顧みて斷乎として之を斥け前原一誠を推薦した。其後近衛に於ても桐野利秋、篠原國幹等と山縣有朋等と軋轢し桐野等は徹底的に山縣等を排斥せんとせしるも西郷の救解により山縣は漸く兵部大輔の地位を保つことが出来た。

(暗五) 長州内部に於ても木戸、伊藤、井上、山縣等は廣澤、前原等並に木梨等と不和であつた

(暗六) 所謂割腹抵當討幕軍は吉田系武斷派の板垣退助、小笠原唯八、小南系に近き谷干城、武市系の大石彌太郎等の寄合であつた。谷等も大石等も出征以前に於ては板垣と左程の親交が無かつた。最初より板垣と親しきは矢張り後藤等であつた。板垣の凱旋して外に於ては朝廷の覺え目出度く内に於ては土佐の實權を握るや其冒險的討幕運動の加擔者よりも之に加擔せざりし人々が却て板垣に近づき谷大石等よりも板垣、後藤双方に親しき人々や討幕運動無關係の面々が却て板垣に親しむ傾向も多少ないとも云へなかつた。明治三年谷干城が土佐藩政を改革し財政の緊縮を計らんとするや板垣退助、後藤象次郎東京より土佐に歸りて之に反對し何人か板垣を使喚せるものか板垣の谷を憤る甚しく谷は藩廳より放逐さるゝに至つた。板垣は谷を永久に葬る考であつたが山地元治、北村重頼等谷に同情し再び谷を土佐軍部に引入れた。爾來板垣と谷の關係は從來の如くならず山地、北村、吉松等も亦漸次板垣と離るゝに至つた。

明治四年二月薩長土の三藩より親兵を徴し薩は桐野利秋、篠原國幹、野津鎮雄、種田政明土は山地元治、八木家茂(長州不明)大隊長として兵を卒ひて上京し同年七月山縣有朋兵部少輔より大輔に進み同月未左記土佐出身陸軍士官の任命を見た。

大佐二人 谷 干城 谷 重喜  
少佐五人 山地 元治 北村 重頼 土屋 可成 長屋 重名

八木家茂(砲作)

中村重遠も其頃少佐相當官に任命され居るがこれは任命月日も推薦者も不明  
大尉數人 吉松 秀枝 坂井 重季 秋澤清吉(砲兵) 別役成義(工兵)

同時に大佐相當官たりし高屋長祥が侍從に轉任(後再び武官)した。右の外に楠目正幹、片岡利和田中光顯等も一時武官となつたがこれは土佐以外の推擧に出たものと推測せらる。此任命に關して筆者は左の疑を以て居る。

(疑一)討幕の功績を比較すると土佐は薩長に比して遜色がある。戊辰の戰に於ける士の出兵は二千七百餘人薩は七千三百餘人であつた。乍然維新當時に於ては天下の形勢は刻々に變化した明治三四年頃西郷が親兵の設置を主張し大久保、木戸、板垣の之に同意せる當時の精神は疑も無く三藩對等であつた。過去の如何に拘らず三藩對等の精神を持つて居つた。此事實は四藩より參議一人宛を置き西郷、木戸、板垣、大隈を之に任命したに徴しても明である。其兵數を見ても左の通り對等であつた。

薩 步四大隊 砲二隊

長 步三大隊

土 步二大隊 砲二隊 騎一中隊 工一中隊

然るに薩よりは桐野、篠原、野津、種田、西郷、大山。長よりは山田、鳥尾、三浦、三好が少將大佐に任せられ山縣、黒田、川村亦多少の時日を有するとは云へ中將に任せられ居るに拘らず土佐出身士官は叙上の通りにて其權衡が取れざること。戊辰戰當時薩長は參謀等の名義を有せるもの多く土佐は斯る名義を帯ぶるもの少かりしとは云へ親兵設置當時の精神に徴して兎角權衡の取れざること。

(疑二)片岡健吉は明治六年歐洲より歸朝後海軍中佐に任せられた。當時山地、北村、土屋等皆陸軍中佐に昇進し居し故結局片岡も明治四年少佐に任命されたと同一の結果を生じた。割腹抵當討幕軍の大隊長たりし板垣が大臣級の參議となり其左右の副長たりし片岡、土屋等が少佐に  
なるとは餘りに懸隔の多過ぎること。

(疑三)土佐武官は土佐文官に比較して地位が低過ぎること。一面に於て長州の鳥尾三浦等と品川等を比較し一面に於て土佐の武官と文官を比較して見ると土佐武官の地位は土佐文官の地位より低過ぎること。

(疑四)當時薩土に於ては第一流の人物を親兵大隊長に任命せることは當時の書籍に照らして明かである。其親兵大隊長たる山地元治、八木家茂が少佐とは低きに失するの嫌あること。

(疑五)片岡、土屋、山地、北村と谷重喜を比較するに。

(イ) 維新前北村片岡土屋は馬廻なるも重喜干城は小姓組(馬廻の谷は家が違ふ)なること

(ロ) 東征當時の地位を考ふるに片岡、土屋は副大隊長である。山地、北村は小隊長でこそあれ土佐軍人の花と諡れて其名聲頗る高く谷は小隊長にて山地、北村と同等又戰場にて負傷せしこともあるも其名聲は山地、北村に及はざりしこと。

(ハ) 片岡、山地、北村は凱旋後感狀を賜はれるも谷は感狀を賜はらざりしこと。

(ニ) 大東義徹は谷重喜を讚して坂本龍馬死後の土佐人物と云へるもこれは大東一個の私見にて到底同意することが出来ない。筆者の見るところには谷も相當の人物且つ人格の高き人乍ら武勇に於ては矢張り山地、人物としては矢張り片岡を推す可きこと。

(ホ) 明治四年片岡は高知縣權大參事、谷は同權少參事、山地、八木は親兵大隊長たりしこと比較の結果如右に拘らず明治四年八月山地が少佐谷が大佐明治六年片岡が中佐に任せられしは不可解なること。

(疑六) 白河の板垣軍は土佐の本隊(多數)北越の深尾軍は其支隊(少數)である。凱旋後感状を貰つたものは板垣、谷(干)、片岡、山地、北村にて北越は一人もない。然るに板垣を參謀とせる白河軍より土屋、山地、北村、山縣を參謀とせる北越軍より長屋、八木、中村と同數の少佐を出せるも奇妙である。

又谷干城遺稿を見るに左の如き記事が載つて居る。

(記一) 薩の兵は云々長は云々土は云々にて土は薩長に比し割合多數なれば今一大隊を減却す可しと山縣大輔より示談あり余は又此減兵の事に従事したり余己に命を奉し朝官を奉せし以上は命令の在る所に従ふの決心なりしが從來余に快よからざる土佐人は此減兵のことを以て土佐の勢を減するものとし余に満さる人も亦不少、然れども山地北村は實に余と同心一體にて余を助けくれたれば此減兵のことも都合能く成就し云々(上卷二二八頁)

(記二) 山縣太輔に勤王家の最先輩たる小南の登用を懇望せり山縣も尤に閉入余が歸國の時小南の内意を探る事に約したり、余出發に臨み山縣より離杯として兩國中村樓に招かれ只兩人にて酒宴を開きたり當時の習慣として藝妓四五人來れり然るに當時著名の常吉なる名妓來らず何故に來らずやと問へば井上さんに行きたりとの事なり此時井上は中村屋の向ひ岸の處に住居し至て近し即ち山縣曰小南君擧用のことは井上にも咄し共に盡力せば好都合なりとて常吉諸共來

る可しと申送り井上は直に來り三人にて相酌む談偶土佐財政に及び余も先年の失敗談を述べたるが(中略)此時三人鼎坐の席の唐紙を開き窺ひしものあり即ち岡本健三郎なり彼は連敷襖を閉ぢ身を隠したり(中略)土佐より歸京するや山地北村眞先に來り顔色を變し余を詰責して曰く足下は出足前兩國中村屋にて井上山縣と相會し土佐の悪事を密告し十八ヶ條の秘事は山縣へ差出したとて板垣參議頗る怒り若し速に谷を退けすんば自ら職を辭す可し決して谷と兩立する能はずとの事に政府も頗る動搖せり板垣へ告發せしは岡本健三郎なり我等兩人は板垣に論し谷が歸る迄は免官の事は暫らく待たれよ谷歸りて實に斯ることありせば我等兩人にて谷に割腹せしむ可しとて足下の歸りを待てり(これより兩人の納得する様辯解したことが書いてあるも略す)山地北村は余の辯解を聞いて大いに悦び直に去て板垣に行き右の次第を述べ全く健三郎の不埒なれば健三郎に迫り割腹さす可しと嚴談したれば板垣も大に弱り遂に自ら仲裁の地位に立ち山地、北村をなだめ(中略)板垣は余が小南を推舉せしことに付き頗る疑ふ所あるが如く以來益々離隔云々(上卷二二二頁)

筆者は前述の疑問を解決する爲め叙上の暗闘や叙上の記事と綜合して試みに左の想像を下して見た(想一) 板垣は谷と不和となれるのみならず戦は當分無いと信じ(明治二年三年は第二戦を恐れて隊長軍監を土佐に止め四年は最早戦は無しと見切を付ける)土佐の勢力を軍部に扶殖する考を持たなかつた。山地、北村が積極的土屋が消極的に自己より谷に親しきに餘り好感を持たなかつた。小南の實子八木家茂に對しても矢張り同様であつた。從て軍部に容喙し此面々の地位の向上に奔走しなかつた。

後藤、板垣、片岡の中島町片岡の生家は相去る僅に二三町何れも同じ馬廻格にて板垣も後藤も少時より片岡を可愛がつた。乍然片岡は明治四年洋行を命ぜられて其時は軍部に入らなかつた(想二) 江藤等の薩土肥聯合長州排斥の陰謀は暫らく別問題とするも兎に角薩土軍人の進出は長州殊に軍務當局者たる山縣に取て一大脅威であつた。板垣對山地北村等の内情を知らざる山縣は板垣系武官を薩の別働隊視し薩に對して齒の立たぬ長は隙さへあらば其別働隊たる土の勢力を挫かんと考へて居た。夫れが長としての自己擁護の正當手段であつた。薩の桐野等は斯る問題を意に介しなかつた。自己の優越を自負して土佐を頼りにするとか別働隊として之を擁護するとか云ふことは全然念頭になかつた。

(想三) 漢學者にして家名を重んずる谷干城は養子乙猪の兄にして宗家の嫡流たる谷重喜を始めから終り迄可愛がつた。重喜の引立を山縣に依頼した。板垣と干城の不和を薄々知つて居た山縣は二つ返事で之を引受けた。特別の關係を有する重喜は他日干城と全然同一の行動を取るもの山地、北村は谷自身の觀察如何に拘らず板垣に付くか干城に付くか判らぬものと山縣は想像した。神ならぬ山縣は其觀察の誤れるに氣が付かなかつた。

(想四) 山地は曲かつた事を承知せぬも自己の出世などには至て謙遜な人であつた。北村は山地次第土屋は無頓着であつた。陛下の命により重喜は大佐山地は少佐と云へば何れも之に對して不滿を唱ふる様な人物と違て居つた。

(想五) 親兵は薩の發起薩土は第一流の人物を之に配置した。乍然長州は親兵を重大視せず第一流の人物は大村が兵部大輔たりし當時中央に出仕した。

筆者は叙上の事情が明治四年七月の辭令の原因となつたものと假りに想像して見た。乍然此想像の當れるや否やを決す可き證據物件を探して見ると

(決一) 成程少將大佐の叙任を見ると上述の如き想像も生ずるが更に中少佐の叙任を調べて見るとどうも此想像を斷定確認することが出来ない。調査不充分の爲め確かな結論も出来ぬが明治四年八月頃に於ては國司順正も福原實も堀江芳介も少佐滋野清彦は大尉にて中佐かも知れぬのは福原和勝品川氏章丈である。此點より考ふれば長が故意に土を抑へたと云ふ想像は直ちに之を斷定確認することが出来ない。

(決二) 又板垣に關する問題も不明である。

乍然土佐武官が文官に比して左の如き不利益の地位にありしや殆ど疑がないと思れる。

(損一) 文官は明治二年頃より出仕し明治四年八月迄に昇級せしも武官は遅く就官した。

(備考) 土佐の首動者は王政復古献白者たる後藤象次郎、福岡孝悌、神山群廉の三人及び割腹抵當軍將校であつた。割腹抵當軍將校中には文官適任者も相當に多かつた。谷干城、片岡健吉、安岡亮太郎、大石彌太郎、秋澤清吉、平尾喜壽、西山志澄、島地正存、別役成義、今村長賀皆左様であつた。

未だ基礎の定まらざる秩序の整はざる際中央政府に出仕せるものは基礎の定まり秩序の整へる後出仕せるものよりも好地位に就くことが出来た。語を換へて言へば所謂「早いが勝」であつた。

若し割腹抵當軍幹部が明治二年頃悉く中央政府に出仕し土佐第一の勢力者たる板垣退助が其就

職を幹旋し文官適任者は文官に武官適任者は武官に之を任命せんとせば天下能く之を拒むものなく文武に兩分せる爲め何れも相當の地位に就くことが出来るかも知れなかつた。

然るに土佐は

(イ) 西郷隆盛が鹿兒島大參事伊地知正治が權大參事として薩摩に留まり桐野、篠原、野津等も薩摩に留まり世はどう云ふ風に推移するやら再び戰爭の起るやら見定め付かぬ爲めか將た

(ロ) 他の理由の爲めか

戰爭中隊長軍監(安岡亮太郎は佐々木高行幡多郡奉行たりし時よりの知人にて佐々木に懇望され早く中央出仕)たりし人はなる可く文官武官として藩に止めんとせし模様(?)にて其結果明治四年初迄谷も片岡も山地も北村も秋澤も伴も土佐に止まり四年春に至りて山地、北村等は親兵を卒めて始めて上京片岡は洋行同年秋に至りて山地、北村等は始めて少佐に就任することとなつた。

反之脱藩者や戰に加らず藩にて重視せざりし人々は早く競ふて中央政府に出仕を求め結局從軍將校中の文官適任者の占め得可かりし地位迄も此等の徒に占められたる嫌ひがないとも云へない。此等の人々は「早い者勝」の時代に早く官職に就き其後昇級もせし爲め東征に從軍して功勞を立て土藩に重視されたるものが却て從軍せざりし人の下に就く如き現象を呈するに至つた文官にても永く土佐に居し林有造の如きは明治六年十一月少佐相當の外務省六等出仕に過ぎなかつた。

(損二) 長が故意に土を抑へたと云ふ想像は容易に之を斷定確認し難きも板垣總督の左右の副

たりし片岡、土屋土佐軍人の花と諺はれし山地北村の地位の低きに失せる疑は依然ある。土佐側の努力次第にて今少しく好地位に進めたかと思はれる。現に三浦梧樓は北越戰爭當時七十人位の兵を卒ゆる小隊長に過ぎざりしも大佐となれるを見れば安塚戰の總帥たりし土屋が大佐となるも不可能でなかつたと思はれる。福原和勝も三浦と同じく小隊長であつた。

(損三) 板垣の甥高屋長祥谷の宗族谷重喜小南の實子八木家茂は何れも戰(高屋は後援軍八木は北越軍)に臨める維新の功勞者であり且つ相當の人物であつた。乍然板垣谷小南と云ふ「バツク」も確かに付いて居た。此「バツク」付きであることが幾分か無「バツク」の人よりも高屋等を有利ならしめ無「バツク」殊勳者に代つて有利の地位を占めたかも知れぬ。

(損四) 軍人は昇進が遅かつた。土佐の陸軍士官は殊に遅く四年八月より六年十一月迄に一級以上昇進した人は一人もなかつた。反之文官の昇進は頗る早かつた。一例を擧げんに島本仲道の昇進は左の通りであつた。

四年八月二十八日司法大解部

四年十月廿四日司法少判事

四年十一月十三日司法權中判事

五年五月廿九日司法少丞

五年六月十四日司法大丞

六年四月二十三日三等出仕警保頭

(附記) 當時の官制は屢々變つたが比較的理想的と云ふ可き明治六年の官制を参考の爲め左に

抄出する。

官等	軍人	司法官	司法省	地方官
一等	大將	大判事	司法官	
二等	中將	權大判事	同大輔	
三等	少將	中判事	少 丞	
四等	大佐	權中判事	大 丞	縣令
五等	中佐	少判事	少 丞	權令
六等	少佐	權少判事		參事
七等	大尉	大解部		權參事
八等	中尉			
九等	少尉			
十等				

維新功勞により華族に列せられたる土佐出身者は右の通りである。

第一上士出身八人

板垣 退助 谷 干城

但し阪井は日露戦功による)

(右三人大政返上關係者)

第二宿毛上士出身二人

山地 元治 阪井 重季(右四人東征從軍者)  
 後藤 象次郎 福岡 孝悌 神山 群廉  
 佐々木 高行

岩村 通俊 岩村 高俊

第三英學者一人

細川 潤次郎

第四脱藩瑞山系下士九人

土方 久元 清岡 公張

岡内 重俊 石田 英吉

六人海陸援隊)

第五在藩瑞山系下士三人

河野 敏録 尾崎 忠治

小畑 美稻

右の内第五の三人及び清岡、岩村、南部、岡内、野村、細川は何れも司法省に永久又は一時出仕した。司法省にては佐々木高行、福岡孝悌、齋藤利行、細川潤次郎等引續ぎ大輔の地位を占め江藤新平亦土佐人に親しみ土佐人を引立てたる爲め土佐人の昇進や頗る早く土佐の司法省と稱された。

秋澤清吉は「門閥關係を加味せる藩の軍隊が其儘親兵隊となり其親兵隊の士官が其地位に應じて陸軍將校となれる」と「山地等の地位の低きに伴ふて秋澤等の地位も低かりし」爲め其官職や大尉に過ぎず加ふるに「大尉任官後兎角病氣缺勤勝なりし」と「皇居の火事に不參」の爲め其昇級も後れたるが其後辭職した。辭職の原因は眞正の病氣であつた。大尉の地位にも不満であつたが辭職當時病氣であつたことも事實である。

一五二  
割腹抵當軍の土佐や京都を發する際瑞山系の志士は競ふて從軍を希望した。明治元年二月八日付京都土方久元(三條公に從つて東下未定なりしか)と思はるゝ左の書面が現存して居る。

今尙寒氣甚敷御坐候處愈御清穆奉賀上候然者過日申上置候小生東行の一條は如何御周旋被成下候哉既に明後日御隊中は出陣と申事に而切迫至極に相成族へ共未だ何の御沙汰も無之甚不平の次第に御坐候何分御盡力奉希上候右得貴意度迄草々百拜

二月八日

清吉様 侍史

楠 左衛門

二白今日は昇堂色々得貴意度筋御坐候處様々多事に而不能其議候此度の東行に乾氏(板垣)小南氏兩氏共出拂候而は當地之處至極懸念に御坐候如何御賢考被成候や亦御密議の上御盡力奉希上候百拜

板垣參謀に頼んでくれとの手紙と見える。「甚だ不平」が大笑ひだ。

### 第二八 岩倉右大臣の遭難

甲府の爭奪や勝沼の戦の際偵察や傳令の任に當つたのは美正貫一郎、武市熊吉、別役成義、西山志澄、上田楠次等何れも拔群の人物であつた。其中でも武市熊吉の偵察は大膽不敵の振舞として當時軍中に有名であつた。

明治元年三月四日土佐因州高島前哨三隊の甲府に入るや近藤勇の卒ゆる軍隊が間近迄來て居るとの噂を聞き其虚實を探ぐる爲め三藩各兩三名の斥候を出した。他の斥候は何れも中途より引返へしたが武市一人は途中早籠を履ひ「ヤーホイ」と調子を取らせ勝沼指して進んで行つた。勝沼に近くと

果して數人の武士が向からやつて來た。武市は之を見て籠の中で狸寝入を始め其前を通り過きんとすると其内の頭首と思はるゝ人が大喝一聲

「何者なるか。待て」

と叫んだ。武市は籠の中で大欠伸をし乍ら聲を荒らげて

「自分の名を乗らずに人の名を聞かんとするは無禮千萬でないか」

とやり返した。相手の武士は其勢に膽を吞まれ形を改めて

「某は幕府の武士。鎮撫の爲め甲府に參る途中で御坐る。御尊名を承り度う」

と丁寧尋ねると武市も面を和けて

「左様で御座るか。某は高島藩士。主人江戸を發して歸國に付き出迎の爲め參るもので御坐る

と慇懃に答へた。互に禮を替して別れると武市は勝沼驛前にて籠を乗り棄て旅館に飛び込み竊に亭主を招いて

「俺は官軍の斥候である。幕府方へ突き出すなら突き出せ。官軍の爲めに盡してくれる考なら

盡してくれ」

と高飛車に出た。亭主膽を潰し

「幕府方へ突き出すなどんでもないことで御坐います」

と恐れ入つた。夫れで武市は敵の模様を詳細に聞糺し其兵數等を取調べ左の山より石和を経て甲府に歸つた。

土佐の本軍が今市にて幕軍と對陣中武市は板垣總督の命を受けて同僚と共に上野彰義隊征討の模

様を探りに行つた。古河迄来て或旅館に迫り込んだ所隣りの室に二三人の武士の話聲が聞える。武市は

一五四

「これは妙だ。一つ飛込んで隣の武士に聞いて見よ。味方であつたら探索の手蔓を得るし敵であつたら斬るか斬らるゝ迄の話。一つ當つて見よを。」

と同僚に相談の上驀然唐紙を開いて躍り込み

「貴下方は何れの藩か」

と叫ぶと隣の武士は大に驚いたが武市の徽章を見て官軍と察し

「某等は相馬藩士唯今江戸より歸國の途中素より官軍で御座る」

と答へた。そこで武市は態度を改めて無禮を謝し上野の戦況を質し詳かに其状況を聞いて今市に歸つて報告した。

武市は明治四年十二月大政官に出仕し征韓論の起るや外務省十等出仕に轉して池上四郎と共に滿洲に出張し其地の状況を視察した。征韓論は愈斷行と決定し近衛の將校連は日夜劔を撫して渡韓の命令を今か今かと待つて居つた。所へ遣外大使の岩倉大久保木戸が歸朝して之に反對し其結果征韓論は中止となり西郷、板垣等五參議は訣を連らねて辭職した。之を聞ける薩土の近衛將校は失望且つ激昂した。

飲馬綠江果何日

一朝事去壯圖差

此間誰解英雄恨

袖手春風咏落花

其局に當つて遠く滿洲に使せる武市は一層失望激昂した。失望と激昂の極武市は左の同志と共に岩倉右大臣の暗殺を企てた。

武市 喜久萬(弟)

山崎 則雄

島崎 直方

下村 義明(少尉)

岩田 正彦(曹長)

中山 泰道(曹長)

中西 茂樹

澤田 悅彌太

愈暗殺と決するや絶えず岩倉の動靜を探り日々午後五時より築地の武市喜久萬方に會合して互に探偵の結果を報告し且つ將來執る可き方法を打合せて居つた。明治七年一月十四日中西茂樹が喜久萬方に來て

「岩倉の馬車を見掛けた故人力車を雇つて馬車を追ひ駆け參内するのを見届けて來た」と云ふや同志の面々は夫れと斗り二路に別れて直ちに喰違に向つた。

喰違にて岩倉の退出を俟て居ると一輛の人力車が紀國坂を上り四谷に向つて疾走する故岩倉かも知れぬと中山泰道、山崎則雄の二人が直に追掛けた。其跡へ二頭曳の馬車が現はれて喰違に近いた。これぞ岩倉右大臣が赤坂假皇居を出て霞が關の自宅に歸る途中時正に午後八時であつた。

岩倉右大臣の馬車が馭者馬丁に護られて喰違に來ると刺客の面々が現はれ出て中西茂樹、下村義明は馬の口を押え武市熊吉は車が進めば押停むる爲め車前に進み武市喜久萬は車内より出る人を殺す爲め抜刀の儘横脇に控へた。岩田正彦と島崎直方が車の後より數太刀を突込むと車中より黒きものが轉がり落ちたる故岩田は更に一刀を浴せ掛けた。島崎は馬車の前に廻り一太刀車中に突込める上幌を取つて見ると意外なる哉誰も居なかつた。其時誰か後方へ逃げたと云ふ故武市喜久萬が追駈けると誰か知らぬが堀へ落ちたる模様故通行人の提灯を借り受け中山泰道と兩人にて搜したが何ものも見當らなかつた。其内に人聲騒がしく聞ゆる故刺客の面々は其場を引揚げた。車中に刀を突込まれて傷を受けた岩倉右大臣は羽織を被て車中を飛び出し闇を幸ひ必死となつて逃



げ延び濠に沁り落ち水中より頭を出して模様を窺て居たが刺客の去れる後宮内省官吏を呼び留め其背に負れて宮内省に歸つた。

午後九時半頃侍醫岩佐純岩倉を診察したが外濠の泥水に浸り寒氣に侵されたる爲めか全身氷の如く脉搏も糸の如く心臓の音も微弱であつたが興奮劑を用ゆると約一時間後漸く元氣を回復した。創所を調べると

右腰部切創一ヶ所 長さ二寸五分 深さ一寸

右肩脾部突創一ヶ所 長さ一寸 深さ六七分

にて至て輕傷であつた。

警視廳は直ちに探偵に着手したが現場に下駄一足落ちて居たのみで他に手掛がない。尙ほ色々探偵すると或盲僧が娘に連られて喰違を通行の際壯士に提灯を奪ひ取られたと云ふ話も判り車夫に變装せる偵吏も

「其夜一寸乗せた許りで澤山の金を貰つた車夫がある」

と云ふ話を聞き込んで來た。夫れで此三つを端緒として探偵の歩を進めることにした。

其内盲僧と娘の方は薩摩や土佐生れの探偵が交る交る國言葉をしやべつて壯士の國訛を尋ねて見たが更に要領を得なかつた。

車夫の方は

「十四日午後四時頃一人の客が大至急車を雇度いと云ふ故何れへ供するかと尋ねると先へ參る馬車を何處迄も追駈けくれと云ふ故夫れにては御供出來ぬと云ふと然らば離宮近く迄參れと云

ふた」

ことや其客の恰好國訛も明かとなり警視廳にて想像した薩人の所爲でなくて土佐人の所爲なることも判つた。夫れで征韓論退職者の居た築地近邊を探て見ると下駄の持主も明白となつた。此人力車と下駄から手が付いて武市等は四五日後捕縛された。

捕縛はしたが如何しても白狀しない。拷問もしたが効果がない。彼等一派の仕業と云ふことは判て居るが下手人は幾人にて誰々か細かいことが判らない。致方が無いから同じ土佐人にて警視廳に奉職せる檜垣直枝が獄舎に行き武市に遇て

「潔く白狀しては如何か」

と勤めると武市等も其勸告に従つた。

其結果同年七月八日何れも斬罪に處せられ遺骸は親族にて引取り牛込寶泉寺に葬り寶泉寺の野方町に移轉せる際同所に改葬された。

先年福島成行先生が「赤坂喰違事變」と云ふ書籍を著された。其中に武市の死體引取りに立會つた橋本良弼君の追懷筆記が載つて居る。之を讀むと目の前に武市の死體を見る心地がする故左に其一部を抄出する。

武市等の親族三名及び余と四人の一行は午前十時すぎ傳馬町牢獄の本門受付に至り司法省の許可證を差出して死體の引渡を乞ふ。制服の吏員出で來り只今執行中なれば暫時差控ゆ可く一々口達あり。仍て門前の茶店の一室を借受け休憩す。時恰も七月。炎熱燒くが如く氷水ジンジンピヤ等を命し涼を取るも今頃は誰がやられて居るだらう杯現下の慘狀を語り合ひ何となく悲愴

を感じ少壯血氣の一坐すら意氣昂らず。

正午を過ぐる頃受付吏の指導により一行四人は監獄裏門前に導かる。是より先き兼ねて同志の幹旋により駕籠早桶を用意し傳馬町牢獄裏門の濠際に並列しあり。余等門前に至るや城門式の門戸を左右に開き鍵を手にせる着袴の監守一人「今日の事誠に御一同御愁傷察し入る」と挨拶し四人及び駕籠輿夫を導きて入門せしむ。間もなく非人體の人夫數人順次死體を搬出し來る。死體は一重の米俵に裸體の儘詰め込み口繩の結目に其氏名を記したる木札を付し刑場に着用せし衣服は血塗の儘追々持ち來り夫々俵に添付して引渡を受く。輿夫等はこれを早桶に移して駕籠に收容出門し牢獄の門前に於て列を作り余等四人は腕車又は徒歩にて列の前後に付添ひ埋葬地に向ひ午後二時頃牛込神樂坂を経て寶泉寺門前に着せり。到着に先だち門屋實與、島橋貫策等朝より寶泉寺にありて門外右側の墓地中を一劃して人夫四五名をして短冊形の坑を掘り穿たしめ死體の來着を待居たる際なれば一同協議して埋葬の席次を定め血塗の死體は之を清拭して衣服を着せしめ遺髪瓜等を取りて郷里の親戚に贈る事とし是等の取扱は増賃を與へて埋葬の人夫に之を引受けしむ。人夫等は三升の樽酒に數の子一鉢を取寄せ立ち所に飲盡し直ちに其取扱に取掛れり。

第一番に武市熊吉氏の遺體を俵より取り出し左右より取り押へ之を藁の上に坐せしむ。其首なき胴體を背面より見るときは恰も箕を俯したる形の如し。首級の血色は既に土器の如くに變せらるも其胴體にありては肌膚の色澤未だ全く生色を失はず。臂腰一面紫黒色の大班紋あるは拷問の痕跡と察せられ慘狀見るに忍びず。頭髮の一部と手足の爪とを切り採つて死者の氏名を記し

たる紙袋に收め親族に引渡し死體の血痕は之を清拭して首を繼ぎ監獄より受取來れる衣服を着せて右の早桶に入棺す云々

噫拷問の痕跡を有し箕を俯したるが如き形をせる土色の肉塊夫れが大膽不敵にも單身近藤勇の陣營に乗込むだる快男兒武市熊吉の死體であつた。

### 第二九 神風連の騒起

よは寒くなりまさるなりからごろもうつに心の急がるゝ哉

明治九年十月廿四日肥後の神風連が騒起した。神風連は兵を七手に分つて

- 第一隊は種田少將邸
- 第二隊は與倉中佐邸
- 第三隊は高島中佐邸
- 第四隊は安岡縣令邸
- 第五隊は大田黒惟信邸
- 第六隊は砲兵營
- 第七隊は歩兵營

に向つた。

第一隊は高津運記外四名午後十一時頃熊本新屋敷の陸軍少將種田政明寓所に押寄せ梯子を門扉に掛けて高津運記第一番に扉を乗越し一名は裏口に廻り四名は玄關の戸を押破り一同抜刀にて室内に亂入高津が玄關より左方に廻り布團を被て寢て居る人を布團越に二大刀三大刀刺貫し奥に向つて進む

と他の刺客が既に種田少將の寢所に亂入したと見え枕を蹴て飛び起きた種田は寢巻の儘一尺六寸斗りの刀を抜き既に數ヶ所の重傷を受け乍ら三人を相手に切り合つて居る所であつた。高津は直ちに突進して種田の尻を刺し到頭四人にて種田を斬り殺し首が落ちる斗りになつて僅かに胴に繋がつて居るのを高津が切放し羽織に包んで立ち去つた。

種田は葭町の藝妓小勝を妾として熊本に伴ひ此夜も小勝と同食して居つた。此夜の不意打ちに小勝も逃げ惑ひて輕傷を蒙つたが裏口より跣足で飛び出し電信局に赴き東京に居る父に宛てゝ

「旦那はいけない、わたしは手傷」

と云ふ電報を打つた。當時新聞記者たりし假名垣魯文が此電報の下に

「代り度いぞえ國の爲め」

と云ふ文字を附け加へて俗語とした爲め此電報と小勝の嬌名は天下に鳴り渡つた。

小勝の外に召使の男女各二人即死せるものもあれば負傷せるものもあつた。

第二隊は古田孫市外數名陸軍中佐與倉知實の寓所に向つた。與倉邸には聯隊旗が保管されて居り軍旗護兵が之に附いて居つた。午後十時半過ぎと覺ゆる頃浴衣の如き白衣を頭部に覆へる怪しきものが門内に入つた故軍旗護兵が之に向つて誰かと問ひ乍ら近寄ると直に逃げ去つた故馬丁を呼び起して其旨を告げ警戒を加ふる様注意した。暫らくすると拔刀の男がいきなり門内に侵入せる故劔銃を以て之と闘ふたが敵は數人にて一人は前より一人は横より一人は後より打て掛る故這は叶はぬと其場を逃れて與倉の寢室に赴き此由を與倉に告ぐると與倉は之を聞いて庭上に飛下り一先づ兵營に赴かんとして邸を抜け出て途中敵の追攝を受けたるも漸く虎口を脱することを得た。

與倉が邸内を抜け出るとき何處から抜け出たか分らぬが「前原一誠」と云ふ書籍には

「垣根の横口から身を潜めてこそそこそと逃げ出すものがあつたので刺客の一人が後より一太刀浴せたが刀尖が少し肩先にかゝつた位の負傷で之を逸した。多分從卒か馬丁と思ふて追はなかつたが後に聞くと之が與倉であつた。當時東京の某御用新聞に「中佐疾くも覺りけん戎服して右手に洋刀を打振り聯隊旗を保護して斬り出れば賊徒は案に相違し」云々と掲げてあるのは眞赤な詐りにて事實は叙上の通り」と書いてある。

第三隊は石原運四郎外數名陸軍中佐高島茂徳寓所に向ひ午後十一時頃杉垣を破て邸内に入り戸を打破つて玄關外一ヶ所より室内に亂入下女一人を斬り殺し直ちに茂徳の寢所に向つた。茂徳は直ぐに便所の入口の戸口より室外に出でんとすると室外に待つて居た刺客が外より斬り付けたる故引返して南手戸袋を敗り後庭に飛下り泉水を越へんとして足を踏み外し池中に墮落した所を追襲された刺客の一人に斬り殺された。

此時二階に寢て居た馬丁が刺客の隙間を伺ひ裸體の儘飛び下り泉水を越へて川原の方に逃げたが暫時して最早刺客も退散せることと思ひ泉水の側に歸つて來ると忽ち刺客に追駈けられて再び川原の方に逃げ出した。

第四隊は熊本縣令安岡良亮の山崎の寓所に向つた。此刺客は最初は吉村義節、沼澤廣太、井上幾衛の三人の豫定であつたが三人では不安心と云ふので更に愛敬吉太郎、角田新太郎の二人を加ふるこゝになつた。何れも白鉢巻たすき等の用意を整へ竹筒に石油を入れたるを携へて午後十一時頃五人

打ち揃ふて安岡邸に向ふと表門が開いて居た故吉村が眞先に進んで邸内に侵入し沼澤廣太は勝手口に向ひ残り四人は玄關に向つた。

一六二

此日の夕暮頃六等警部村上新九郎の弟が兄に向て「神風連が何かやると云ふ話を聞いた」と告げ午後九時頃も「今夜何かやる様だ」と告げたる故村上は確かな模様は判らぬが兎に角聞棄ならぬと一等警部仁尾惟茂の宅に赴きて其由を話し兩人打揃て安岡縣令邸に赴き参事小關敬直一等巡査坂口静樹を呼寄せ五人にて相談中の所へ吉村等が亂入して來た。

此時小關参事の従者が玄關に控へて居たが吉村等が其従者に斬り付けると従者は狼狽して次の間に逃げてえんの下に這ひ込んだ。

此物音を聞いて縣令始め一同何事ならんと怪しむ所へ吉村等が紙障を開らいて拔刀で斬り込んで來た。簡程迄に切迫せることと思ひもよらざりし縣令以下これとは斗り何れも席を立ちて裏の次の間に退いたが刺客も續いて追掛け來り茲に味方も敵も五人同士の大亂闘が始まり間もなく離れ離れとなり座敷の中や土間の隅や諸所方々にて戰つた。

吉村が縣令に逼らんとすると小關等四人一切に吉村に打て掛り二人は吉村の刀の柄を握り二人は吉村の左右の腕をつかんだ。吉村が大聲を上げて味方の者を呼び刺客の一人が拔刀にて吉村の側に來ると縣令側の三人も吉村と離れて之に向ひ残れる一人の某が吉村の刀の柄を握んだ儘某も吉村も土間に下り戸口の所迄來て某が將さに吉村の刀を奪はんとする際吉村が再び大聲を立てると沼澤廣太が馳せ付けて某に斬り付けた。吉村は再び座敷に亂入して斬り倒されて居る洋服の男を斬り殺した。小關参事は安岡縣令と組合て居る刺客のもどりをつかんで引倒し其刀を奪はんとする際其刺客が

大聲を上げると更に一人の刺客が後より小關の右股に斬り付けた。小關は振り返つて其刺客に組み付かんとして誤て刀双を握りはつと思ふて手を放すと刺客が刀を振て小關の頭部と右腕を斬つた。小關は致方無き故後方に退きえん側に出て倒れると刺客が追ひ掛けて來て小關の腰を斬つた。刺客は間もなく家財を積み上げ之に火を放ち其一人は

「已れが這奴を殺した」

と言ひ乍ら小關の襟をつかんで火の側に置いたが小關は死んだ眞似をして之に抵抗しなかつた。火が熾となつて左の耳や左の頬が焼け始めると少しく身體を運がして之を避けたが最早刺客は居なかつた。匍匐膝行其所を去つて庭に下り邸内の竹林の中に隠れた。

仁尾警部は一同と共に一旦次の間に退いたが床の間に刀があつたと思ひ立戻て見るとうこんの袋に入れたる刀がある故袋紐を解かんとするも中々解けない。漸く之を解いて刺客と渡り合ひ刺客にも傷を負はせ自分も傷を蒙り縣令の安否如何と探し廻る内二人の刺客に切て掛られ之と渡り合つて居る際坐中の椅子に突き當り後方に倒れると如何云ふものか刺客は逃げて仕舞つた。

縣令側も五人なれば刺客側も五人互に必死となつて戰つたが縣令側は寸鐵を帯びなかつた悲しさ何れも重傷を負ひ安岡縣令は同月廿七日小關参事は約二ヶ月後死亡し村上も坂口も奮戦死闘遂に命を失つたが獨り仁尾一人は傷淺くして九死に一生を得貴族院議員に迄進んだ。

刺客側でも愛敬吉太郎が負傷せる故一同にて愛敬を介抱し門外に出ると巡査に遭遇直ちに之にきり付け更に山崎天神邊にて洋服の男をきり殺したる上砲兵營に向つた。

縣令邸にて火が上ると數多の人が馳せ付け五等警部木村金吉郎も馳せ付けて來た。木村は縣令が裏

の菜園に倒れて居ると云ふ話を聞きて直に裏に廻り杉垣を越えて菜園に入ると縣令は重傷を蒙つて菜園に臥して居つた。縣令は木村に向つて

「今夜集つて居ると賊が抜刀で亂入した故刀を奪はんとして組合つて如此重傷を受けた。自分は此所迄逃れて來たが小關參事等は室内に斃れて居ると思ふ。尙ほ此趣を東京の大政官や内務省に通知せねばならぬが電線は最早破壊されたと思ふ故久留米から電報を打て」と命じた。木村は戸板や疊を持ち來たり縣令を疊の上に載せたが其内木村を呼ぶ聲がする故往て見ると小關參事が竹籤の中から呼んで居るのであつた。直に疊を持て來ると小關自ら疊に上つて臥た。

第五隊は浦楯記外五人大田黒惟信の邸に向つた。門の戸が開いて居た故外出中と思ひ歸路を撃たんと一時間斗り待つて居たが其内に兵營の方面等に火が上れる故氣を焦らち裏手の杉垣より忍び入り玄關に廻て戸を叩き大田黒の在否を尋ねると内にも返事をしたが何と云つたやら能く判らず屋敷中を廻て見ると裏手の兩戸が開いて居た故其所より室内に亂入したが臺所脇に少年二三名のみ居るのみ故火を放つて引揚げた。大田黒は在宅であつたが戸を叩いた際唯事でないと思ひ裏に廻つた間に戸外に逃れ去つた。

第六隊は神風連の總帥大田黒伴雄副帥加屋齋堅之を帥いて砲兵營に進み第七隊は富永守國等之を帥いて歩兵營に進み營兵は不意のことゝて狼狽措く所を知らず神風連は燒玉を投し火を放ち勝に乗じて進んだが何分にも百七八十名の少數に過ぎず生殘れる士官達が潰亂の臺兵を收拾し銃を亂射して之を防ぎ守勢より攻勢に轉するに及んで大田黒伴雄加屋齋堅相次で戰死し余黨は或は戰死或は自殺

或は捕縛され擾亂は幾干ならずして鎮定した。

此神風連に殺されたる熊本縣令安岡良亮は即ち安岡亮太郎其人である。安岡は佐々木高行が幡多郡奉行たりしときよりの知人にて高行の懇望により東北戦争の終るや否や中央政府に出仕し彈正少忠より大忠に進み其後諸官に歴任して白川縣權令となり更に進んで熊本縣令となつた。此熊本縣令は中々六ヶ敷役目であつた。六ヶ敷役目なる故疎腕の聞え高き安岡を選抜して其任に當らしめた。

當時熊本縣には三大黨派があつた。一は學校黨にて池邊吉十郎之を率いて國權を主張し一は民權黨にて崎村常雄之を率いて民權を主張し一は敬神黨即ち神風連にて大田黒伴雄が其首領であつた。其主義は何れも皆異なつて居たが岩倉、大久保を中心とせる當時の政府に反對し機會あらば之を顛覆せんと欲する其精神は皆同一であつた。

維新後明治政府に抗して兵を擧げたるものは言ふ迄もなく其施政に不満の結果であつたが必らずしも保守黨ではなかつた。必らずしも頑迷固陋の徒ではなかつた。雲井龍雄の如き「不容射釣一管仲」が謀叛の一原因であつた。乍然神風連のみは疑も無き極端の保守黨であつた。

安岡が熊本に赴任するや深く縣下に於ける黨派分立の情勢を察し官民の意志を疏通して其反政府熱を緩和せんと欲し胸襟を被いて之に接し神風連の主立てるものを縣下各神社の神職社掌に上げ學校黨等の主立てるものを區長や學校長に上げ銳意官民の融和に努め頗る好結果を奏して居つた。佐賀の亂の起れる際熊本縣下の士族亦頗る動搖せるも遂に之に應じて起たなかつたのも亦安岡の鎮撫宜しきを得たる結果であつた。然るに明治九年山縣有朋の建議により今迄帶刀廢刀各自の隨意たりしものを改め斷然帶刀を禁止することにした。神風連は之に激昂して長州の前原一誠會津の永岡久

一六六  
茂、秋月の今村百太郎宮崎車之助等と相應じて遂に起つた。安岡は結局中央政府の方針の犠牲となつた譯である。

安岡負傷の報東京に達するや治療の爲め山川侍醫を差遣されたが間に合はなかつた。享年五十二遺骸は熊本花岡山に葬り遺族は郷里幡多郡中村にかへつた。

安岡は智えもあり膽力もあり温厚にして而かも剛骨又人を容るゝの雅量もあり武に於ては弓馬刀槍銃砲文に於ては和漢の諸學何れとして精通せざるなく詩も中々功であつた。其死するや大久保利通が之を惜しみ且つ

「安岡の死は藥のめんげんだ」と云つた。

### 會津平の詩

安岡良亮

會津平。會津平	天兵飛入自母成	連雲堡場棄不守	滿城火烈迸雷霆
維昔狡童弄朝柄	群姦相結據王廷	神州何處無志士	切齒空受黨人名
無辜奔竄無所告	怨氣衝天天日冥	殘忠害良等閑耳	看他罪惡日貫盈
時哉天風翻錦幟	驅逐醜類出皇京	勤王將卒投袂起	積水決障共東征
江州直指東山道	一路春風梅花馨	單食齋漿夾道路	玄熊黃龍旅陣庭
一戰江都無遺賊	再戰八州誰還爭	轅門日夜車擊轂	各々革面就齊盟
具曰普卒皆王士	皇恩奚不被八紘	南風之薰及草木	鷄犬牛馬不相驚
特有頑奴恃僻遠	嘯聚逋逃敢衝行	不知井蛙何所見	謾道四塞占地形

可憫山河不足怙 賊黨日夜歸天刑 頑奴俛首終無術 衝壁仰待身爲牲  
嗚呼中興之業何易々 大風拂雲秋旻明 明晦無常月輪似 持滿守成真不輕  
除煩去苛民亦足 舉賢遠佞邦自寧 奇枝淫巧空耗財 曼聲美色或傾城  
所以藤公掛其冠 所以楠公結其纓 措頌學箴君勿怪 芳山恨自驕修生  
此詩は保成峠占領の日起稿し落城の夜完了せるものにて狡童は將軍家頑奴は會津候をさせるものである。  
ある。

### 第三〇 西郷舉兵の原因

西郷舉兵の原因は有名なる刺客事件である。西郷は刺客事件に激昂し問罪の師を起したものである。刺客事件は果して事實なりや否や之を確認するものは

「中原尙雄等は内務郷大久保利通大警視川路利良の命を受け西郷暗殺の目的を以て歸縣せるものに相違なし」

と主張し居り之を否認するものは

「中原等は刺客に非らざるも私學校徒は之を刺客なりと誣ひ中原等を拷問して無理に口供書に署名せしめ西郷を欺き之を怒らして兵を擧げたものである」

と主張して居る。其孰れが正しきかを研究せんとする方の参考となる可き資料を左に略述する。  
一、大隈重信の話によると「板垣は直ぐ腹を立てた。西郷は怒りさうで中々怒らない人であつた。所が征韓論の際はどう云ふものか平生容易に怒らない西郷が頗る怒つた」と云ふことである。板垣退助の話によると征韓論の際「西郷と大久保が議論を始め双方共感情の極に走り大激

論となり他の參議は呆氣に取られて見て居た」と云ふことである。

一、征韓論破裂後板垣が西郷に向つて「自分は何處迄も貴君と行動を共にする考である。色々離間をするものがあるかも知れぬが飽迄も自分を信用して貰ひ度い」と云ふと西郷が意外にも「君は僕に頓着せず自由の行動を執り自分が可と信する通りやつて貰ひ度い」と答へたと云ふ話である。又林有造が明治七年一月鹿兒島に赴き西郷に面會して「將來どうする積りか」を探れるも不得要領に終れるは林有造舊夢談に掲ぐる通りである。

一、明治七年江藤新平の兵を佐賀に擧ぐるや擧兵數日後佐賀の守備を島義勇等に頼み置き數人の同志と共に竊に鹿兒島に赴き西郷隆盛に面會し日向を経て土佐に渡り高知にて佐賀軍の敗報に接し高知より土佐の東端甲の浦に赴き甲の浦にて縛に就いた。江藤が西郷に面會せる際如何なる談をなせるや世間に判つて居なかつたが當時江藤の從者として佐賀より甲の浦迄隨行せる隠岐の船田某が大正年間某新聞記者に語れる所によれば「江藤と西郷は鹿兒島を去る數里の間（温泉のある村）の或農家にて面會せるが其時外に待つて居た船田が其家の家婦に兩人の模様を聞くと最初は低聲にて何か話をして居り中頃聲高となり兩人は摺合ひも始め兼ねまじき勢で言ひ合つて居たが今は又靜まつて穩に話をして居ると答へた」由である。多分「江藤が擧兵を西郷に勧め西郷が之に反對せしもの」と何人も想像する。

一、前數項を綜合考慮するに西郷は征韓論否決に激昂せしや明かなるも擧兵の考は持つて居なかつた模様である。「西郷は早晚叛旗を上げたに相違ない」と云ふ説もあるが夫れは一部の意見に止まり早晚は別問題として兎に角明治七年より明治十年二月迄は刺客事件さへなければ西

郷は兵を擧げなかつた擧兵の意がなかつたと云ふのが一般に信ぜられて居る説である。

一、佐々友房の著せる戦袍日記に明治九年肥後の池邊吉十郎が佐々友房を伴ふて薩摩に赴き村田新八に遇つた時の模様が書いてあるが此記事によると村田は擧兵の考を以て居た模様である。薩軍幹部の或者は刺客事件突發前より擧兵の希望を以て居たと一般に信ぜられて居る。

一、上述の通り刺客事件の突發迄西郷自身は擧兵の考を有せず幹部の或者は擧兵の希望を有せし模様なるが次の問題は「西郷以外の全幹部即ち大山綱良も桐野も篠原も永山も池上も樺山資綱も西郷小兵衛も貴島も淵邊も悉く擧兵の希望を有せしや」將た「甲は擧兵を望み乙は他の方法による現状打破を望み丙は既に擧兵の機を失し敗戦の虞ありとし各自區々の考を抱き居しや」である。悉く擧兵を希望して居れば刺客に非らざるものを刺客と偽り西郷を欺くに至て好都合なるも然らざれば擧兵反對者が訊問（訊問關係者は相當多數）に關係せると否とに拘らず西郷を欺く妨げとなる。

川路利良傳を見ると其中に大山綱良が明治七年八月東京より篠原國幹に手紙を送りて擧兵を勧めたと書いて在り其手紙の全文を載せてあるが大山が明治十年二月河村純義と船上會見當時の模様を見ると大山も西郷小兵衛も必らずしも擧兵を望んで居たと見えない節もある。永山、貴島、樺山や村田三介も問題である。此數氏に關しては「擧兵の時機を失した。今戦へば負けるから止めよ」と云ふ意見であつたとか「西郷等數名東上して刺客事件の不當を訴へるがよい」と主張したとか「擧兵に不賛成で私學校徒に惡まれた」とか云ふことが種々の書籍に載つて居る。桐野さへ彈藥掠奪の報に接して長嘆したと云ふ話もある。

一、刺客事件は概略左の通りである。

明治十年一月警視廳警部中原尙雄等警部巡查二十餘名（内五名位學生）數組に分かれて薩摩に歸つた。私學校徒は其歸縣の目的を訝み谷口登太なるものが臺灣征討の際中原と共に從軍相知の間柄であり且つ未だ私學校徒に加入し居ざるを幸ひとし谷口をして「東京にて奉職し度き希望の旨」を中原に告げさせ中原に近つかせた所中原は谷口を信じて西郷、桐野、篠原暗殺の目的を打明け谷口は其旨を私學校徒に報告した。茲に於て私學校派たる鹿兒島縣警察部は中原等及び其一味と認むるもの五十一名を捕縛し之を糺問したる處何れも「川路利良の命を受け西郷を刺殺し且つ私學校派を切崩す考にて歸縣せる旨」を白状した。又元宮崎縣出仕たりし野村綱なるものは「在京中大久保利通より歸縣を命ぜられ且つ暴發等の節は自ら大小爲す所ある可しと懇々被申付其意は畢竟主任の人を斃すか又は火藥庫へ火を差入る等のことゝ心得歸縣した。」旨を申出た。茲に於て私學校徒の激昂甚しく問罪の師を起すことゝなつた。乍然其後中原等が東京に護送せられて裁判所に提出せし書（川路利良君傳一〇七頁）には「自分等は親戚朋友が方向を誤るを患ひ進退を誤らざる様之に勸むる爲め歸縣した。其主旨を上官に具陣し月給四ヶ月分前借して歸縣した。實際上官より歸縣中忍耐して粗暴の事なき様心得無事に歸れと云はれた。然るに勸説の見込なきのみか捕縛され捺印を強制された」と書いてある。谷口が明治十年十二月九州臨時裁判所にて述べた口供書も川路利良君傳第一三〇頁に載つて居る。此口供書と中原の口供書は大分違つて居る。

一、谷口登太が私學校徒に差出たる報告書と九州臨時裁判所にて述べた口供書は左の通り違つて居る。

報告書には「中原は兼て懇意の者にて歸省の趣を聞き尋ねて行き上京就職し度いが旅費もなく勤め先もなく躊躇して居ると云ふと中原は警視廳を擴張する故警視廳に勤めよと云ふた。中原が私學校の模様を聞く故谷口が入校者夥敷我々如き入校せざるものは近隣より疎ぜられ嫌疑も受け迷惑して居ると答へた。夫れより私學校徒學兵の見込時機等を話し合へる後中原が互に非私學校派で同腹の人故可秘必要がないとて所謂秘中の秘計なるものを話した。鹿兒島市以外には私學校徒を切崩し易いが市内には六ヶしい西郷、桐野、篠原の三人を斃せば跡は制し易い西郷は知人故面會して殺す覺悟だ西郷と共に斃れるなら不足はない此三人を斃せば跡はえりくづにて暗號は英佛だ早く決行せねば時機を失ひ出來なくなると話した。谷口が歸途途中より引返して再び中原を尋ね愈やるかと聞くとやると云ふ故同志の人々がしつかりして居ぬと失敗する同志は誰々かと聞くと末弘直方等だと答へた。夫れより數日後末弘等に會ひ谷口は中原方に一泊し中原は谷口に決死の同志の名を書いてある手帳を見せた」と書いてある。

口供書には「自分は農業をやつて居た。一月二十六日知人の相良長安が訪ねて来て君は東京に行く噂だがさうかと尋ぬる故行かないと答へた。然らば何故私學校に入らぬかと聞く故別に理由はないが鹿兒島迄三里もあり貧乏にて辨當にも困る故入校せぬと答へた。さうすると相良は入校を勧めた。來月は私學校派が繰出すが其時臆病だと青年に叩き殺さるゝ故早くはいれと勧めた。又相良が東京より警部が數人歸つて居り其中に中原尙雄も居る君は中原と懇意の由會つたかと問ふ故歸つたとは聞いたが未だ遇はぬ中原とは臺灣征伐の時一所で知て居ると答へた。



さうすると相良が中原に會て私學校に入らぬ爲め嫌疑を受け迷惑だ東京にて勤先さへあれば上京し度いと話し掛け中原の答を聞いて報告してくれと頼む故自分は其頼みを承諾した。一月三十日自分が中原を尋ね歸國の由は聞いたが今迄御無沙汰した今日は當所の市に付き旁やつて來たと述ぶると中原は能く來たとて色々自分と話をした。中原が私學校の模様を聞く故自分が入校者の夥しき旨を答へ且つ自分等不入校者は近隣よりも疎せられ嫌疑も受け迷惑故上京し度いと思ふが今となりては勤め先きがあるまいと云ふと中原が警視廳を擴張する故夫れに入れと勧めた。夫れより中原は私學校の模様を尋ね私學校の悪口を云へる上市外の者を私學校より離すことは出来るが市内は六ヶしい故に自分は西郷に面會議論し度いと考へて居るが途中で私學校徒につまみ殺されては詰らぬと留めるものある故控へて居る乍然西郷が兵を上げる時は行つて議論をして聞き入れれば殺す外ない此人と共に死ねば不足がない故西郷方に行く考だ君も何か變つたことを聞いたら知らせてくれと自分に云ふた。翌三十一日相良長安が自分方に來て中原方に行つたかと聞く故中原と話の模様を漏れ無く話すと君の私學校入學のことは長安が可然計ふと云つて置いて返つて行つた。兩三日後相良長安より使が來て峯崎某方迄参りくれとのことに付き峯崎方に行くこと相良が居た。相良は今一度中原に行きくれと自分に頼んだ。且つ中原に面會の上は前日の話を續け私學校の勢の盛なることを語り近日吾妻獅子下り居るに付き私學校黨にて獅子狩をなす風聞有之に付き用心せよと話してくれと頼み自分は之を承諾した。翌日午後四時中原方に行くこと不在にて家内の者が中原を迎へに行き程なく歸つて來た。自分と中原と話して居ると高崎親章がやつて來た。話をするによい場所があるとて中原は自分と高崎を伴

ひ伊集院町の或家に行くこと末弘直方外一名が居て一同焼酎を飲んだ。自分は相良の話した通りを語ると中原等は我々の歸縣のを知るは大山勘助等數人だのに如何して此事が私學校黨に知れたか海老原穆が東京より知らせたに相違ないなど話した。自分は中原と一所に中原の宅に歸り寢轉び乍ら話をした。其時先刻會つた三人は皆東京より歸縣せる者だと中原が自分に話した。又中原は金を一圓か二圓自分にくれた。其夜自分は中原方に一泊翌朝自宅に歸ると相良の使がやつて來たから中原に遇つた時の模様を詳細に話した(中略)二月三日自分の名にて中原を呼出し捕縛した。二月十六日自分は逸見十郎太の隊に編入され逸見より中原の口供書を隊中の者に讀み聞かせ右の筋合なるに付政府に訊問の爲め上京する由申聞された。其口供書は自分より長安に申立たる趣旨と異なれども自分は何も申出なかつた。其後本營より呼出が來た故行つて池上四郎に遇ふと池上は一通の書面を出しこれは其方と中原と談話の始末を認めた書面なり讀み聞かすとのこと故聞いて居ると中原に行き話せし次第と違ふけれども戦争中故何にも云はず相違ないと云ふて歸つた。(中略)其後降服した。中原等西郷を暗殺せんと企てたる云々と自分より私學校黨の者に申出たるにより右を證據として取糺の上中原等の口供成案相成たる趣暗殺の儀は中原より決して承らざるは勿論自分より相良に申出たること一切無之」と書いてある。

一、薩南血涙史を見ると刺客事件は證人谷口登太の報告書中原等の口供書のみならず物的證據があると書いてある。其證據物件は中原の手帳であつて此手帳には左の文句(川路の言を中原が手録せしもの)同志の人名が書いてあり唯一の證左として西郷隆盛自ら之を保管せしも可愛

獄突出の際他の重要書類と共に之を焼棄した乍然永山彌一郎自筆の寫が残つて居ると血涙史に書いてある。

一七四

以下永山の寫「中原の手帳」

官職有之者は皆銘々其職に斃れて止む可し。

官職は素より勅命也勅命を奉して賊を攘ふ何をか疑はん。

勅を奉して死を致す何の榮か之に過ぎんや。

古より勅命を守て賊名を請けたるものなし。

故に云死を以て職を奉する者は常に恐るゝ敵なきものたり如何となれば四方は賊野となり大敵

吾を圍むも君命なる大義名分を戴き死を以て之を貫かんことを目的とすればなり。

右中原手帳に記載有之候」以上永山の寫

偽筆の手紙は短いが原則である。偽作の文書は概ね偽作者に都合の能き意味を明確に著はして

居る。右の文句は直情徑行の別府逸見の偽作としては餘りに廻はりくど過ぎると云ふ人もある。

一、左の點は確認論者も否認論者も共に之を肯定して居る。

イ、明治九年秋より大久保も川路も鹿兒島の不穩をへて居たこと。

ロ、中原等は親戚知人を勧誘して私學校派と絶たしむる爲め川路の了解を得明治十年一月數

組に分かれて歸縣せること。

一、兩者の説の異なる點左の通り。

イ、否認論者は「歸縣の目的は薩摩の形勢を偵察し且つ知己親戚を勧誘して私學校を脱せし

むるのみだ」と主張し確認論者は「勧誘もするが暗殺も企てゝ居た」と主張して居る。

ロ、確認論者は「薩軍か中原等を殺さぬは證人とする爲めである。殺さないのが事實の證據

でないか」と云ふて居る。

一、詳細は薩南血涙史大警視川路利良君傳西南紀傳大西郷秘史等に書いてある。薩南血涙史は

刺客事件を事實と断定し證人の陳述や證據物件の内容を詳細に掲げ且九州臨時裁判に於ける

谷口の口供に對する反證を掲げて居る。川路利良傳西南紀傳は確認否認兩説を掲げて居る。

一、薩南血涙史を見ると「明治九年十一月頃東京より刺客が來ると云ふ話が既に鹿兒島に洩れ

た」と書いてある。斯ることはあるとも云へないが必らずしもないとも云へない。今日にても

政府の機密文書が在野黨に洩れたり一會社にて重役社員二派に分れ暗闘の際兩派の機密が筒拔

けに互に反對派に洩れたりすることが往々ある。何れが勝つか何れが負けるか勝敗の豫知し難

き結果双方に疑を通ずるものゝ生ずる爲めである。福島成行先生の著せる喰違事變を見ると當

時の司法官中にも武市熊吉の死に同情し其會葬を知人に依頼せる人もある。薩摩へ刺客を送る

噂が洩れたと云ふ話も眞實と断定することも出来なければ事實無根と斷言することも出来ない。

一、谷口登太が九州臨時裁判所にて述べた口供書には「相良に頼まれて中原の腹を探りに行た」

と書いてあり私學校徒に差出した報告書には「相良に頼まれて」と書いてない。これは相良に

頼まれたに相違ないと想像される。相良に頼まれて谷口の方から「寧ろ西郷を暗殺してはどう

か」と誘ひを入れたかも知れない。乍然斯る誘ひをいれたとは口供書にも報告書にも書いてな

い。

一、中原等は鹿兒島縣郡部の士族である。此郡部の士族は必らずしも市部の士族と不和とも云へないが幾分の差別待遇があり郡部の士族にして市部士族に對して反感を抱いて居た人もなかつたとも云へない。これも此事件を研究するに當つて見逃す可らざる事柄である。

一、刺客を送つたと云ふのは明白に「西郷を殺して來い」と云ふ命令を下して歸國させた場合のみに限らない。左の場合に於ても矢張り刺客を送つたものと言へる。

一、西郷、板垣、前原等が同時に蜂起せば政府側が勝つか在野黨が勝つか勝敗の數明かならず明治九年十年頃政府は此點を非常に憂慮して居たことは疑のない事實である。今日にても新聞を見ると驚く可き記事が載て居る。父が放蕩無頼で母が其放蕩無頼を始終心配して居ると子が母の心配に同情し父を刺殺したと云ふ記事が載つて居る。鹿兒島縣郡部の士族にして市部士族に反感を有する人が前述の子が前述の母に同情せると同様政府當局や大警視の憂慮に同情し「若し西郷等が謀叛する様なら私共がやつ付けてしまひます」と言出したと假定する。中原等が歸國の際「西郷等の反跡明かならば刺殺しましやうか」と問ふたと假定する。「溺るゝ者はわらをもつかむ」と云ふ諺の通り勝敗の數明かならざるを患へて居る大警視が此申出此質問を歡迎し「反跡明白ならば殺してしまへ」と答へたと假定する。扱て大警視が此答を發し中原等が其意を體して歸縣したと假定して次に考ふ可きは「丁度反跡の明かとなつた時即ち適當の時期に西郷に近付き得る見込があるか」である。丁度反跡の明かとなつた時即ち適當の時期に西郷に近付得る見込なく舉兵後も近付く見込なしとせば「是非共刺殺の目的を達する爲め適當の時期以前即ち反跡の未だ明かならざる前にても之を殺すか。

反逆の證據少々不充なりとも之を殺すか」又は「假令時機を失する共反跡明白なる迄手を出さぬか」の二者何れかを撰擇せねばならぬことゝなる。此場合に於て中原等が後者よりも寧ろ前者を撰擇する考であつたとせば川路も中原等が前者を撰擇することを希望して居たものとせば矢張り刺客を送つたものと言ひ得る。

一、中原等が「西郷等を殺してしまひます」と言ひ出し大警視が陽に「左様のことをしてはならぬ」と言ふたとしても内心中原等が刺殺の企圖決死の覺悟を有せるを察知し（客觀的に察知し得るに拘らず）之を歸國せしめたとすればこれ亦刺客を送つたものと言ひ得る。

一、城山陥落の前日河野山野田の兩軍使が河村參軍に遇つたが其時兩人は刺客を送るの不都合を熱心に論じて居る。

一、假りに中原等が刺客に相違ないとしても川路一人の獨斷なるや大久保と協議の結果なるや亦一同題である。川路に對する證據物件が充分であり確實であると假定しても大久保に關する證據物件が充分であり確實であるとは言ひ得ない。

一、西郷驟起せば政府側が勝つか在野側が勝つか政府は其勝敗如何を憂慮して居たことは前述の通りである。岩倉、大久保は征韓論を叩き伏せてしまつたものゝ西郷、板垣、江藤、前原が同時に叛旗を翻しても之に勝つことが出來ると云ふ自信は持つて居なかつた模様である。之に關して筆者の聞ける事項を參考の爲め左に列記する。但し此事項は悉く事實であるか間違て居るか其點は筆者自身にも判らない。

イ、征韓論の破裂し薩土の近衛將校相卒いて辭職歸國するや「彼等が驟起したら大變だから」

とて追撃斬殺してしまはんと主張したのもあつた。

一七八

口、最初大久保は「西郷は兵を擧げない」と云ふ考であつた。念の爲め兩者共通の友人たる伊地知正治、吉井友實等の意見を聞いて見たが皆同意見であつた。夫れで最初は安心して居つた。これは西郷の身上を心配した友情とも見えるが西郷の蹶起を恐れて居た結果とも見える。大山巖の歐洲より歸國するや西郷は大山の云ふことを能く容れるとて大山をして西郷に洋行を勧めさせたが西郷は之を聴かなかつた。

ハ、警視廳は諸方面に探偵を派して在野諸士の舉動を偵察した。明治九年頃は殊に甚しかつた。

ニ、大阪會議を開き木戸、板垣を入閣させたのも此憂慮に關係があるかも知れない。大阪會議の主唱者は井上馨なるも井上と伊藤は異體同心の盟友であり伊藤は當時大久保の股肱であつた。

ホ、臺灣征伐や其首將に西郷從道副將に谷干城を任命したことも薩土近衛將校との關係を考へたものかも知れない。

ヘ、前原一誠も政府に入る様頻りに勸誘した。「前原一誠」と云ふ書籍を見ると左の記事が載つて居る。

「明治九年彌生に近き春三月のことである。山口縣下が何となく不安の状態に在るので政府は井上馨に密命を下し歸省に託して同縣下の動靜を視察せしめ傍ら舊士族の不平分子を懷柔するの任に當らしめた。井上は山口に来て同地の富豪阿部某の家に神輿を据え其筋の人々か

ら手を入れて萩、山口、長府、徳山等から屈強の壯漢十五六人を招請して酒飯を饗し酒間各其志す所を言はしめた。縣令關口隆吉や縣書記官進十六も井上から相伴役を言ひ付かつて坐に在つた。井上徐口に口を開いて「諸君皆其望む所を言つて見られい。吾輩出来るだけの御盡力を致さう」と言ひ出したのであつたが初めは互ひに顔を見合はすばかりで誰一人として希望を表白するものとはないのであつた。そこで關口縣令は其間を斡旋して「古語にも日暮れて途遠しと云ふがある。諸君にしてもし仕官を欲せらるれば此絶好の機會を失はるゝな」と云つたので來會者は或は仕官を以て答へ或は修學を以て答へ或は洋行を以て答へた。所が横山俊彦一人は默然として答へなかつた。平素癩癩持の井上は聊かじれ氣味で「君だけ黙つて居るのはどうしたもんぢや。開拓使廳の重要な場所にあきがあるがやる氣はないかね」嫌で御座る」是に於て井上の癩癩玉は遂に破裂した「さうかいやなか。おんしは見かけによらぬだらずものぢやのう」横山微笑しつゝ曰く「だらすものどころか。裏の島のらつきやう作りてばかりに忙がしい」井上此揶揄を聞いて益々癩癩を募らしつゝ「おんしの様なやくざものはこえかづきが分相應ぢや」横山は此罵倒をきくとひとしく威猛高となつて井上の側へ詰寄りつゝ「土分に對して無禮の雜言。今一言云ふて見よ。容赦はせぬぞ」と腕を捲くつたが關口と進とが左右から必死となつて押し止めたので僅かに事なきを得た。

前原一誠は朝廷度々の召命黙し難くして上京した。一日伊藤博文が馬車を驅つて前原を其族宿木挽町の佐倉屋旅館に訪ふた。館婢先づ刺を横山に通ずると横山は前原、伊藤の會見を妨ぐる爲め前原病氣と稱して面會を謝絶した云々」

一七九

右の記事によれば前原を殺したものは木戸、伊藤、井上でなくして前原一派自身である。此記事は前原びるきに取りては寧ろ不利益の記事である。其代はり前原びるきが捏造した記事でないと思はれる。

ト、明治九年秋大久保は鹿兒島の形勢を憂慮し大山綱良を東京に招きて鹿兒島縣廳の改造を圖らんとした。

チ、鹿兒島に在る火藥庫を早く他に移さんとしたが「却て私學校徒を激昂さす」とて川村純義等が反對した爲め十年春迄着手しなかつた。

リ、大久保は西郷の蹶起を聞いて「維新の大業もこれで滅茶々々になる」とて頻りに嘆息した。

又、開戦後伊藤博文は勝敗を憂慮して其見込を頻に鳥尾小彌太に尋ね鳥尾にからかはれた。

以上の記事は悉く事實であるか事實でないか茲に之を斷言することは出来ない。乍ら明治九年頃大久保等が西郷の蹶起を頗る憂慮し且つ西郷にして蹶起せば政府側が勝つか在野側が勝つか其勝敗如何を患へて居たことは前述の通り事實でないかと思はれる。

白髮衰顔非所意

壯心橫劍愧無勳

百千窮鬼吾何畏

脫出人間虎豹群

西南戦争當時に於ける在土佐舊瑞山系人物の行動を表面に現はれたる形跡より見れば左の四種に區別することが出来る。

第一は林有造、大江卓、池田應助等と全然同一の行動を執つた岩神昂である。林大江岩神等は銃を外人より買入れ陸奥宗光と策應し汽船に乗じて海路大坂を突かんとしたが西郷の舉兵が餘りに突發

的であつた爲め準備が思ふ様に整はず其内に薩軍は負色となり林等の計畫は發覺し捕縛さるゝことゝなつた。

第二は谷重喜山田平衛門等と同一の行動を執つた島地正存西山志澄である。これも舉兵の考はあつたが實現の運に至らなかつた。

第三は大石彌太郎、池知退藏、森新太郎、安岡權馬、島村左傳次、桑原平八、田邊豪次郎、宮崎頼太郎（東西に分かる）等である。大石等は

一、自由平等論に反對なるか

一、片岡等の基督敎信仰に嫌焉たるか

一、何か反感を有せるか

其理由は明かならざるも兎に角板垣、片岡、林等と離れて單獨舉兵の企圖を持つて居た模様である。林有造舊夢談を見ると林有造、島地正存等が大石島村等に會見勸告の結果大石、島村等も單獨舉兵の意を翻し共同舉兵に同意するに至つたと書いてある。事柄が事柄殊に一部は未發覺の儘葬られた秘密事件の事故確かなことは判らない。

第四は止戦の献白書を上つた秋澤清吉である。當時「戦を止め島津久光松平春嶽等の名士を集め刺容事件の眞偽曲直を公平なる其陪審裁判に付す可し」と云ふ主旨の議論を唱ふるもの頗る多く島津久光、福澤諭吉亦其一人であつた。秋澤も亦京都に赴き止戦を献白し土佐にても佐々木高行と激論せる模様である。秋澤が

一、採用の可能性ありと信じて献白せるや不可能と知り乍ら献白せるや

一、自分一人の考なるや否や  
明らかでない。

文久二年武市瑞山が吉田東洋を暗殺せんとするや小南五郎右衛門が「夫れは考物だ。一度血を見る時は再三血を見ることゝなる」とて之に反対した。果然瑞山も非業の最期を遂ぐることゝなつた。明治六年武市熊吉一派の吉田數馬が秋澤の許に來て岩倉等の暗殺を主張するや秋澤は之に反対し且つ吉田の暴發を患ひて土佐に歸國せしめた。此話は板垣や片岡や小笠原忠五郎等も知つて居たかと思はるゝ節もある。刺客事件の起るや土佐在野黨（在野黨は皆事實と信じた）の面々は「政府も暗殺をやる。我々も政府に先して大學敢行したがつた」と喰違事件の失敗を遺憾視したに相違ない。秋澤が刺客事件を黙過し得なかつたのは一は此行掛りがあつた爲めと思はれる。

### 第三一 自由國民の黨争

明治十二年秋澤清吉高知縣高岡郡仁井村親戚訪問中突如虎拉刺に罹つて病死した。享年四十一遺骸は旭村杓田に葬つた。板垣退助は彼を評して「戦が上手であつた」と云つた。乍然彼は武よりも文腕力よりも頭腦の人であつた。父祖數代藩廳の吏務に携り清吉亦頭腦明晰良吏の資質を備へ且つ相當の雄辯家であつた。明治初年より文官として中央に出仕せば相當の地位に上れたかと思はるゝも既記の事情の爲め其官歴は割合に低かつた。辭官歸國後専ら靜養に努め漸次健康を恢復した。舊瑞山派と板垣派と正面衝突の時機も亦漸次近付いた。政争の激烈となれる明治十三年となれば彼も亦或は政界に活躍したかと思はるゝも其時機の將に來らんとするに際し突如として病死した。山地元治の初任は少佐島本仲道は大解部河野敏録は權少忠に過ぎざりしも山縣や江藤や伊藤が其初任の低

きに失せるを看破し其後頻りに之を拔擢した。在野の政客たりし河野主一郎、古澤滋等も其後顯官に上つた。秋澤は大石森池知より約十歳の年下であつた。其將來は問題であつたが何を云ふにも彼は再活動期の到來に先立つて突然病死した。

明治十四年板垣退助自由黨を組織するや池知退藏等國民黨の前身高陽會を組織して之に反対し新聞を發行して自由黨側の土陽新聞に對抗し在京の佐々木高行、谷干城、亦池知等に聲援した。安岡良亮の子雄吉、片岡孫五郎の子直温、吉村寅太郎の甥吉村稀彌、同楠本正誠、池知退藏の子春水は國民黨に入り安岡覺之助の弟道太郎秋澤清吉の従弟島田紘多田哲馬の女婿北川忠悳坂本龍馬の甥直寛及び島地正存西山志澄は自由黨側となつた。自由の大義民權の正論池知等が之に對して反對の行動を執れる遺憾の感なきに非らざるも從來の行掛りもあり加ふるに自由黨側に於ても池知の如き重厚老成の士の反感誤解を招く可き奇矯の言動が多少ないとも云へなかつた。

一、海南の英備植木枝盛將棋が下手の横好きで而かも負けるのが大嫌ひであつた。

「植木勝つたぞ」

「なに負けるものか」

「夫れでも王を取られるでないか」

「馬鹿言へ、王を取られたら何だ。おらの將棋は共和政治だ。最後の一人否な一歩でも残つて居る以上勝つたとは言はさぬぞ」

植木の駒が一枚もなくなると「君は強い。確に負けた」と始めて降参した。

一、自由黨の縣會議員K其長男を魯鈍愚郎左衛門兵衛佐（三歳にて病死）と命名した。小學校に

て友人に擲擧されて本人が可愛相だからとて家族が反対すると兵衛佐丈けを漸く削除した。隣人某の飼犬が巡査に吠へ掛ると巡査が怒つて之を打殺し巡査二三人にて其肉を食つて了つた。之を聞いたKが某に

「毎日警察分署に赴いて犬の殺されたは仕方がないが死骸を葬り吊てやり度い故御下渡を願度いと頼んで来い。其間おれが毎日日當を一圓宛やる」

「一圓宛下さるなら仰せの通りやります」

某は夫れより日々警察分署に出頭してKの教へた通りを述べては引取た。約二十日計りもやると分署にても持て餘し某を脅がした。某も薄意味が悪くなつて二十日計りで日參を打切りにすると意氣地無しだとしてKに散々に叱かられた。

一、自由黨の名士宮地茂平は大日本帝國の管轄を脱す地球上自由生宮地茂平と云ふ脱管届を大政官に差出した。

(附記) 片岡直温が滋賀縣警部長となると宮地茂平が一日突如としてやつて来て面會するや否や

「直温誤魔化したな」

と続け様に二三回も大聲にて言ふ故片岡が

「こゝは警部長官舎で己の内には書生も居れば女中も居る。金でも誤魔化したと間違へられては困るからさう大ごえで誤魔化したな誤魔化したなと云ふな」と言ふと宮地なる程とうなづいて

「さうだ。さうだ」

と言ひ様俄かに聲を低くめさゝやく様な態度で

「直温誤魔化したな」

とやる。狼のうなる様な聲が蚊の鳴く様な聲に變つた丈けでいつ迄たつても「誤魔化したな」の連發だ。片岡堪まり兼ねて

「時に何か用か」

と聞くと

「東京に行く途中金が足りなくなつた故五圓貸せ」と來た。

「おれもさうだらうと思つて居た」

と言ひ様片岡が十圓札を渡すと宮地きよろきよとして之を眺め乍ら

「直温こりや十圓じやないか」

と呆きれ顔

「さうだ。十圓だ」

「おらあ釣は持て居ないぞ」

片岡笑ひ乍ら

「釣のないのは判つて居るよ。久し振りであつたから飯でも出し度いがおれはこれから知事の所へ行かねばならぬ故其暇がない。金が餘る様ならどこか其邊で飯でも食つて行てくれ」

と云ふと宮地顔の相好を崩して

「これを皆貰つて構はぬか構はぬか」

と繰返し乍ら退却した。宮地は斯の如く脱線の内に何處となく淡白にして可愛氣のある人物であつた。

筆者等が青年となつた後宮地は時々新聞紙に

「喧嘩口論間男騒ぎ等一切引受ける。又如何なる困難なる國際談判と雖も萬國政府の依頼に應ず」

と廣告した。喧嘩口論間男騒ぎは如何か知らぬが國際談判は萬國政府より依頼がなかつた模様である。宮地としては「冀北馬なきに非らず伯樂なきを如何せん」の嘆があつたかも知れぬが夫れは宮地の心得違ひだ。失策は之を依頼せざる萬國政府に非らずして日本語にて之を廣告せし宮地にある。若し英語を以て之を廣告したならば宮地も或は各國の競争的依頼に忙殺されたかも知れなかつた。

(附記) 宮地が誤魔化したと言ふは言ふ迄も無くうまくやつたなど云ふ意味である。宮地は片岡の父母を知らぬ故片岡が巧に運動して出世したと思つたであらうが決してさうでない。片岡兄弟は世間周知の通りの人物である上父孫五郎母信子亦憐出の人物であつた。孫五郎は武市系志士の一人にて武市瑞山、吉村寅太郎、那須信吾等と交際し田畑を賣りて志士脱藩の旅費を給したり志士を宿泊させて接待したり脱藩の便宜を與へたり長州に密行して木戸、高杉に遇つたりした。夫れが爲め家資窮乏し孫五郎の死せる頃は債ありて産はなかつたが信子亦頗る賢夫人

にて勤勉家計を持直し二兒を教育して斯る立派な人物に育て上げた。瑞山系人物の廟堂に立てるものが此夫妻の事跡を知れることも直温が警部長となる一便宜となつた。

一、自由黨の未輩の内には喧嘩を警官に挑み「巡查欺して免職させて車引かせておらが乗る」と云ふ様な暴言を交番の前で吐き散らす人もあつた。

一、最も甚しきは演説會にて「〇武〇〇は〇〇だ」と放言し入獄牢内に病死した。

政争は随分劇しかつた。選挙の際の如き怪我人も出来れば死人も出来た。兩黨の未輩中には往々

「死を決して〇〇黨に入る」

「死を決して〇〇主義を取る」

など、廣告し又しても命の安賣りなど、東京の日本新聞に笑はるゝものもあつた。夫れに關してうそかまことか知らぬが幡多郡の或中學生が面白い話を筆者に語つた。

AがBと共に幡多郡の或山道を通つて居ると向ふから短刀をひねくり乍らやつて来る二人の壯漢は言はずと知れた或政黨の決死隊である。政黨の決死隊たることは判つて居るが困つたことには自由國民何れの決死隊たるか判らない。従て出會した際どを云ふ具合にあいさつしてよいか更に判らない。AもBも政黨に無關係であつたが其趣を答へても政治に熱狂せる壯漢の怒りを招かぬとも限らない。Aは回れ右駈足で此突發的大難を免れんと言ひ出したがBは追撃を憂へて之に同意しない。何か成算のあるものと見え「大丈夫だから」と云ひ様Aの先きに立ちて壯漢に近付いた。愈すれ違ふ頃になると壯漢の一人は短刀の柄を握り詰め乍らBに向つて「自由か國民か」



と聞いた。Bは豫期の通りと思つたのか左してあはてたる様もなく平然として  
「勿論我黨よ」

と軽く言ひ棄て乍らさつさと通り過ぎると

「さうか」

と言つた切りで別に追ひ掛けても來なかつた。

池知は明治二十三年六十歳を以て病死した。池知は維新後大石の意を體して長州に赴き前原一誠に面會せしと見え左の手紙が残つて居る。

奉拜誦候池知安岡(權馬か)二君御來訪御近況奉拜承益御勇猛爲被在奉賀候東京にては勿々奉別船中遂に粗糲不得拜晤遺憾に奉存候然處兩君御直話拜承猶又愚存の筋も不餘蘊底甲上候御直に御聞知奉願上候自今以後不斷御教誨奉祈候小弟も決而落膽不仕乍微力盡力可仕申候時下爲天家御自重奉專禱候 頓首奉復

九月二十九日

一誠頓首

大石圓様拜呈

大石圓とは彌太郎の改名である。

### 第三二 熊本籠城の状況

甲府争奪の際秋澤清吉の命を受けて本陣に使せる別役成義は明治二十三年陸軍少將となり明治三十八年牛込鷹匠町の自邸に病死した。土佐出身武官の明治三十年以前に少將(其頃の少將は今の大将より尊敬された)となれるものは谷干城、山地元治、土屋可成、別役成義、坂井重季、田中光顯の

六人にて其内舊輕格は別役一人田中は山縣系他は皆舊士格である。

別役は秋澤の下島の住宅の東約三丁垣添に生れた。甲府の争奪後今市、白河、若松に轉戦屢々軍功を奏し凱旋後土佐に工兵を置くことゝなるや人選の結果頭腦緻密算數に長するを以て別役を拔擢して其掛りとした。明治四年二月親兵隊東上の節別役は其工兵を卒ゐて出京同七月工兵大尉となつた其後熊本に轉任西南戦争の際谷始め樺山買紀、與倉知實、奥保鞏、川上操六、兒玉源太郎、品川彌次郎、小川又二、大迫尙敏等と共に熊本に籠城した。

熊本鎮臺の兵は神風連の騷動後士氣全く沮喪して居つた。熊本の人民は鎮臺を蔑視して糞鎮糞鎮と罵つたり乗馬の尻を子供が竹でなぐつたりした。薩南の形勢愈切迫するや司令長官谷干城始め一同色々評議したが此沮喪せる兵を卒ゐて城外に出て戦ふは到底不可能故薩軍が蹶起したら籠城と云ふことに軍議一決し招魂祭を催し餘興に角力などをやつて士氣を鼓舞した。

明治十年二月十八日午後二時非常號砲三發城の内外に鳴り渡ると共に各隊其守りに就き塹壘を築き木柵を設け外泊將校の家族も悉く城内に引揚げ専ら防禦の準備に取り掛つた。市民は騒ぎ出し老を扶け幼を携へ家財を運ぶやら逃ぐるやら女子供が泣き叫ぶやら名狀す可らざる大騒ぎとなつた。薩軍は既に熊本縣内に亂入した。

同十九日肥後の池邊吉十郎一派が給仕を使曠して城中に放火折柄激風の爲め火勢頗る烈しく見る間に四方に延焼城内に蓄積せる米穀鹽菜等悉く焼けて仕舞つた。城は高き石垣の上にあることとて水を運んで之を消すことが出來ず兒玉源太郎等必死となつて彈藥を取出した。火事は午前十時より午後三時迄續き火光天に沖し焰炎空を掩ひ物凄しい光景を呈したが天守閣は落ちなかつた。隅櫓は焼け

落ちたが外へ焼け落ちずして内に落ちた爲め彈藥に火が移らなかつた。彈藥は焼けなかつたが糧食が焼けて仕舞つた爲め其補充に百方奔走した。市民逃亡後で購入意の如くならぬ爲め各隊にて適宜購入することとし何れも草鞋掛けで近在を駈け廻り粟でも米でも豆でも鹽でも手當り次第に買ひ入れ買つた品は城の門前に山の如く積み上げ兵糧は火災以前よりも却つて多くなつた。

薩軍より「政府に訊問の筋あり西郷以下熊本を通行するに付き通知する」旨の書面及び中原等の口供書を携へたる使が來たが樺山資紀之に應接し「兵器を携へ隊伍を組んで來るものは一步も通さぬ」と斷然峻拒して其使を逐ひ歸した。

二十日より二十一に掛けて熊本市中殆ど灰燼となつて仕舞つた。戦ひの邪魔となる爲め官軍も焼けば薩軍も焼き拂つた。

二十二日の未明より戦が始まつた。薩軍も小銃を發射すれば城内よりも發砲して之に應じ砲煙天を掩ひ白日猶暗き状態であつた。敵も味方も必死となり薩軍の決死隊は刀を提けて石垣を攀づるものもあれば彈丸雨飛の間を潜つて城中に切り込まんとするものあり城兵は必死となつて射撃せる爲め右手の食指に浮腫の出來た人もあつた。樺山資紀は胸部に重傷を負ひ與倉知實は戦死した。

二十二日より二十三日に亘りて激戦があつたが二十四日より敵の攻撃が頗る緩かになつて城を遠巻にする模様故城にても籠城の準備を整ふることとし敵彈を避くる爲め城中に溝を堀り溝を通つて往來したり女達は溝に天幕を張つて其中に住居したりした。與倉知實の夫人の如き夫の戦死も知らず天幕の中で女子を分婉した。

二十二日の暮より植木方面に銃聲が聞へたが其後聞えなかつたりした。其後海岸の方角にて砲聲の

聞ゆることもあつた。夫れで城外に使を出すことになり二十四日夜半穴戸正輝を出した。穴戸は紺の腹掛け紺の股引職人の半天を着込み手足や顔に鍋炭を塗つて焼跡の物を探す恰好をして出て行つた。貴様何所へ行くかと薩軍に問はるゝと「私は町の者ですが少し金目の物を焼きて仕舞ひ御覽の通り探して居ます」など云ひ乍ら敵地を通過した。二十六日夜半谷村計介を出した。谷村はすゝを身に塗り百姓の姿をして出て行つた。穴戸は使命を果し城に歸つて來たが谷村は再び歸らなかつた。谷村は薩軍に捕へられ夜半番兵の睡眠中繩を切つて逃げ出したが再び捕へられた。偽つて慄へたり泣たりすると薩軍は臆病者だと物をつかぐ人夫にした。隙を得て逃走し官軍の許に赴き陸軍少將野津鎮雄に遇ひ使命を述べたが其後野津の許にて休養中乞ふて戦列に就き敵彈に中つて死んだ城中の糧食は段々乏しくなつて來た。傷病者は段々殖へたが其傷病者に食はすものがない。魚は忽論ない故乾物を菜にしたり池の鯉鮒を釣つたりした。最初は戦鬪員に米飯を食はせ非戦鬪員に粟粥粟飯を食はして居たが後には戦鬪員にも粟飯を食はすことにした。馬が負傷すると片端から殺して其肉を食ひ骨を「ソツプ」にした。敵と城兵と距離の近い所では敵の歩哨が「米があるまい」と怒鳴ると城兵も「馬鹿云へ薩摩芋斗り食ふ貴様等と違ふぞ」とやり返した。タバコ好きはタバコの缺乏に苦しみ終りには大根の葉や茶の葉を刻ざんで喫したりした。

徵兵のこととて色々の職業のものが交つて居た。士氣を鼓舞する爲め藝のある兵が小屋を設けて素人義太夫や浪花節を語つた。されども兵糧は段々乏しくなり砲や銃の音は聞ゆるも援兵は中々やつて來ぬ。終りには「酒は見えな煙草は未だかいな旅團は植木で音斗りしよんがいな」などと「しよんがいな」節を語ふ様になつた。谷司令長官は斯くてはならぬと自ら先頭となり突出せんと云ひ

出したが一同之を止め陸軍少佐奥保鞏が一大隊を率ゐて突出することとなつた。

四月八日未明敵陣を牽制する一隊が先に立ち城外に突出する奥少佐の一隊が之に次で城門を出た。牽制隊の斥候が忍び足で安政橋の邊りに來ると橋の邊りに篝火を焚いて夜寒を凌いで居た一團の薩軍味方の勢と間違へ「オイ何處に行て來た。敵は來やせぬ」かと聲を掛くる故「大丈夫だ」と答へ乍ら直に引返して其旨を本隊に急報し本隊はそれと云様直ちに敵陣に呐喊すると薩軍は不意のこととて周章狼狽した。突出隊は其隙に安政橋の上手を押渡り川尻の官軍の許に達した。

突出隊が重圍を突破せざるを擧げる約束であつたので城に残つた將卒は今か今かと水前寺の方角斗りを見詰めて居ると濛々たる朝霧の間から合圖の「のろし」がぼうつと擧つたので一同ほつと息をついで安心した。

四月十四日城を去る數丁の所に銃聲が聞ゆると思ふと一隊の兵が続いてやつて來た。これぞ山川浩の卒ゆる援軍の先鋒であつた。籠城以來實に五十四日目であつた。其間別役は城内に居て胸壁や溝渠の工作等に絶えず苦心した。

智仁勇兼備の將軍と云ふは實に別役のことである。東毛南奥の戦ひに於ては屢先頭に立つて彈丸雨飛の間に馳逐した。兵部省出仕後は本邦工兵の發達に貢献する所頗る多かつた。刀劍鑑定も堂に入り理財の才にも頗る長けて居つた。至つて親切な人にて乃木將軍が例の聯隊旗事件で頭を痛めらるゝや別役は懇々將軍を慰め將軍の意を安らげた。又秋澤清吉、吉松秀枝等舊友の遺兒を遇する頗る深切であつた。自分の子も同様色々其面倒を見た。勇敢にして圓滿圓滿にして親切申分のない人物であつた。

### 第三三 土佐勤王黨創立者の未路

大正五年大石彌太郎高知市鐵砲町に病死し遺骸は香美郡野市村に葬つた。享年八十八、年齢に於て不足はなかつたが宇田滄溟先生の大石圓翁傳序文に「陋巷に窮死す」と書いてあるを見れば其家計は餘り豊かで無つたと思はれる。奥羽より凱旋後新馬廻に拔擢され明治三年末迄藩廳に出仕せるのみにて爾後隱退的生活を送り不遇の人と言はなければならぬ。

大石は何故に明治四年以後中央政府に出仕しなかつたか筆者之を知らぬ。従て「出仕せざりし理由如何」と云ふ質問に對して「斯く斯くの次第」と徹底的に説明し得ざるも餘りに酷評を加ふるものに對して多少の反駁を試み度いと思ふ。

(評) 大石は頑迷固陋世に遅れて居つた。

(駁) 此話は明治四年前と明治四年後に分つて論ずる。

明治四年前 彼は安岡覺之助細川潤次郎と共に幕末當時土佐に珍らしき洋學者であり新式洋銃の輸入者である。安塚の戦の際土佐の軍隊が大島奎介、土方歳三、立見尙文等の卒ゆる新式の脱兵隊を破つたのは當時日本に三門しか無き新式の大砲を中央に据え新式の戦術を應用して敵と戦つた結果である。其參謀長は大石彌太郎と秋澤清吉である。明治初年に於ける土佐の軍隊は薩長よりも遙かに進歩し未だ薩長になき新式の騎兵や工兵さへも備へて居つた。土佐の軍隊が親兵隊として東上の際には日本刀を全廢し洋劍を使用することとなつたが其際士官日本刀の廢止に反對を唱ふる者は一人も出なかつた。此等の事實に徴すれば大石が肥後の神風連同様の極端の保守主義者に非らざるや明白と云はざるを得ぬ。

河野敏録も尾崎忠治も小畑美稻も瑞山血判狀署名者の一人であつた。彼等は大臣や樞密顧問官や華族の榮位に上つた。明治三年末以前に於ける大石の頭腦が河野、尾崎、小畑より世に遅れて居たとは吾人到底之を想像することが出来ない。

明治四年後 野市の僻隅に隠退せる爲め中央出仕者に比較せば次第次第に世におくれることとなつたが夫れは致方がない。

(評) 頑迷でなければ何故終身結髪して居つた。

(駁) 此話は明治十一年前と明治十一年後に分つて論ずる。

明治十一年前 慶應三年坂本龍馬が後藤象次郎に親しむや在藩勤王黨中には「後藤にだまされた」とか「買収された」とか云つて之を罵る者があつた。大石が東征より凱旋後新馬廻となるや彼が前年武市と同罪に處せられんことを願出しにも拘らず又東征軍監として硝煙彈雨の間に驅逐せしにも拘らず「大石はするい人だ。元來あの笑ひ方が氣にくはぬ」と云つて大石を呪ふものもあつた。(元治元年六月志士會議に於ける最有力者は大石彌太郎と樋口眞吉であつた。此會議の模様大石等の意見は獄内の瑞山にも通知し瑞山も之を了とせるに拘らず其消息に通せざる未鞏獄中獄外の通信の出来ることを知らざる未鞏中には大石が武市を見殺しにしたとて大石に對して不満の感を抱いて居たものもあつた。夫れが斯る誤解を生ずる原因となつた。)野市の僻隅に居乍ら卒先して髪を斬らば「仕官がし度いから斬つたに相違ない」とか「世にこびる爲め斬つたに相違ない」とか云つて罵られぬとも限らない。又彼を首領視し居る香長有志や西郡結髪組の信頼を失はぬとも限らない。中央に出仕せば兎に角野市に隠棲せる以上世に先じて髪

を斬る必要もなきのみならず寧ろ世におくれて斬つた方が却つて安全であつたと思れる。

明治十一年後 明治十一年後は全然隠退的生活を送り老齡にして最早世に求むる所なく今更髪を斬る必要もなかつた。一面に於ては「結髪殊に總髪は自宅でも結び直すことが出来比較的手輕である」とか「昔日得意時代の名残りで斬るに忍びぬ」とか「結髪して居るとあれが大石彌太郎だと云つて知るも知らぬも尊敬する」とか云ふ點もあり一面に於ては何等斬髪の必要もなく旁終身結髪して居つたかと思ふ。西郷隆盛が明治二年頃坊主頭になつたり淡中新作が鳥伏かごを冠たりしたと同様に深い意味はないと思ふ。

筆者は「大石が頑迷であつたか否かは結髪散髪によつて決す可きものでなく彼が開國郡縣制廢刀令改曆徵兵制に反對せしや否やによつて決す可きもの」と考へる。大石は此五問題の何れにも反對しなかつた。爲念寺石先生にも伺つて見たが先生も矢張り「此五件に反對せしを聞かずこれはなしと考ふ」と云ふ御答であつた。要するに大石等香長派は反政府黨であつたが神風連ではなく前原池邊同様の反政府黨であつた。

(評) 然らば何故中央政府に仕へなかつた。

(駁) 左の事情の爲め中央政府に仕へなかつた仕ふることが出来なかつたと思ふ。

一、第二六及び第二七損一號に掲ぐる事情。

明治四五年頃は明治初年と違つて年齢の長せる程就職が困難であつた。

二、板垣對小南の人事關係。

三、後藤對板垣の人事關係。